545

三百箇條中

一茶湯の事いろ〳〵あるといふへとも数奇と云儀を可知

又数奇ニも本意あり之茶湯者をも茶とい へとも

先数奇と云名目并数奇の本意此字にて知るへし

臨済曰数奇ハ数をしらさると云ふを東山慈照院殿

時代ニ結縁を好ミ茶具を数多寄集翫ひ給ふ之まゝ

数奇と云心ハ寄ハ寄好する事の心一休和尚に得とある曰

茶湯ハ仏法の外不之万事仏の御示寄好を用る之

又寄の字ハ寄偶の寄之陽の数也之陰の数ハ偶なり

茶湯ハ十分を好ムハ都て皆中の数を用ゆへきことならぬ
を本意とも云住田右の説とも一通りなれハ今も
いつれも皆後人の臆説之数寄ハ万葉仮名之嗜の字之
何事にも好を数寄と云茶道を嗜を数寄者と云
なりさして入用の事にて附会なりしを

二　茶湯ハ仏道茶寄道をうつし右をうし中働に詠哥
大概ノ事情仏新道先詞簡を用ゆとあるも
茶湯ハ仏道茶歌道をうつし之情仏しし定家卿
出遊はしく道具ハ当時の紙合ハ皆情をあつらしく
まりたとしとまでらく茶湯に叶しとて紹鴎定家卿を
崇敬して定家卿の色紙を用ひし一休の墨跡に参悟
の墨跡とあつかつて絵を掛く珠光より是をもつて
参学志るにして是より古を用ひし茶湯を
禅法の事ニ入りて本分の地を観る為なり

三　茶事の儀式には為すに置て是又道徳家
万事に其の人了なひて為さしめ茶湯ハ茶事の
人となるように伊勢物語に
みるあかるかハいつくと掉さしてゆく我の事ありぬ海士なれ

洒落よくかすみたり道安の歌よ
思ひきや拾ひの茶乱茶湯とうときものとハ志らし答ありとハ

四 身のうち浄り此事

心も身も唇真すきまりてあららぬかすり

五 路地の住居色々ある也又露地とも申ことあるべし

路地の様々まつ無向をとらへて我か物之山林或ハ山寺或ハ夏色の寺也何なりとも我好尓の無向をとらへて我か物之口伝 露地ハ小さきをいふ路地ハ大きなるを云といふ説もあり

六 さて路地むかしハ云し事

外路次昔ハ云し利休時分ハ外より無寺とて待合なきし是ハ金森出雲守重繁の門乃向ふよ屋敷之し大猷院様（此ハ家光公也）尚少より初て待合を造られしとかや是より待合出来始て外路次も其より有之儀外路次ハ路次か何と云し京も云し扱よまの外もらく造まで内へ入りて同様にて何のさんもあるき之外ハさくらつなとして内へ入りて景のかわる様よ志るすと知り

七 木のさり竝ひ云ふを竝ひ又ゆかむを竝ふハ又似たるを

木の植様同木云ふなり竝を竝ふハ又ゆかむをこきしふ事なり

似よりたる姿ハ景中くるしからずといへども山木又ハ其
手洋の真向ニ当てしとも姫松なとを植ることハ同しからず
假り木をこしらふハ深山木をうつしたるべき木あしきと木
えらまれて植ましへく天然と見へざる山の木立ところ
也ニ植へし下草も深山ニ生ずる下草を用ゆへし
落葉の節後を定めて木の葉を木の下ニ置へし
雲案なとあつかふべき事ハ其家ニよるへし

八

石ニ口ありあしつき有石陰ありて居かたあり
飛石ハ利休ハわたりを六分景気を四分に居申候由織部ハ
渡りを四分景気を六分に居申候由先飛石ハ渡りの為
なれハ渡りを身一ト足と縁まてもまつすくに同し格
よつきてハかさくはそまじくいへわたりを見て縁まても
無用の事なりてわさと見つまきとハ似り物ニてあしき
何も本ならても下草よりてもあまりはをよき石あつし
まきを京ハ石の形合より西へもとまりかへ石を立
きたりすへつくき据て渡りを身ニてまるまる
多さハ姫ふ之悪きを石ニて見るよく居へし其時
搦きさとてもあるとこちなと石を見つまきをわさりの事

高さハ好ニ
水つかひの石ハ前石ニ掛へてあつかひの上ニ手
をあらふ縁好のよふさ石を居石ニ居なすなり高さハ下いにし
なかりハさみ湯居の上ニよりなの面まて壱尺二寸
斗ニ居へし湯くよ上ニ下り自由なると本意ニして
高下の寸尺ニ叶ハぬ事あり其ときハ石の
高六七寸ゆりあきて石さきつよ並りきとふきあれま
田ゟ抱て敷居の中ハ石居より板敷の上まてあて
壱尺二寸之程ニ湯居より鉢ニ石まて壱尺二寸

水ニ有る時ハ地より石の上まて高さ一寸右の程の
石高さ一寸と仏説ニ次の石をそれ有る足をおとし
石を云此石ハ程の石の面より壱寸五分斗下り是此石を
し石の次ニ有る石をかの石を云此石ハおとし石の上
より壱寸五分ほとて有る石の大小ニよりて高下有石
次第すニ叶ハぬ事ハ有る此の上石の高さ抱石次の
飛石の高さニつより有る石之程の鉢ニ石高さ弥
の上石の上より一寸おとし石の高さ二寸五分ほとの石の
高さ壱寸五分水ニ有る時高さニ而て社家所刹を

姿恰好よろしき三部建とも去ての踏段の地形の高下
石の大小ありて寸法ハ附かたしといへとも
一中履掛の石ハえんの高さ壱尺七八寸斗之時ハ中之
段ハ上比方に上客こしをかくる石をも中之高さ
えんのよこえより石の面と壱尺二寸斗にもすゑる
よく腰の掛よろしき形にも居る事身一二寸法に
かへるへし寸見より次々の石踏次中の飛石へ
見付よろしき据て居る石の見ハ五寸六分或ハ四寸七分
また石の恰好よろしき事ともあくへし其中々の事より

踏次の長き時ハ此石に石段あるとも何ても或ハ二三組
組の石もある也

一中くゞりの客石ハ腰居より壱尺斗もあるゆへ内の
外より之石ハ壱尺壱寸斗高き石又壱寸斗下るなり之
此据やう手燭の居りハ形よく其の平かなる石なと居る也
手燭ともいふなる石なり

一刀掛の石ハ大小ありたる物をつりて其のよろしきを見て居る様り
たかさ五六寸形よく居る事くゞり刀掛の高さ不定
合大小の掛よろしき形よく居る事也 一昔ハ刀掛の高さ

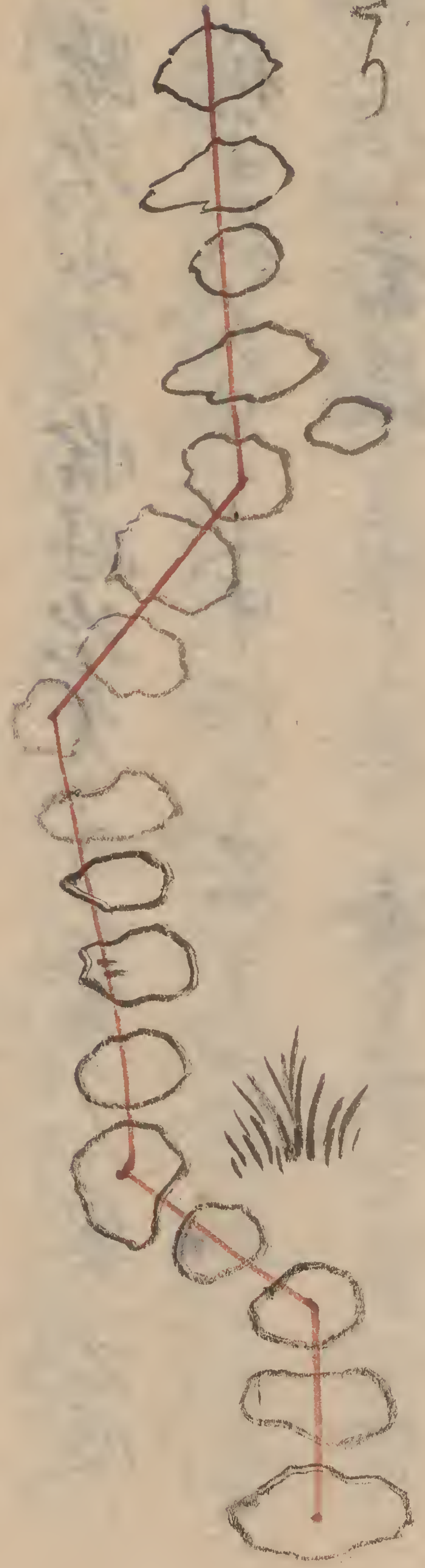
六尺八寸に造り山水石も高く居へ候ハ五尺八寸くらゐ
に造り候ても内も内外より大小の所によるへき様に造り
申山築石も高さを意に高下寸法にかなふ
へきもの也縁先とも石の置やうにて見合あしく候
此刀掛の石組の方よりちかき穴あり先の条ちの
あふの所にて志るす也

一石段狭き広き高あると云ハ長き石段ハ高く
短き石段ハ広く広くと心得へし縁先とも長き
石段ハ猶広くても狭く見ゆる也短き石段ハ広く
狭くても広く見ゆる物なり此所の所習よく叶ふへし
殊更露地次第にて格好次第にて能く石組要の石段ハ
縁組門の根より石を高く中にも石を又石のあいにて石をと
柱の所出て打之前後も同し根より高き石を並へ候上ハ
平の内にてお庭組ゐさく水の流れつゐの上さ根より
高き石ハ上ハ〳〵の様へ長き柱石なとと並へ又一方よ
こまかなる石なとも並仕様ハ気を付つく左右前後お
ろし根より高し根本見合へし

一 切まわりの段ハ柱の所出ての段所あまりに造り中に

ふきころの石やと云伝る之飛石とても あまり丸きさしは
つまづきあしくは渡りにくき故に上を平らなは
お丸めにて造りけり石屋ハ利休大徳寺にて始りし石屋なと
この法よりはじまりけり

飛石わたり
三つみ

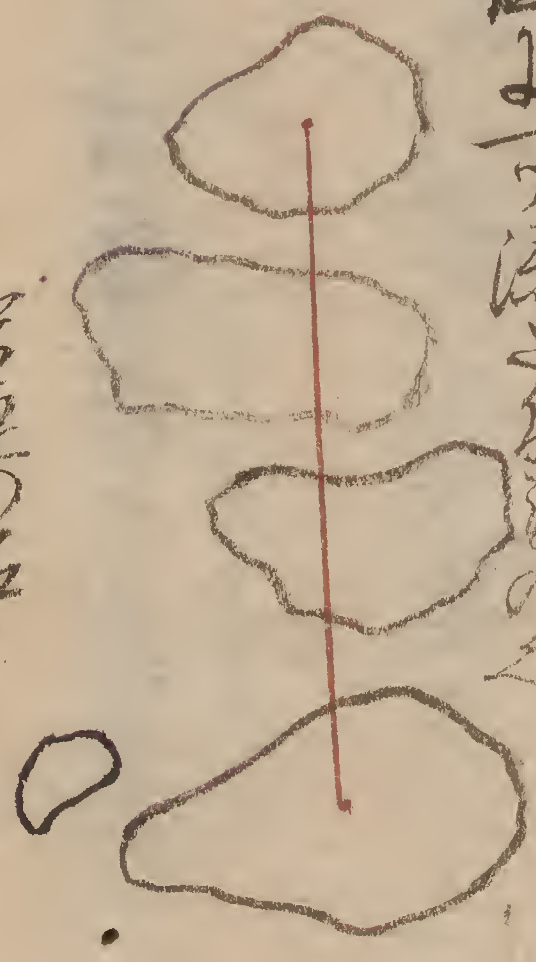


右のめくりゆるき三つ手と用ひ来りとも法にてひのわたり

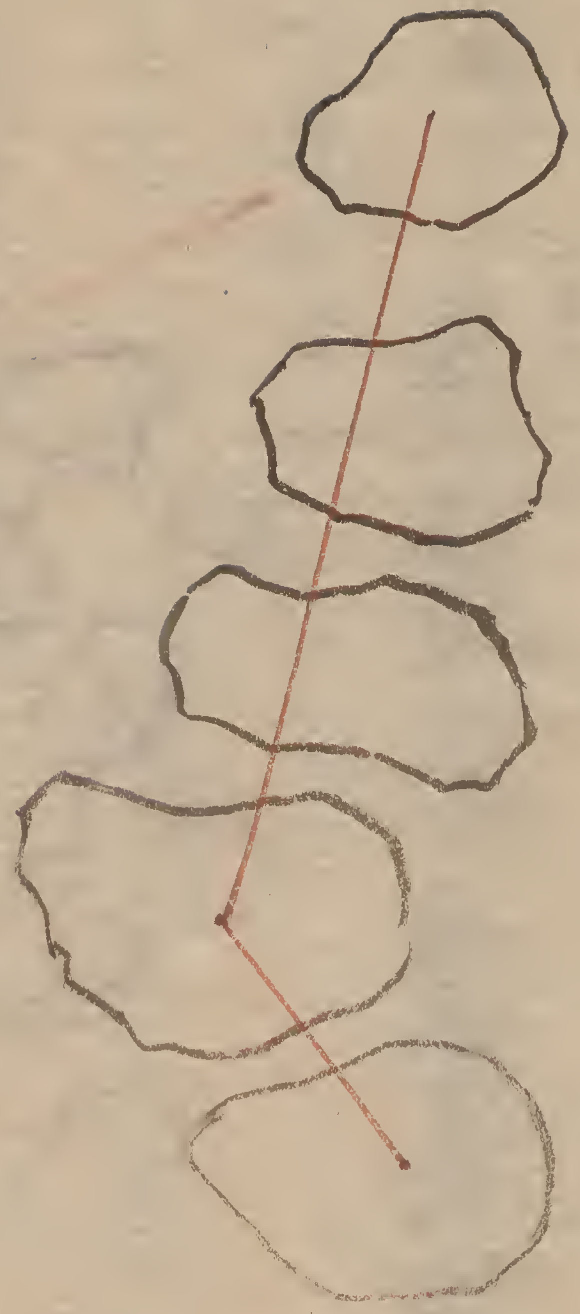
余りのごとくにろくよ居へ此之渡りのあしさハ京家
なりけるとぞ

如此つまひあしさ之

三つ手延の石　二石組にて一つ添さるとの之

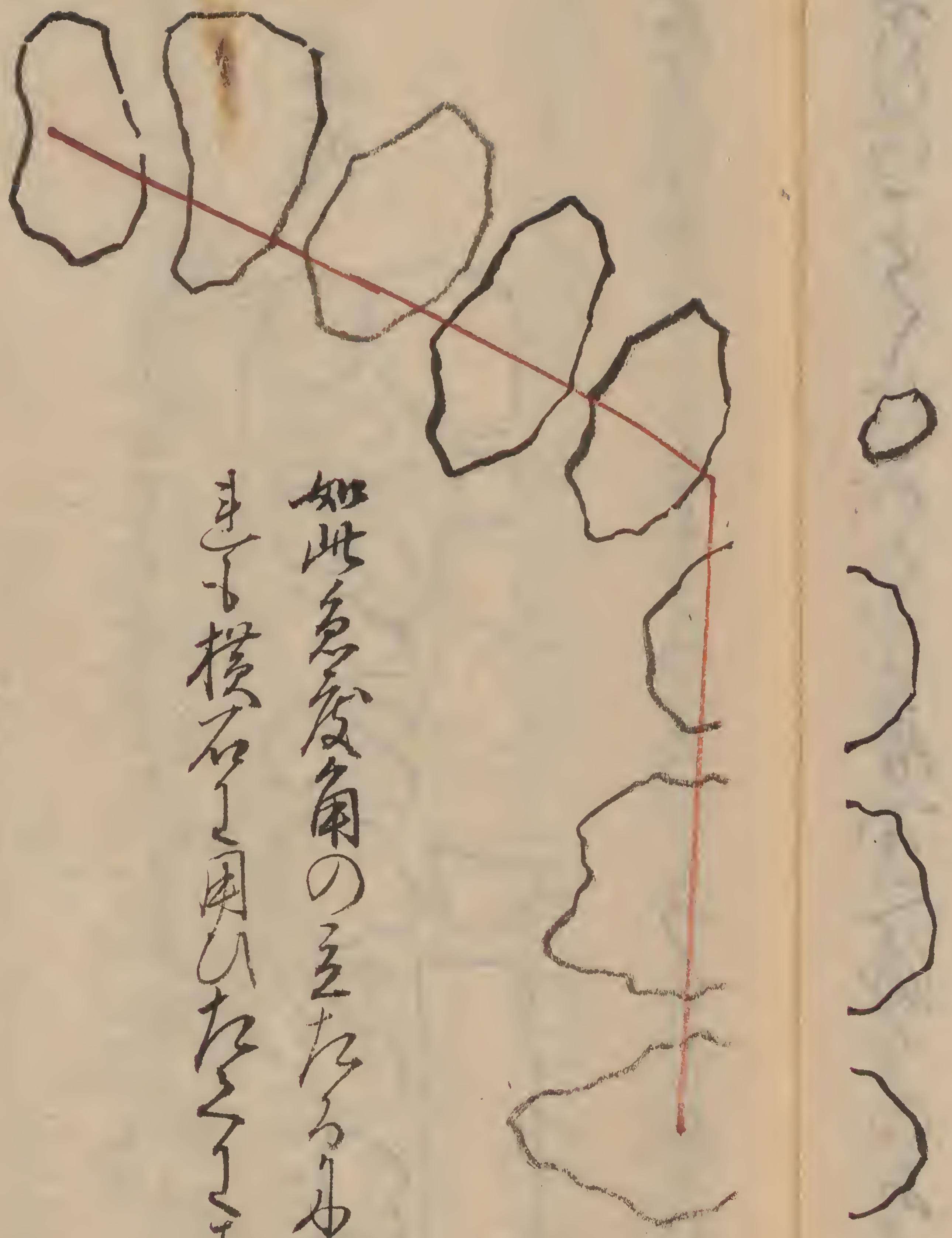


雁連の石



五つ連の石ハ罕組ニ可居添ゆる物なり

かきつゝみのしゆきまわる所ハ罕連なと用ひてもよし

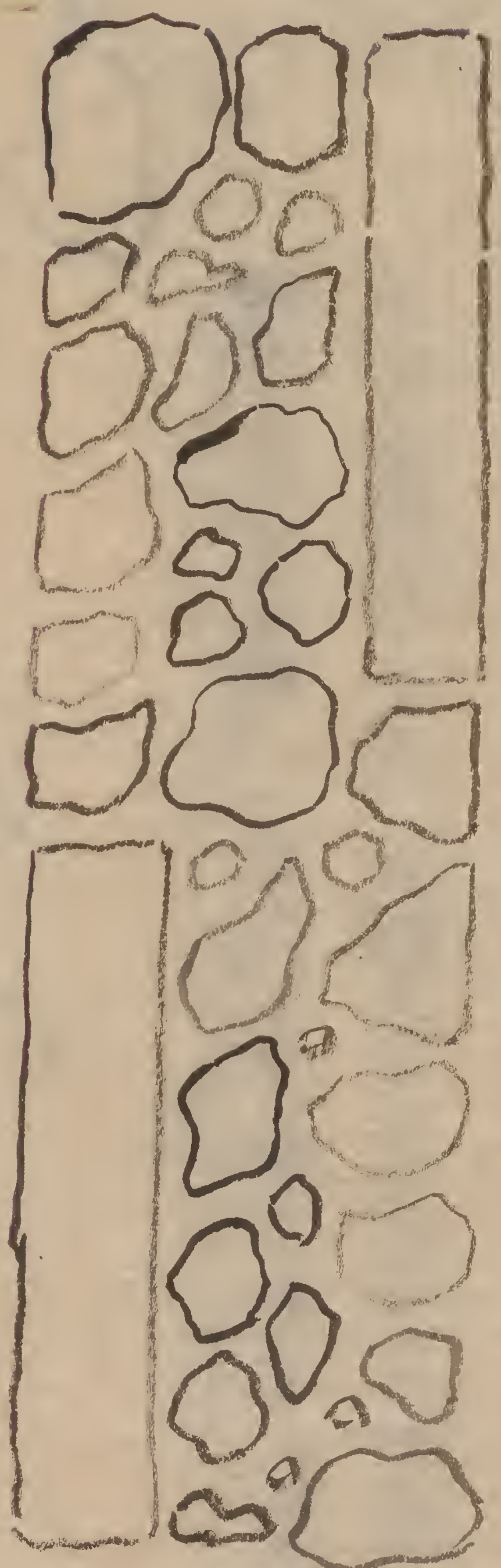


如此多度角の立たる所ニあらまし石
まゝ横石にて用ひたるにまさゆるを嫌ふ

ちさ石を壁にて婉むところハ横にまさへ置し
はしをこさふ

茶屋同飛の石ハ中に茶の方ハ石とるさ込さところ也

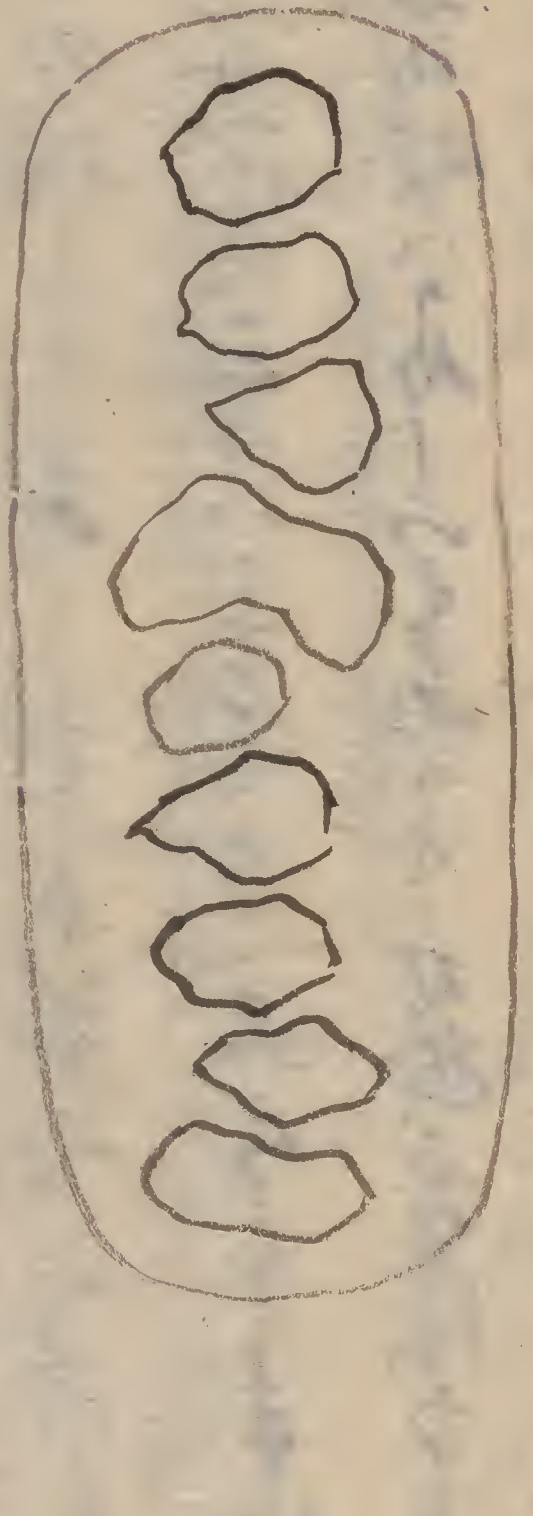
石段



右石段通りよ大き石を長くつくもあり又かくし

九さ石通りよ通りとちそきろもありて中に出石を入りもいつて飛りて夫より利休入りもあり

かすみと飛の段



九

石をうろうそろきさ本とくひ云二三本二ツ石用ると

捨通し

石をうろうつ高本とくひろしろとうろうもあり

の用ニ立石為之中ゝこれの三角ら前ノ御掛の三角ら前
見ゆる上りの前ハ水石の三角ら前刀掛の見通し也
前のあかり此為之御座候とも前御用ニ立石ニ者之候
路地迄まての御座候あしき之半扇二つの用ニ立
三の中ニ而て二石捨石三石ハまて候之又ハ手水
路地の用ニ立石時ハ見るよあかり刀掛石除き
の方ハまてる之路次つき見ゆる御手水
御物あり先右の石組よく可置まてし右の通り
ハま之候とも有り為灯籠あり出候ハ悪敷候前

後ニおきき本方と植候てあれしらい候てよし
一 燈籠ハあかりの為左右の前方前之まで候とも路次
見ゆる右の前ニ有之とも有之左組の時ハ前
方まても見合路次の前方ニ置なり
一 鋼ハ燈籠鍵く入中ニ前ハ燈籠長く入中ニ
客長居の為前ハ火を待石の為ニて灯ハ
火ら石組ニ立置之前ハ大をきし風おそれ
もとり水ととまて二置之
十 本燈籠の石組所有之 秘中ニおあり

本紅絹ハ秋ワり用て裏ハ縫次より下迄に左近座へ
右縁の縫中されに亘る本紅絹も秋の為ぶまむとても裏も
長きの裏迄に左へ縫次の京ゆも寺りにまりて本紅
絹も裏迄に寸ハいりと縫中に左を度中にハ成
刃も迄ても不経に利休へハつひき縫中にへとも刃りれ
上文ハ石のすこの上下との上迄にても継りしんと左を度
長中に未より右縁裏手も本紅絹まちり迄に中に也
右の縁より裏も裏迄に絹私の中分とりま右

十一 縁掛高さ刃とハゐ廣さ長さ刃ともいすし

腰掛高さの定めなし 帯ハ中人の襖迄にてよろき
刃とまちる之左右高さ人のよきほとすまハ白き
衣人よまろし白く合れハ高さ人よまろし未氏中の
人すそ極め長中に左廣さ長さ好次第

一 同襖掛 猿下七尺寸 新柳下六尺寸白さしの出ハ七
尺余

一 襖掛幅壱尺寸より壱尺八寸之縁の高さ壱尺寸まで
壱尺八寸と右大徳寺の寸法之是ハ切て白ゐ也

十二 右しりきまて水引に平し

炎天の時分ハ路次に水を澤山に打木の葉も露落せん
落るほとおもふしつきを板まてかゝりもよく走し也や
甚暑の時客を路地に待せ候もいつくをよ涼手をかけ
つけ為に腰掛へも水をうつし置也腰掛の内ハ
くたをたるし明置(?)数客中立前にもしつきをさせへく
飛石にハ中立の時分にもしつきも[illegible]申か宜しき是わ

十三

笠を懸ル釘ハ腰掛にいふ口傳あり
口傳にしてそれもかしらのさゝぬ程をよく[illegible]
くゝるを入りしたるさも見る(?)打のうちに入る

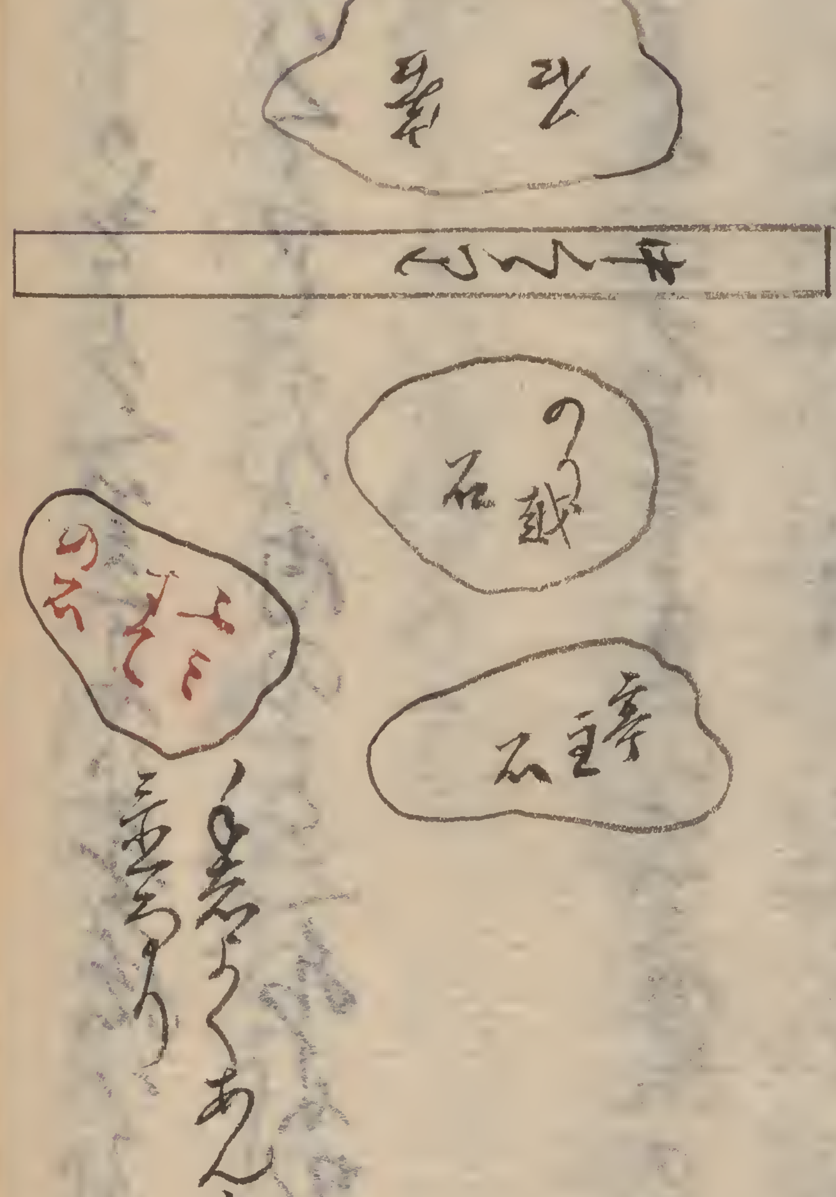
あり笠をとりて掛てもかきよる之笠ハ外懸なりにて
常の懸かけしは右ハくゝりより内の手之所に掛かゝりさ
せ(て)おくへきなり

十四

のり越の石ハ客の石亭主の石居様口傳あり
中くゝりの外にある石を客石と云内にある石をのり越石と云。
○亭主方にある石を亭主石と云のり越とく亭主石の外にあるを内と
△また亭主石と云△
客石のり越石ハ常の石より(追)たかくまして客石とくゝり之
の石ハ至すも廣く明けてを内の外ハ越石ハ石を狭く
亭ハもまゝ(中ハ外つまり)ハ内廣く用様まさめ之
又ハのり越石と亭主石と居ゑ[illegible]て仕置候時ハかし

大石を用ゆる中ハ客石のりこへ石亭主石此石とも同し
据やうなれとも用る客石ミつきなる時ハのり越石ハ亭主石ニ
ても又外ニ用ゆる時ハ同じ大きさ石なるとも亭主石中ハ刀掛
の石を石あらハ上るりの石も同じ据やうなるき石をきとへ通し

中くゞりの図



十五　雪隠の石居

雪隠の石昔ハ同据なる石を二つ置ことへ中ハ道安より据乃
石を大きさなる石を居据さんく石をきとへ中ハの
こしをハ小石なるとハ根石をし据すてあしくハ大石
一つつきさよとまろとよ力有しハ之を根石みて据事よく
ハ前後の石ハ此前据ともも次第ニしろハ石なりの
もいろしハ

砂雪隠石之図

一 茶石高さ四寸五六分から二寸迄

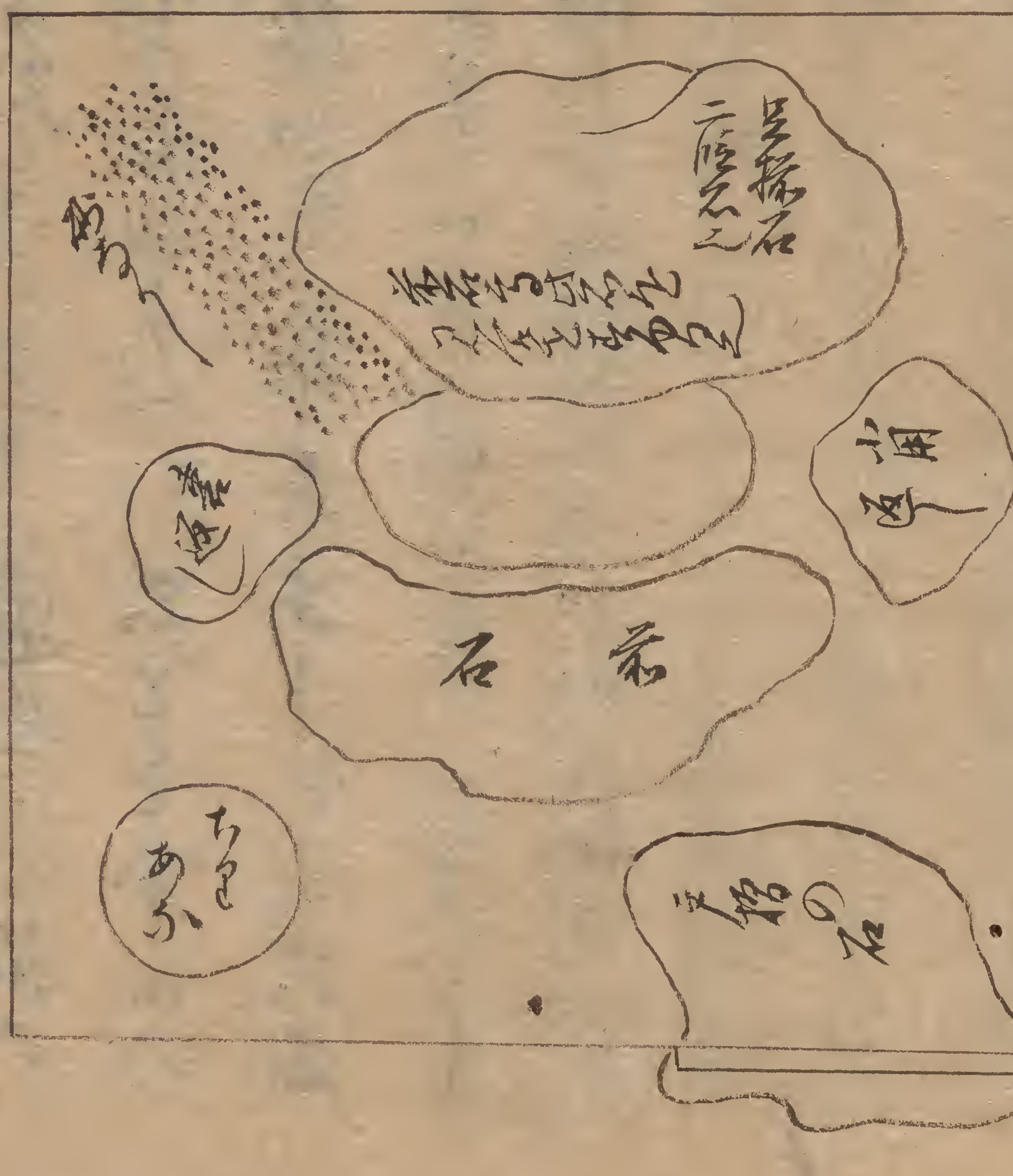
一 足掛石低きに水中て茶石目と云
但手前の方へ出た石もまた之有し

一 降さて八寸分九寸あるに及ぶし
まへ八寸分四尺を程りあるも
めりとん

一 中角返し石程りと五分二寸言
く但之をまつさき石分四寸斗
言

一 素返し石の方より居る言
中角返し分四寸程あるし
茶石の方へ降とをまる

一 石橋の名水へ二方へ一出るか
み六四へ二方一寄りとも出して
石の真中水戸の寄り石振よまつる



十六 あつきは無は汀ほとりいあるし

雪隠の幕掛の汀あるしるハ地より七寸斗幕の先はた
ゆ程よおのれくるハ波目をかへおのれちを隠す也是ハ木
名くらし

十七 雪隠の屋根かやぬきさの屋さハあし

かやふきさあるハ隔つさハ隔しくは又屋をもつるし屋
の下まをきの為あるも細工人ハまつをよいてさしと屋直也と
付るのとやはるくは右つしぶ切しり能ハかくしさるしいと
りさ言し屋とかハこうだん言さくは附ハ新さうり

あしくは茶庭継の時ハ本ヲ中と植て屋根まてよりも新
のくま迄ニ拵よし

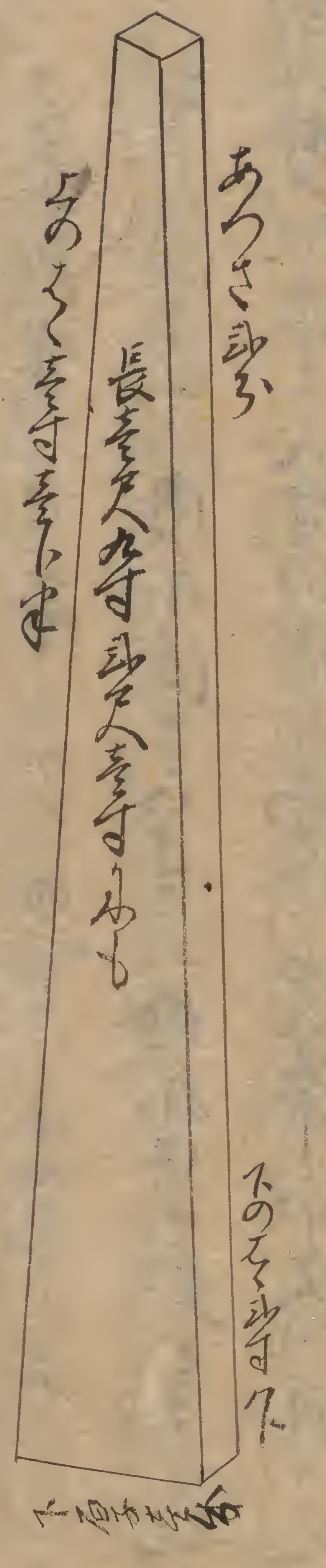
十八　戸摺の石九寸

戸摺の石ハ真中よりすこし縁の方へよりて雪隠の中へ
まてより多く入てハ又外へ多く出してハ内外へかゝり
合よからぬ様ニ居る石より戸まての明寸七八分
二寸あれとも明くよろしきなり

十九　まるうきさ利休の露地の様に中にまきたる石持た
まるうきさ有の物ならくみ石を好くなり恰好よく

名つけ並くのことく此形にて数寄の石あまた

砂雪隠の図



右図のとをり末をほそくしたる木ハ松木なり

二十　額の事

額の事あしさハ中にあるさかましくのなり
額ハ亭主の好ニ而筆なりとも遠くの松をまくをと
文字のあしらいに掛之額のよさ板にて古古

たとへ文字なりとて打は手何のちんもなきことなり
亭主の心もみえてあさ浅之うこぬの中にまりし之
客ようこ中にはもよるくハよまの ぬ物なり訓ともちうハ
物なりて八亭主乃おもひくも知えてよしハあるき之

二十壹 一 上水鉢完のまり石よりは高くも先乃さあるを
さし渡九寸此内ニ深さ八寸の内ニ口面ととる之
九寸の内ニ深さ八寸の内ニ面を広く手本文の通り之

二十二 一 上水鉢のき之据ゑ石のこ高つもありみてぬもよき
鉢ニよろしく

鉢より下石のこ高つ据てあきらく座ありても高さ鉢を
下石を高つめくらみてぬ据てもよろし之鉢よりなり
さ手之高もこうく下石はす入ハのよきさ之鉢さうしぬさあ
なり之ハ下石を糸を入くり石なりと見てつめらくあき入ハ
こりよきさ之手をさ物前下りは肘なるをされぬことのなり

二十三 路次にようの鉢の大小あり
大鉢次よ大鉢小家地ニ小鉢を用ゐ候え之広き路地ようわ
をとこさに却而大鉢を用広きさに小鉢を用てようさ
鉢ありとも家主のいの心持ちんよう之此鉢と云文字

是常に汀と云あり段次中の汀のことなり笠掛の汀
篝火の汀住来汀のごとく云説あれども書写の
あやまりにて蹄を汀と云るなり

二十四　茶碗と蹄との間大般若経乃内外之是も蹄
にとるべし

先大ていは茶碗の中より蹄の所と般若経又は蹄の
中の茶碗の所と般若経と云之ごとく是も茶碗に在
ものつのゐよき程のよき之ところへんよりつひに在あり
るとをるをくは色さくつみてあしくは又あまりなき

常には常の上にある蹄ありとのふさうなるまじくは蓋をとるとき
ゆるくしてあしくゆるくはよくなくつくぬ程
にあるなり

二十五　茶の振子蹄にとるべし

蹄丸には茶碗角と用蹄要衆の石なまじくは茶碗衆
あるを用捨べし

二十六　千水色さく岩むつしよりなくし来
むつし合なくしは色さくよりさ之さまとてもなくはむつし
乃岩あまじきなり

しやく寸法

一大のしやくこうの高さ弐寸七分 同さし渡二寸五分

一柄長さ壱尺五寸 同ふとさ二寸四分

一小のしやくこうの高さ弐寸五分 同さし渡弐寸九分

一柄長さ壱尺四寸六分 同ふとさ二分半四分

一こうのうらさのあつさ大小ともに弐分半

右ハ利休

一大ハこうさし渡二寸壱分半 外法　一こう此渡弐寸六分 外法

一こうの厚さ壱分よろし　一柄の長さ こうのさしこミのきハより壱尺六寸弐分

一柄のもとにて四分半　一同あつさ三分半

一柄こう此さハ少してあつさ弐分半 一同幅こう此さハまて二分

一柄の先もとゟ少てよろ二分　一同末の先こうの上ニ壱寸分

右ハ三斎好の大乃檜の木しやくハ小の松乃しやく右

此様好と云ふし かつて小しやくも有之大の檜木しやくハ

小さき丸石作ハ細長き石作にあく大きさある石作

のよ乃しやくさいゟ小ハ楾の遠く小の丸石作細長き

小ハまく小ニ並

二十七　手水鉢の先兼のかたちさまさまあり其さもあつさと

手水鉢の向ニ置と兼を並つくり本ゟとても極ニ兼

まへさしハあしきと云又一向ニ京者さもあしきなり

二十八　露次の手桶かこひさりニ置事を逆いつまても昔露地

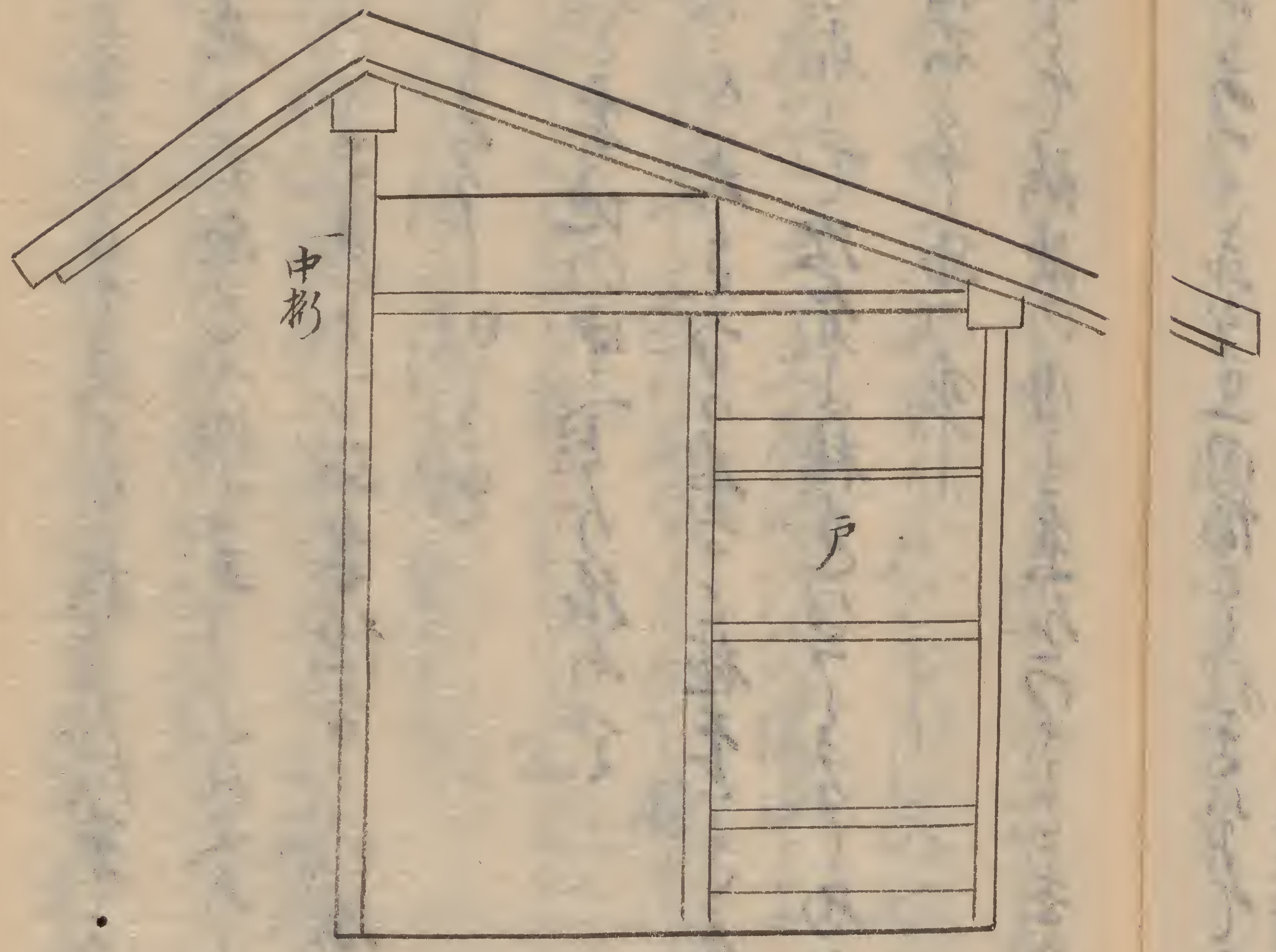
いつまでもむかしの器あるべし

二十九　雪隠の屋根ニ合ても内ニ仕出す事也

雪隠の屋根棟木より常ことの前常の通りにても

のこるとめつきこそ中程ニ又柵を内へ入事も中されは

雪隠の中柵の図



三十　雪隠ハ見て作る様にて又これ柄よく茂ル事

雪隠ハ自由を兼ぬる為なれハ無もあしく又あしくハ
見捨るもあしく候さりながら砂雪隠ハその塵掛を
つくれハ見てもくるしからす

三十一　遠山の景を露地の中へとり植あり

遠山の景とハ大きなる木を植遠山の景と
うつす合なりと申て数寄ニ植込ハ見へぬる物之

三十二　世の人捨石と申物の事

世の人ニすて石とて露次の内ニ景をつくりと云ハ是ハ
すて石ニて八方へつかへと置かる石をすて石と云物ハ
根本露次を作りし時のあまり石をとりのけし時分片
付ず捨置たるを捨石と云ニ主殿露次の場中ニハ置
ぬ物也されとも今の世ニすて石ニてハ置る事とみて植かくし程
下の見てすて石ニ為ニすて置なれハすて石ニてもなく候
為ニハもなる物の時ハ法ニ捨置なり

三十三　露地の景を利休堺ニて海の見えて中ニは露地ニて
合点あるへし胴貝の露地とぞ又同前

利休堺の露地ハ海見えてしかも景ニ遠山を利休海

のことを柱のくしても見えぬ柄杓してお手水なと
つかひ候所より見て此柄杓よりか此之当世て合点あると
なり宗旦の発句なり

海士もし庭にひろふこの木の葉かなと云句を利休愛
しく常に此様して路次を作しましたる之外の路
次道安とも云又織部とも云之外〳〵盛の時分下京
の人あまた外〳〵の花を蒔きと取りて二三本手水鉢
の元にさし置ましたり又花又へ二三本入ましたまま
ましとも云之皆〳〵此名なり二条虎門の町し〳〵ましと

の屋敷路次なりともあさこ山の京を枝かくし所に候之

三十四　客客地へ庭数へ又庭数より出るも心持あるへき
是茶湯ハ客組第一なり気と人一人切者なりても相客
不切なる時ハ諸中〔本ナ〕作法不揃にて無き物之是故昔今
客組を〔考に〕心掛候
先当日の上客ハ前より知まし候物之待合にて物ひ候とさ
亭主中くるとを取遣して出るへき時何も辞詞を申く
亭主内へ入申候此〔付〕時本く亭主に付つつ丈入候事要数
亭主方のこと備ても入候時〔今と考〕上客次客へ時宜との入合

当りきりくちを立てといへともあまりにつよく立出之ハ絡
次のもかけきあしく候之右仙法寸一之右时ハ雑談すへし
左とら連絡の外座入あかく是ハ雑談むかさるへし
手乃向ひより座入ん中より之勘座入の仕様ハ先ん上座
より壱人中へ寄て左をあき絡地の拍子をとり静ニ入へし
絡地中ニて高声ニ而あいハあしく候何そ可申時ハ
上座へ可申候之うちの内ハ雑談ニ年をつきあく
当り類かさハ立寄りよくと見へ申し其も高声ニ而読
此ハあしく只の外ハ仕様ときさ之拍子ニ水汲ニて見とく

配さくの立様を見て其を汲ニ水いれして配さく候
残一通りを柄まのとく当りし本乃ようく配さくを立刀掛へ
大小を入よをくさのを戸をあきを座中をとりて内へ入ぬり
ぬりつる左へ残出ニたゝうきとくさの戸をたゝく座へむかひ
其跡をとり柄いりし道具を置へ出つけ釜を取て道具を
取出来るより之次の客大きさ上座へ手に仕立时に中へ寄て
左出絡地中の刀掛上客乃通り寄り左入又戸を立て
立戸左中刀掛上客乃通り上客の次ゟ上座を寸三乃
客右よ通二中央へ寄て水つけ时に中へ寄て立出絡ニ左あ

明りのともしハあしく路次ハ揃茶之通ニ可仕置也さ
くと茶の通さしニ面々刀を取立帰り箒を立掛戸を
志めやし此時戸をおし音の出ル程にまへする座中の
面々揃上客同前ニ来座まつく之座定て時お慰の此上客
いふしハ此時亭主出時宜あるとこ上客早速墨絵未だあ
ゆもめ前ニ有振子の手継て後ニ墨跡の挨拶致し
古より達磨ハ会んの時花ハ落葉の時と申習りしハ
掛る在貝をいふりなめるてハいつくも同し振ニ挨拶ニ
今ハ切者のへうこと出ル時分も又墨跡と同ん名残おしむ

仏道具為ニ足りて用ひ物して扱者人ハ出志めの人ハ出時
分戸をおし音の後まとめて是非拘之無式の面々も衣
主ハ戸を手ニ取初位の人も茶前ニ衣草障子の時分
夫ると座の人ハ仏付之成内の障子をたちてゆるく
と承るニ亭主の立座ニ通をそとの障子を立付ること
候くは揃挿花をみても雑談ハかも致さぬ也
路次の景とも申りしハ亭主ニ立揃子仏掛置し
亭主の案内を待へし案内次第ニ水の又
茶の通ニ座入いふしハ此時も揃掛ニみる雑談多く八

刻限移りて花の露もかゝる水指のうちおひもさあ
しかるくのゝ能き道具の取扱ふくおんそくら
をさへあしく

三十五　亭主勝手より出る仕様あるし

亭主勝手より出る仕様あるし餅すとすさもあるくに
又遅きもあし客座に付坐一ヶ所ある時分出るへき
先の亭ゆて出る抑之仕うごさ而常に遠ひ以ハあさ
路之時宮に先立と挨拶なきに之客人ハ格別同座ハ
あまりさいゝ挨拶もいゝて後座の出て味

立寄りての挨拶もあまりに宮ゝさゝて挨拶いゝと茶
時ハ見合時のあんさうなき之又ハ湯たきぬ時ハ程く
物語して湯のさくゝを待もよし手植し而少く切出も
よろしくあり

三十六　釜掛の汁抑茶汁汲ハ掛ぬ抑ありあるいハ入へし

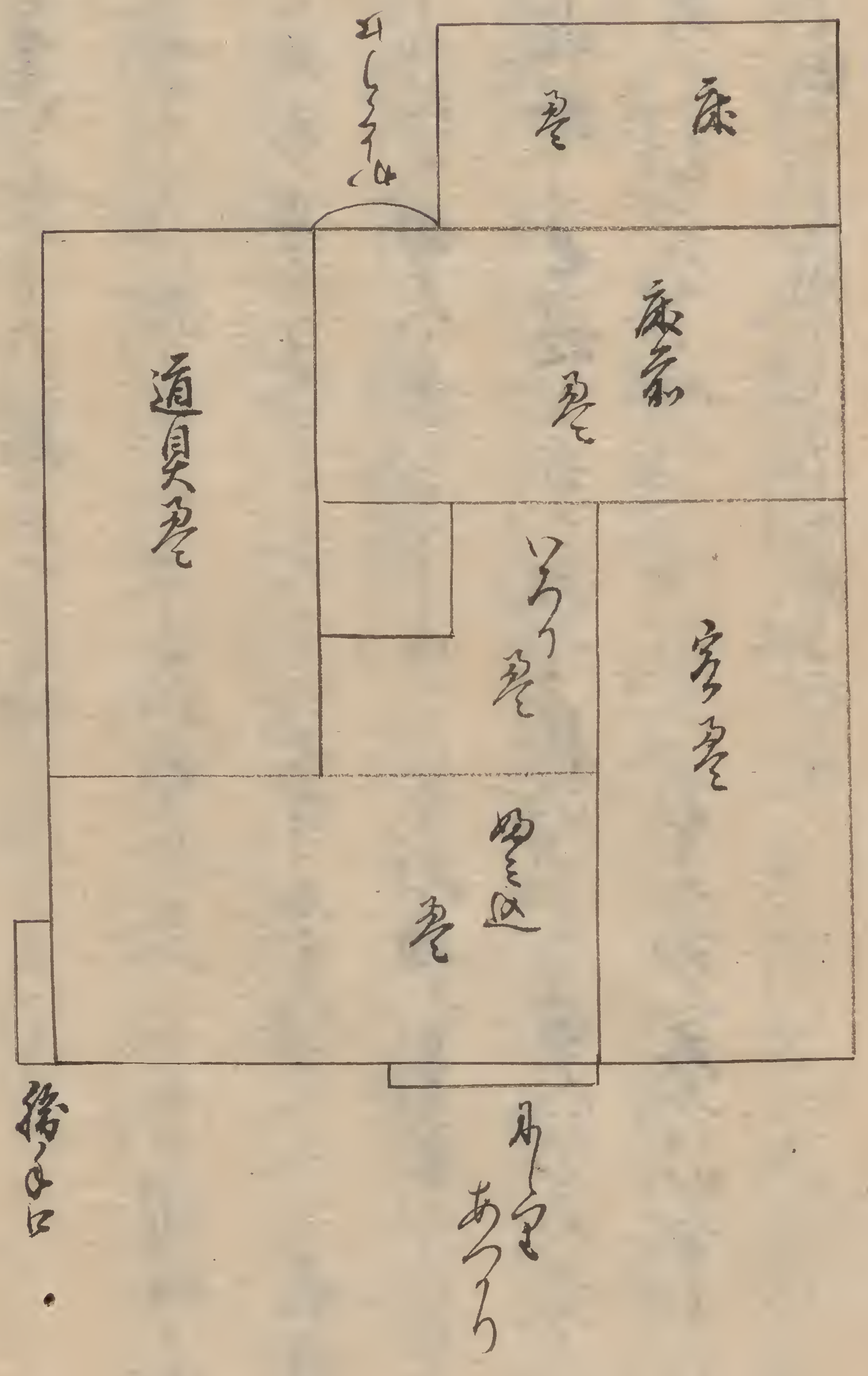
中柱より汁ハくさん羽箒掛て汁之釜ハ当方組合なる
時客も見ゆ申し取勝手ゝ入候とも又後に出るとも客ハ出
さぬ抑之出取釜ハ汁少ハ掛ぬ抑之御座とも七年汁
多出来出入て釜を掛ハ是なとゝいへしあるいハ

我不精の茶入乃袋をとくさゝれたきところにおゐて或説
に中程に釘穴をいくつもあけて亜袋の通して底にて結
ところの穴へ釘をさし通し此如此三条にして段し出之

三十七　火燈口の事むかしハなかりし

肥前名護屋にて太閤秀吉旅宿にて此四畳半敷屋にて
茶湯の時給仕口をあけて付てこれを利休に被仰
付し時利休ちとかまへて御おもき給仕口を付て茶たて
口の格子の内へ中をあけて置かれ火燈口にしてあけられ又織部
被申そうりあく出来てともかく作る

四畳半之図



三十八

茶さしにても引物にても切たるなしたるなり

きらしにても引物にても左右の出入をとゝのへて国柄にて八

いつさ成物之大さ五寸も有ル也六七寸にも八寸にも長短を

いたし組花曲尺にてさしゐてハさぬ物之足習之すん不そ

たらし恰好に長短を付る物之ゟ柄の下を曲尺にあてゝ三ら

可にあて走そめの○にてさる物之寸六分計也

大さと出入も同しすに用るなり

三十九　つぎあき是又昔ハなし

つぎ上ゟも昔ハなし　大和大納言殿数寄屋の後にて松木を

者関此松を用ゐられて此柄に竣成物と云利休ゟし

剣尾根の上にて窓をあけを此家にてつけられもくにて

くらとえ是ゟりつぎあきを初め此つぎあきハ大目の上にふ

一ツ又ハ座市尾根裏ゟのあるなり又ハ長置家の也

さし刀掛乃上なるとこれ合用之也尺八の長さ寸二分

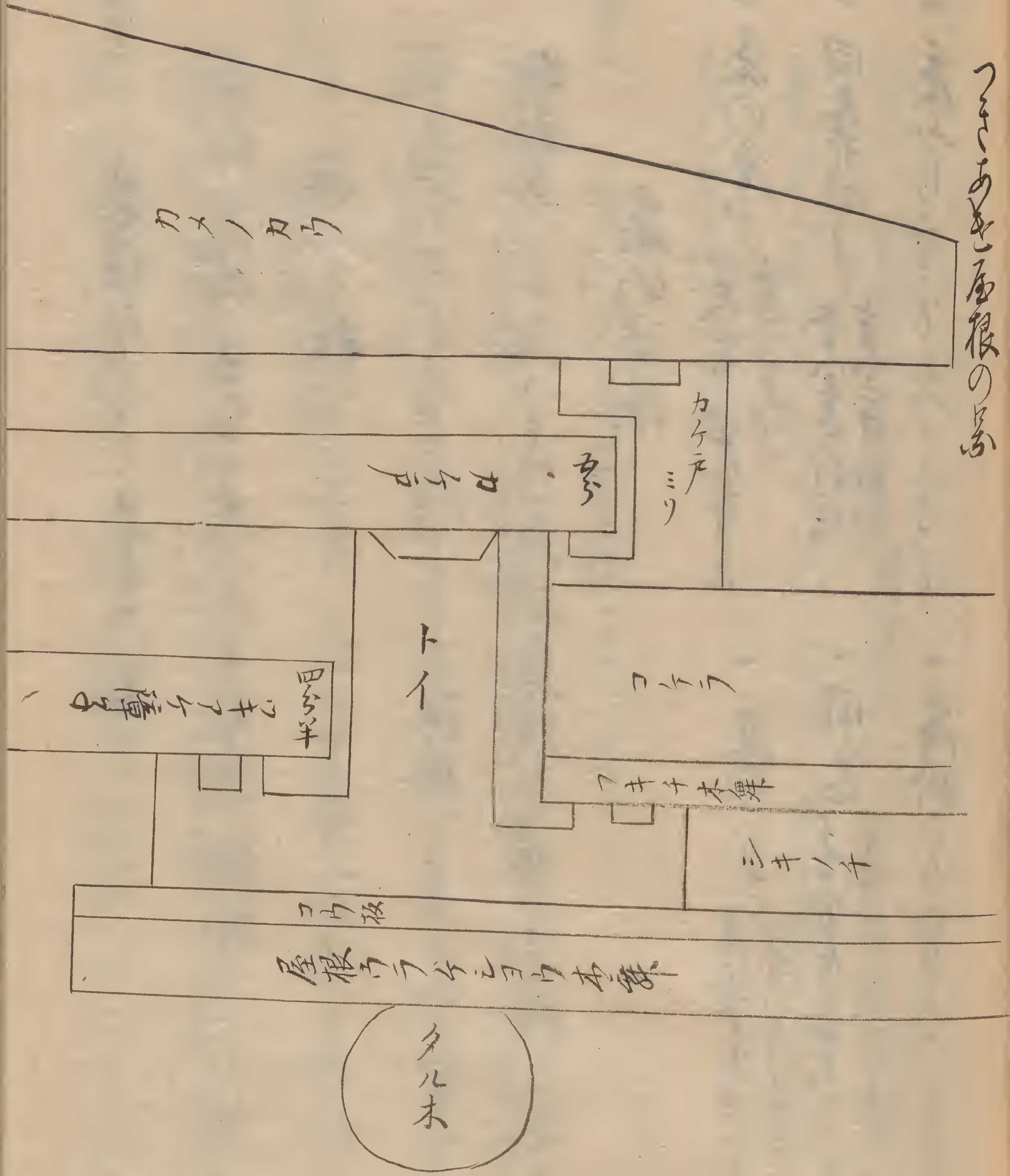
となる定るく有長短ハいくつもして五六寸（八寸）にも時

乃ありの柱子にても上を下けまる之竹ハさつ候ての

まる之目を前にまる之上のつりを下にての竹の先を入

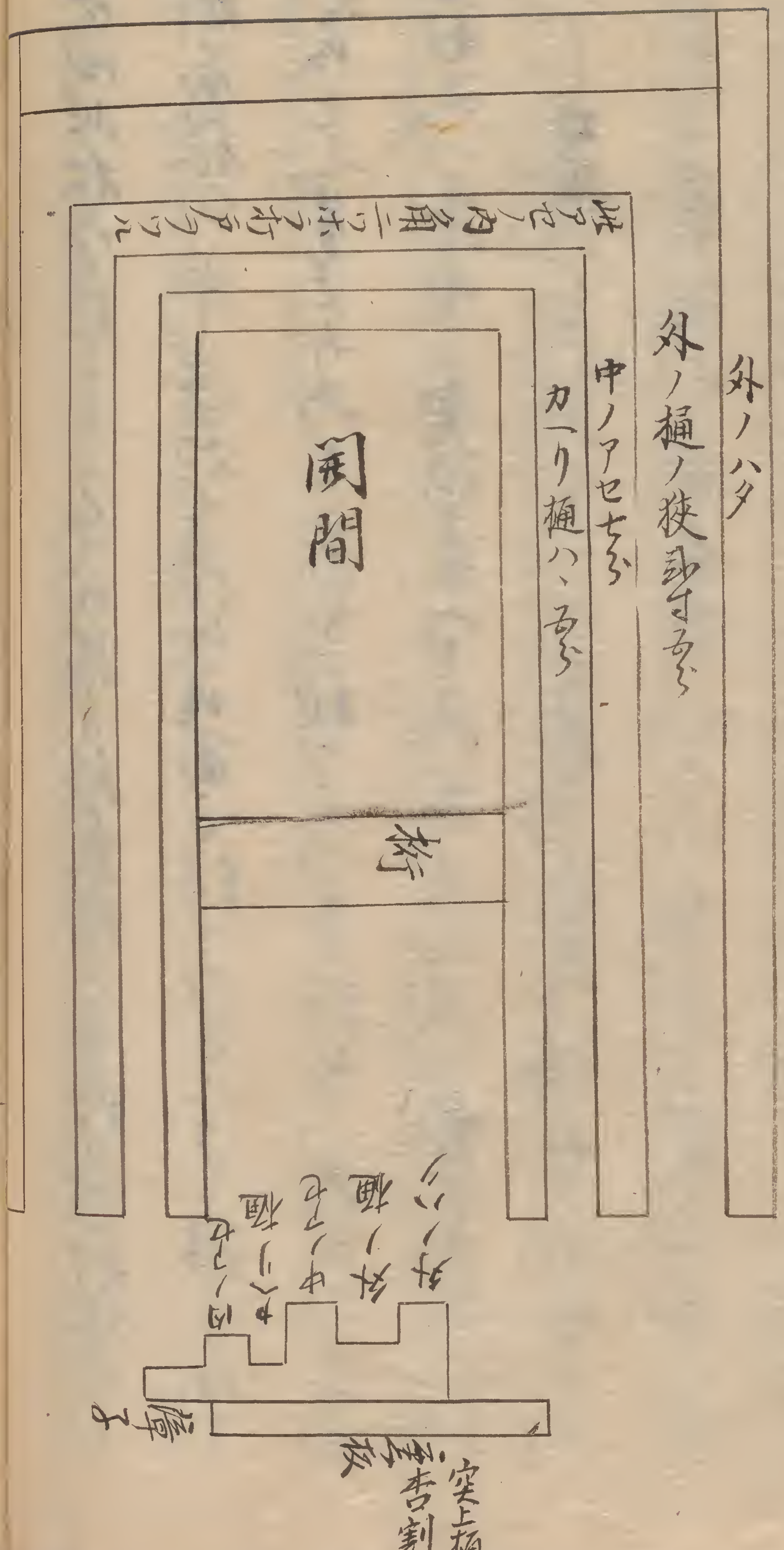
大事し出入の時ハ取り大さのなしにてつぎ上すに

つまあき屋根の図



障子ハ脇ノ障子両ともに二本之左右へ引込ミ底二段並ス

はさあき樋の図



四十　床柱おとしかけの事

床柱落掛ハ書院の床をつる布掛物之掛物をかくるつミもれとし掛ミて柱をつの○ゟしてかゝる物之おとし掛柾ハ称ス
ある物取ろくなる柱並ニ落掛なと用る物之習なき人ハ
物数寄とてゆかミ以落掛床柱なと用ると俗更無之事也

床の寸法

一　床の広さ　四尺二寸五分四尺五寸又 奥入弐尺四寸
一　同天井高さ　六尺壱寸 利休　七尺二寸 織部
一　床ふち弐寸四分あつさ壱寸四分
一　床の高さ　落掛ゟ床のふちまで 四尺八寸分九寸又
一　同窓　よこ長さ壱尺弐寸分 弐尺七寸 窓の内法 壱寸 弐寸 横九寸壱分
一　落掛はゞ弐寸あつさ壱寸壱分

四十一　三ふく対何れもおくべきか何れもよるべし

三ふく対ハ不残何れも又両脇ぬき何れもよろしく中を掛る時ハ
右を左を右をつきてよろしき時も中を掛置右をたてべし
左をよろし中ハ

四十二　三ふく対の眉墨跡よるべし

三ふく対の眉ニ立べし　三幅以掛物の大小次第眉墨跡よ会て（汀の）
眉ハ打掛

四十三　袋床の事

袋床ハ床柱の根入押込ゝ袋床と云墨跡又ハ
向の壁乃真中に掛て前の真中にかまえ候也

白乃角柱をぬりかくし此ハ塗立し床と云天井ニて
ぬりかくしたとあらず床と云

四十四　こしはりの事

腰張ハ壁ひあるう事之昔ハ常の床の内ニ而て反古を
用ル古暦ワきと無是ハ今ハ常の反古ニ似寄ル書を
ハ紙も宇ニ書さし是ニ而も張ル事ハ少く分ハ反古ニ似
中ふらくハ古反古張ハ大目の内ニ而ある之横竹の下ぬり
足しの所ニ反古張にしハ世上ぬり足しの所を
紙を入ましハあしくハ張たりのさき宜り無し

好次第之の事にてハ紙ニても書紙ニても好
次第ニて力偏ニても不の定りハ床の内ハ張ル事ハ

四十五　無燈竈の事

無く掛ケ汀ニも掛ケ竃燈竈ハ昔より無これある
事あり記ル也

四十六　茶箱ハ座敷（出しを）物の事

茶箱ハ茶通の事之茶入・茶杓ニいうし多る物なり
桐木ニて作り台ニて濃茶ニても薄茶ニても別文
定ル茶の事の事ハこれ茶にも茶二ニ文ニ時用ル濃茶

小壷の類ニ入ルハ肩衝又ハ中次なとニ入て茶
肩衝茶入ハ袋ニ入ルを本ニし二ハ茶杓種々ありて入るなり
丸壷なと（文琳ニ乃くハ）ハ肩衝ニ入さる同様の茶入を持ニ拝ニ
茶筅を置申し壁ニ向ても横ニ向ても置の其の好次第之
茶を振ハたゝなる茶をおろし二ツ茶を出し次をなるの
茶入を茶壷の中へ入てし拝へあとの二を置申候又茶
立て付の拾を目四目と退く其のとふも壁ニ
して置し壷を出し茶入を指へ組合させて如常にて
中ニ入て後茶碗をすゝき付客も仕舞て立之種

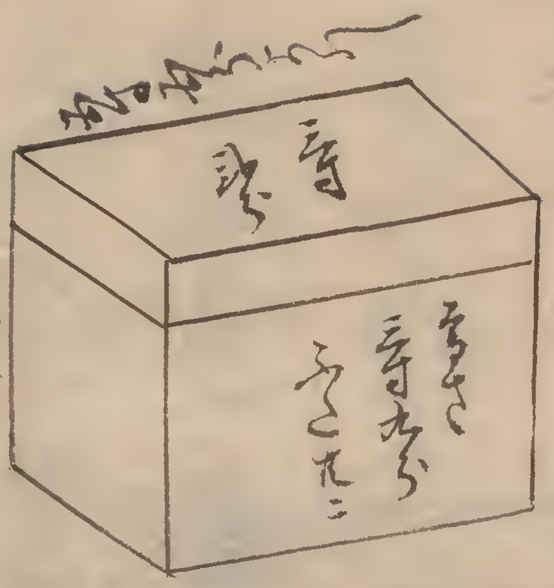
も有之振ニと好て次之客不審ニハ立まく
立申事と同しても立てきて之ニ茶碗をすき付
客より前の茶入を所望すれは之此時茶入を出し置
又茶筅の茶入をも指ニ組合せ申し拭茶をて中ニ
時分まて茶碗を拭き前種の茶ニすてゝ茶筅も
是ニて拭茶立申ニは其の茶入客へ仕舞てハ持て入
きし申ニ又ハ茶筅へも入申候

一 又立振茶筅をおろし蓋を取りもちてしとり箱とるさと
乃ちニあとのきて蓋を立茶入を出し蓋の上ニおき

しまふの茶入箱の中へよりも数蓋の上に置て茶入を
蓋よりも出して持箱の上へのせて箱とも仕廻
合せて置指図あるべし但茶さくも置き蓋のより
置べし

一或説に昔は此時の板に茶入をならべ置箱をとらへ
入置たる年月あらく是れ茶入と肩衝茶入と云ふつも一ツ
箱に入べくつ掛て用たるとみてより其後茶箱は花袋へ
出して掛たる事に有る此時のことく花袋へ出して斗の
為ふ箱にて掛たるなりくはあまさが二つ入の茶箱なり

宗旦茶箱かくしは紙を花袋へは出さずとは板て本地之

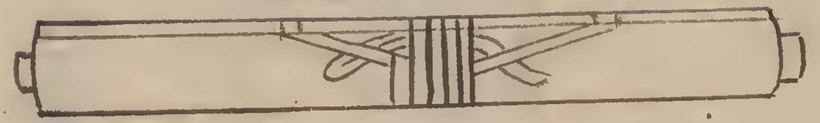


茶箱の図

一 桐箱なく但し
一 高さ三寸ばかり五分半
一 木地にて蓋之但胡桃の油にてぬぐひよし
一 蓋深さ九分五厘よりかみまであたりをむかふより まかりと
一 曲物九めんなとろ
一 板あつさ一分半すつなり

四十七　ちくせんちく紹ちく元墨跡にては名物墨跡は なり
墨跡なくは先の方を軸先と云なるに題にてもあれ

文字かしらハ方軸先之下の方軸元中を軸紐と云之
中ハ先と元との間なれハ軸紐と云之床とハ名ちかひなし



四十八　壷をかざる事

利休口傳あるへし口ニ云書立ニハ壷を床より不届よ

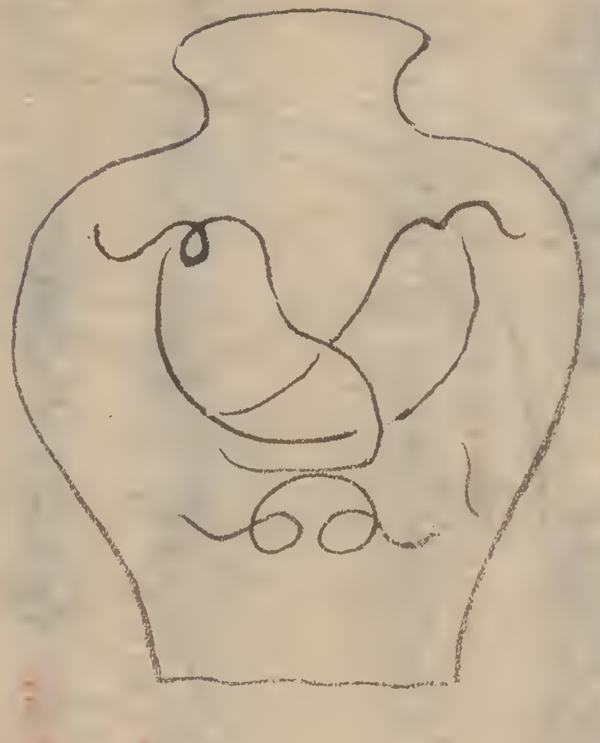
壷の結ひし紐の事

利休かざる事ハ口切の斗ハ床ニ書立ニハこの
さり小壷ニハ方の事ハ結の事書立それを
かさり候くかざりしハ其をきんなる事とそて利休ハ其
書立ニハ床にて床より下ろし時ハかくへハそてお
ろしハかさりハ蓋定へ入て時ハ左結結ひめくれ
ろを右のくみて紐のあをとまつさ結ひの下をと
こくさし下さ置すくゆい其の事へ入をめ入取口のうく
すへの結をとめのかさをあへ入ろへしおすへし是も左

乃字へ打入紐口ハきに結ての方ニ垂天後口天後
をむすふなり又どうし壺耳あるはむすふへ二方ニ打て長
緒のよき垂に紐ち緒をとりて下にてむすひ垂天後より
壺の耳を宮ニ向耳出して昔ハ緒ハしるして出しもの
とも云ハ天向しおもしろくて面を宮へ向耳出して口垂後
ハ宮よりも右ていふ又申し壺ハ右向ハ炭前初を
乃と云壺の風紐結く炭いふ也

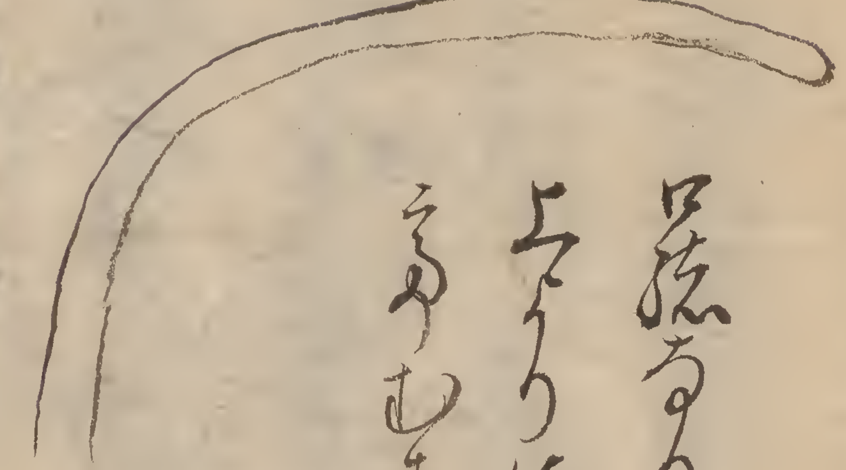
四十九　壺のあミ口天後風帯之事

網ある口あるハあるに紐結口を乳緒あり長緒出風
帯ハ惣緒ともいふ又長緒ともいふ風帯ともいふ緒ハ板あるを
両方をとりて封を付申しあミ口緒を左緒ともいふ
ふくろて緒ひ申し又昔ハ袋あミ居し所乳緒ハ
く袋の出入もいふへし也



乳緒ハむすひ申候よし
下へ付候あまちの緒をよく
よくむすひ申し候
両方を打口のよくて封を附
ふさぎあるなり

口縁ある丸縁とも云也此二つ共に口あつくひの
よりはりしゆひ中ふくらむきひろかり出縁に
なりむきひやしとまきハ此口縁ハ不申也



五十　床へ茶入上る事

名物の由緒ありて茶入ハかく客より床へ上て拝見と
所望の時亭主上座して盆を左のかたにて持右にて
手にて茶入を持盆の上に又茶入の付たる紐ニおよそ
持床前へより床のかくへ下す也さくて居なをりて退

手にて盆を持床の右の方にあけ置也又床なき
時ハ茶入を盆ニ乗せおかすしてむかひへよせ　より置也
床脇の地袋居より茶入の中ニ置紙を七寸斗前へ
床かまちよりも同寸引よせ置也

五十一　長盆常の茶湯にも昔ハ出しつかいたれ
へともおよ口伝仕てのあるかと書加ふ事

長盆ハ東山殿天目ニ用之利休より長盆を二つ切
四方盆を用ひ初たるハいつきた御盆とも口伝仕候
ありて長盆にかくて茶入茶碗組合時ハ茶入ハ右の方

はなしは夫而四方盆ニかくしも茶入盆ハ右茶碗ハ左

左之茶入座ハ上ノ時ハ床の右乃ゝさ之茶天目ハ左也

右備へ子の時ハ是を打ゟ千一盆なり

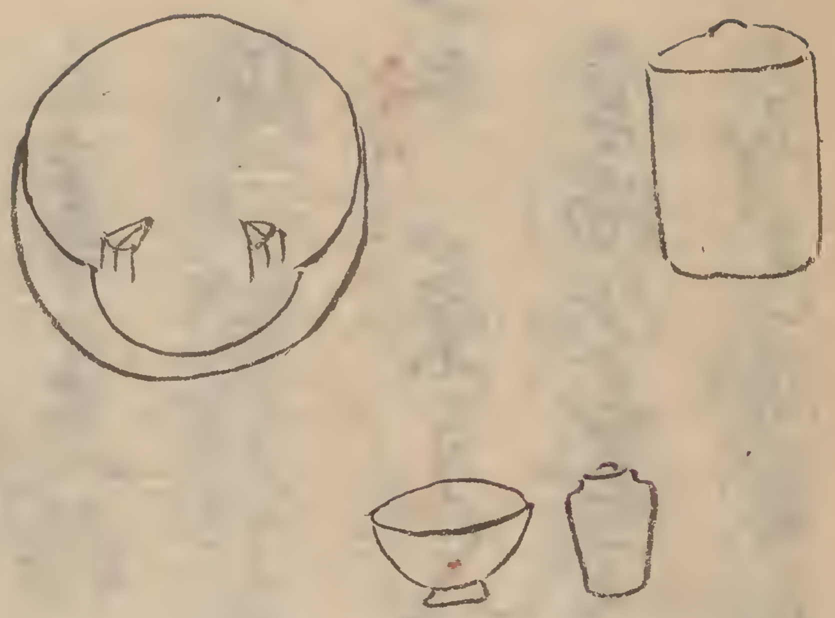
五十二　水指と風炉とのかさり茶碗茶入盆を備る之

水さしと風炉との間ニ盆合の時ハ水さしの方ニ九

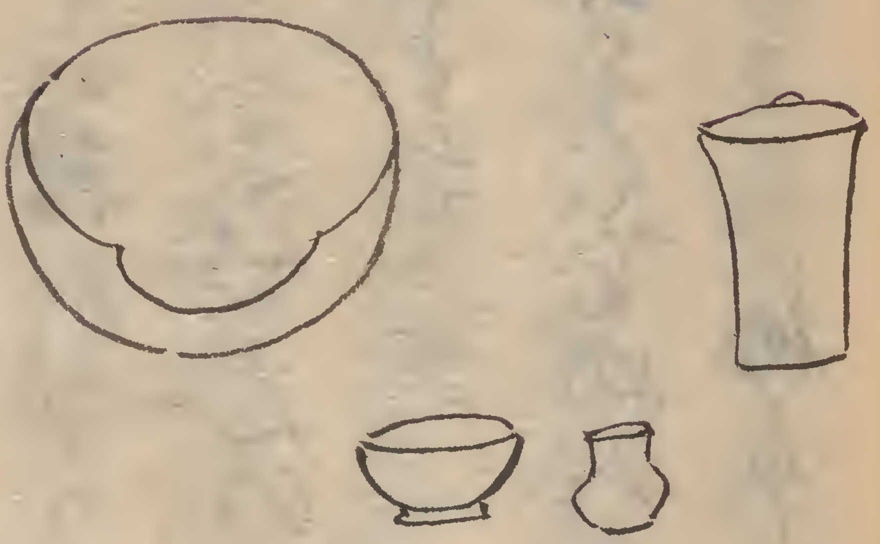
りゑ合を入て組合ニ入て風炉の方乃ゟゑ左ゟ合

置なり(とも)盆据なりあるかゝゑ左をかゝし水指と

媒乃との方也ハ不盆なり



如此茶入の右乃かざりと水指の左のかざりと合せ置合んと時ハ茶碗ゟ入るゝかまはなるなり



如此茶碗の左乃方と右乃右のかざりを合此時ハ水さしのか様ハかまハあや

五十三　穴あきさらんあんれの事

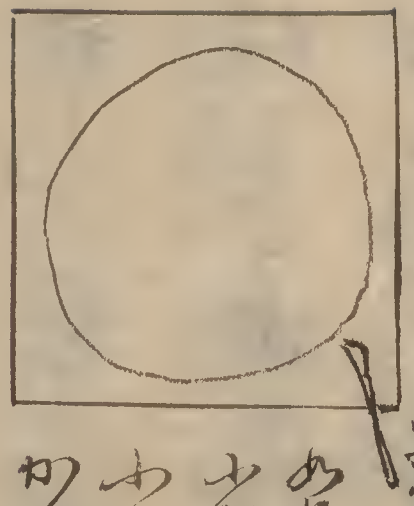
むかしハ鏡台と引ゟあるハなし夫而鏡台風炉あ

なり田乃のみあつくゝお居ゝ母守意ニ先して枝よ

あるを何事て鏡台を引通し用之品節ゝあつさ

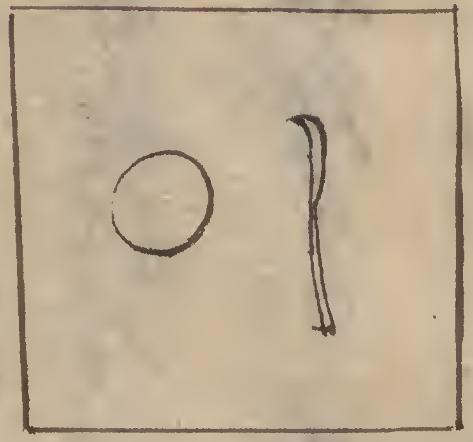
五十四　亭主ニ而道具ハ茶入まのしまさ之外ニ何ニても
手水鉢の所さく而も左をつくへし
亭主の座敷ニ而道具ハ切りてあ小もとりてつんなかれ
又客の時さいきん亭主の座敷と遠ひ成之茶つん度
大亭主へ所を遠きニ而てハ格別なる事成事ニ而
飾の所さく而も心を付て又さんざんのごとく仕舞之

五十五　茶さくを棚ニ置事
唐物を置事ハ亭主時ハ茶さくを始ろの小板乃左の
すミ之水角ふくいさきさをのきを成又ハ棚而も置又ハ茶
入ニ仕合成時も茶さく棚ニ置事あるも
又濃茶ニ薄茶を出し候時茶入茶碗棚ニあるを仕
出茶さく斗茶入とともに棚ニ置茶入ハ勝手へ入
茶筅茶巾取て持出茶さく茶碗への置て



此図茶さく員先を
小板の右の方ニ置候
...

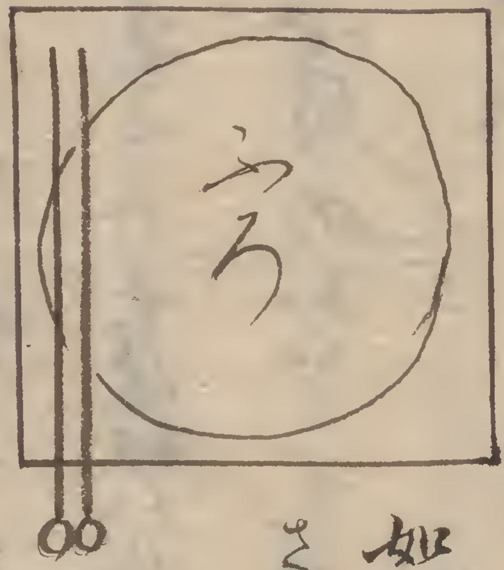
棚


棚ニ仕合而て
上ニ置候ハ
棚を...
茶さく
置なり

五十六　炭道具小板ニ火箸おく事
炭の時分ハ香合を持出初置ニ香合を

もたし出し火箸を小板におき申之候後ハ小板の
左の隅より右の方へなしに置て柄の先を畳の外へ
出し置候之紹鷗時分ハ大の風炉格別のことを記候
何とも由緒ある火箸なりては初座より不置之炭
仕置以後ハ何方へかくしみても不苦かりもせぬ様何かて
も亭主の置候右真ハ不可なりに置てつかふ事さぬこと
なりともに火箸つかうハ不可なりにおきつかふ之事
一膳置相ありかへしにおきつかふ之一本ハよりて付事
にあり又本のやうに置候に置故之先へかへしおきてめ事

置かへしとりてつかふるなり



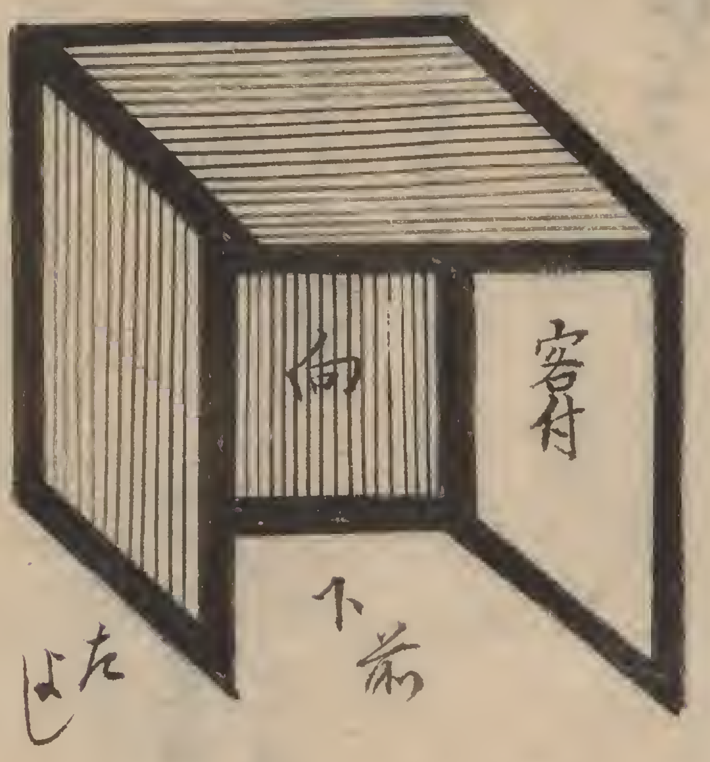
如此隅よりのなしに火箸の
さきを畳ゟ出し置なり

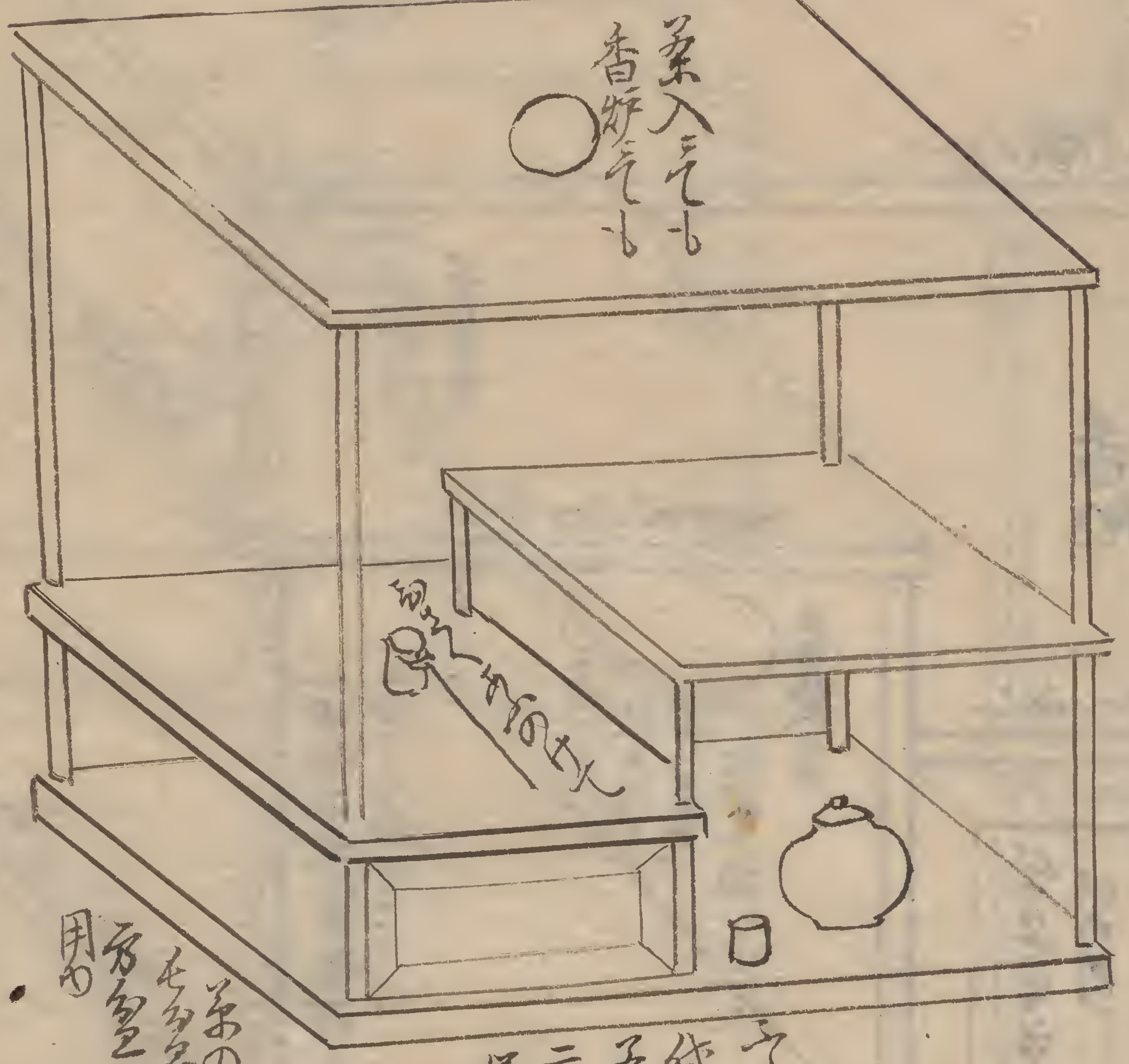
五十七　よし棚の事

利休の棚之ちの板なしに置て水指のとりてもを置之
ともに隅よりの方を其まゝみてもそこく之定付と前ハ能置之

五十八　ふくろたなの事

台子ハ真之及袋子ハ行之袋棚ハ草之極なる故袋棚にハ





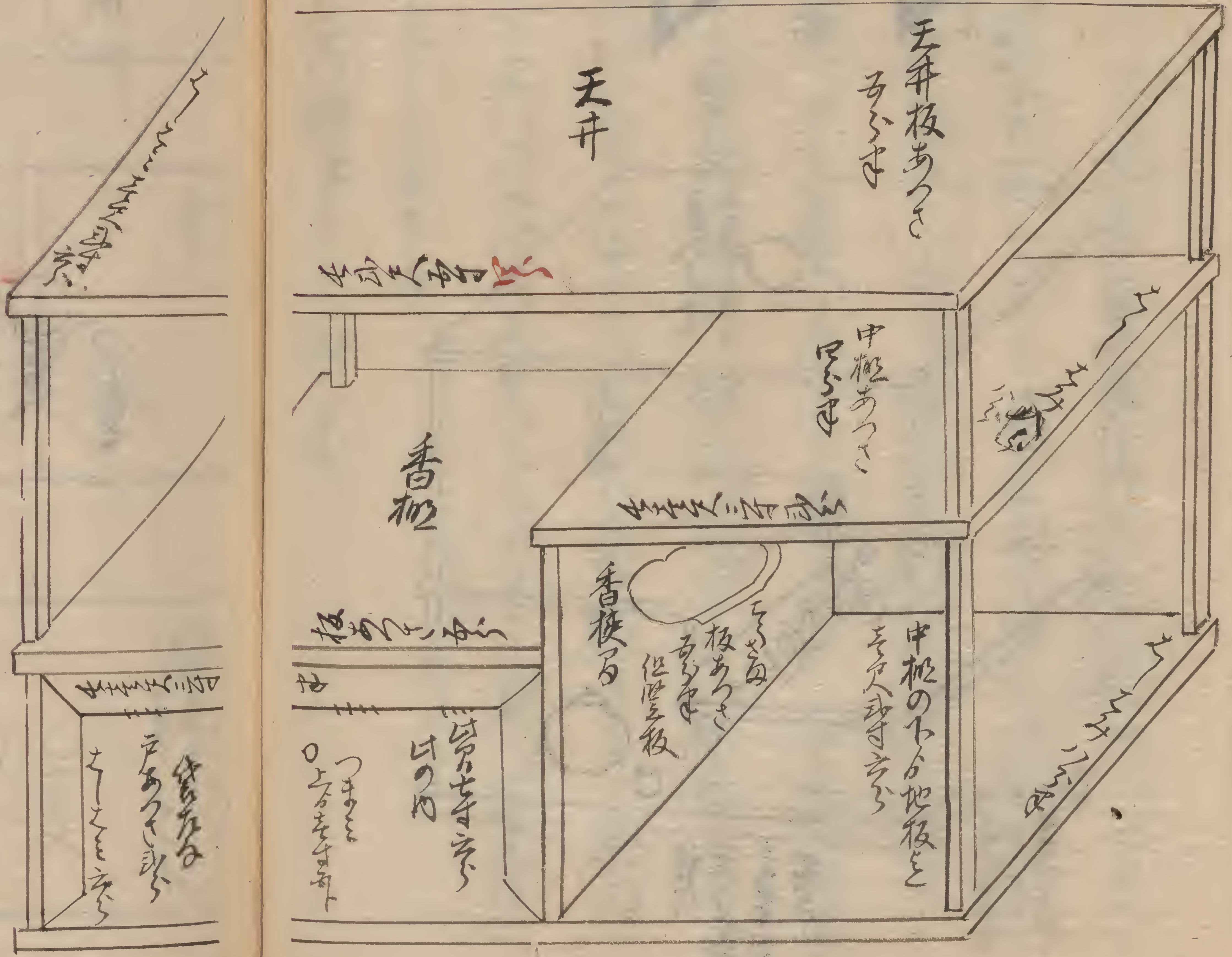
さし盆
袋棚
茶入茶碗
二香合羽箒
炭斗

茶の湯
方盆心次第ニ
用ル

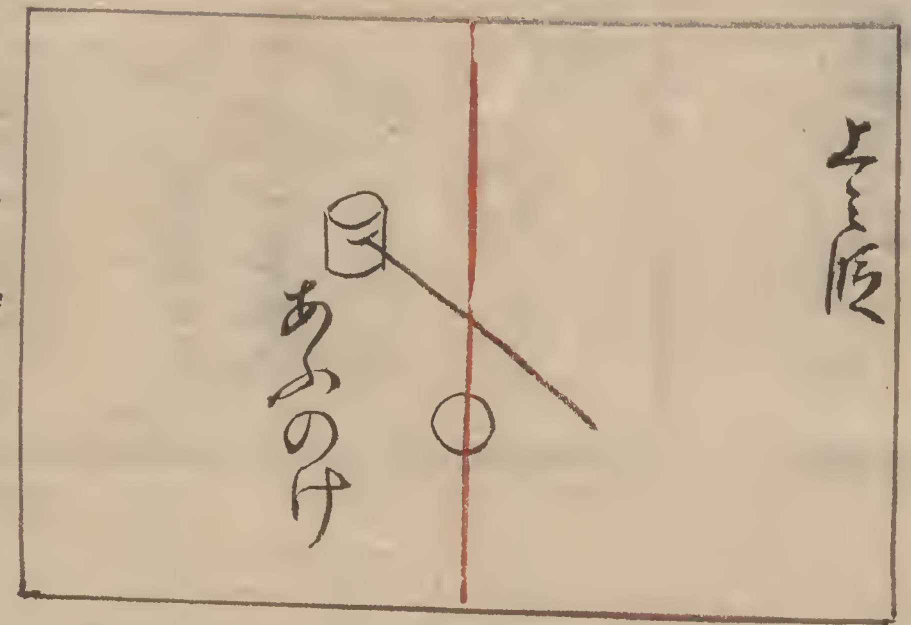
何れもくたるへく組合盆之炭斗も盆棚にハのせさる
蓋置も盆茶入茶碗もおく香合羽箒くるしからす又ハかく
紙も付盆之盆台ハかくへからす惣而棚にハ右ニ盆中
さらし袋の内なりとも茶入なりとも棗なりとも茶碗
にくも入盆中し袋棚盆棚ハ炉風炉より八寸ちかつの
いと盆棚前の左茶入のなりて左ハ袋棚よりも多い
盆より一尺ハなりとも又ハ二め目あきてもよろしく右の客付の
方を二めもきるへく盆中ニ
利休好くろ棚炭斗ハ棚ニ置

利休袋棚

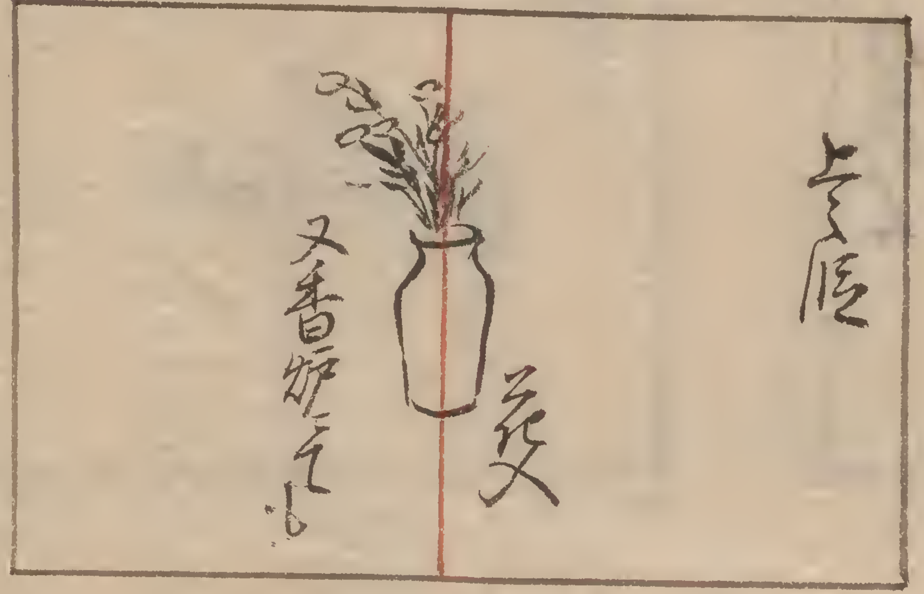
惣高さ二尺
柱も三分より
太さ八分五厘下手みて
柱とも四分

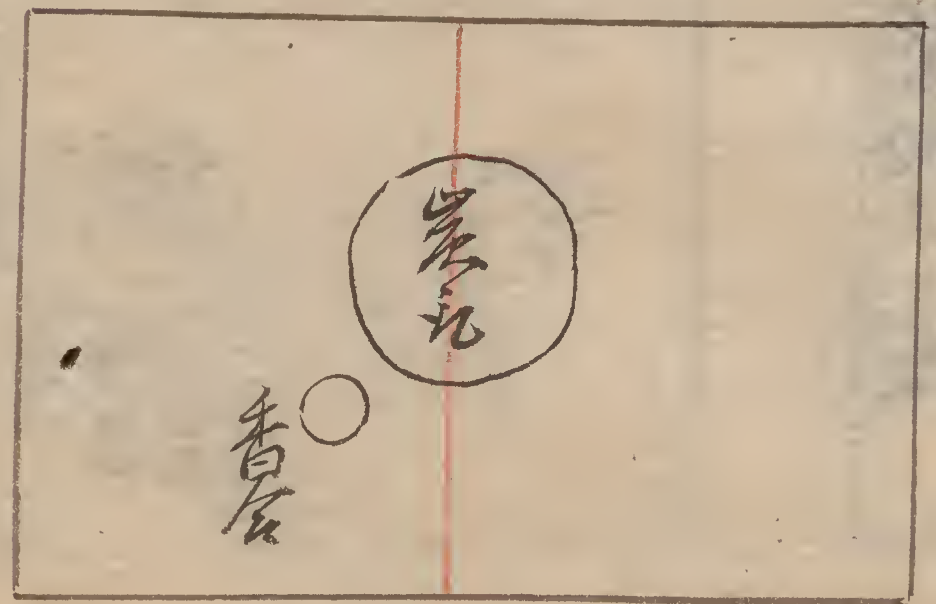


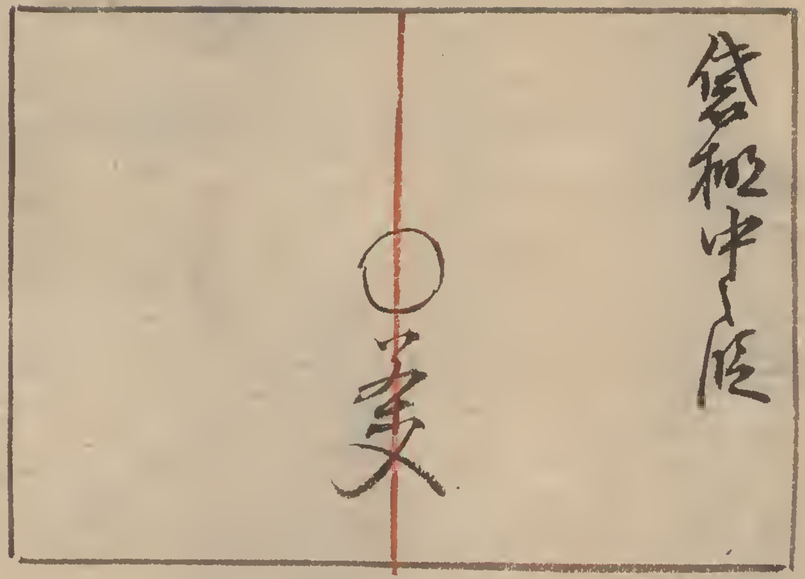
袋棚

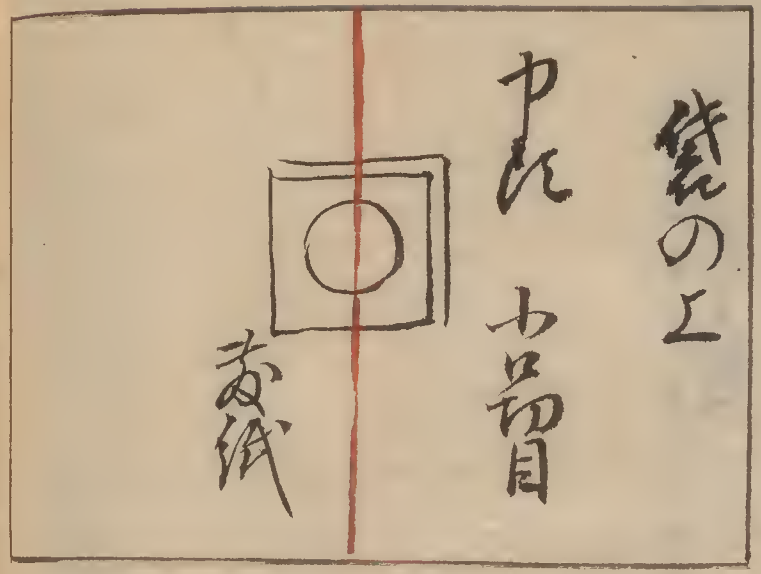


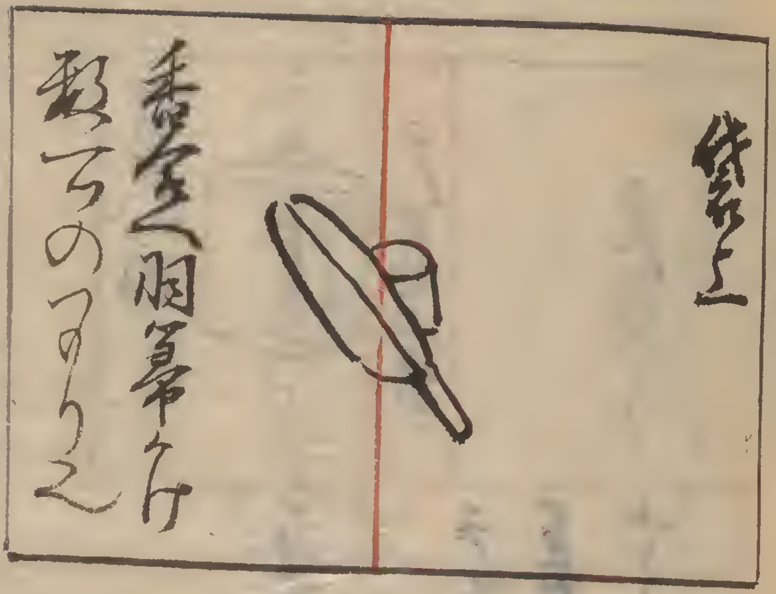
同

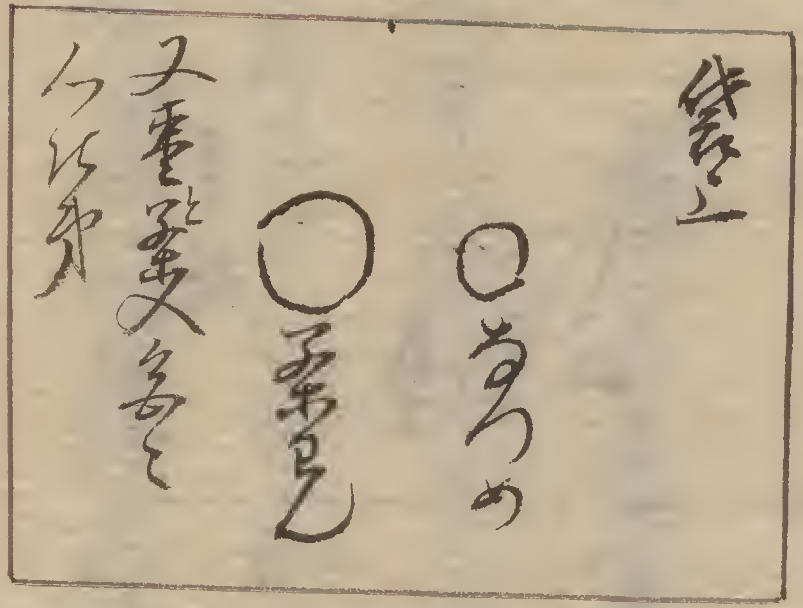


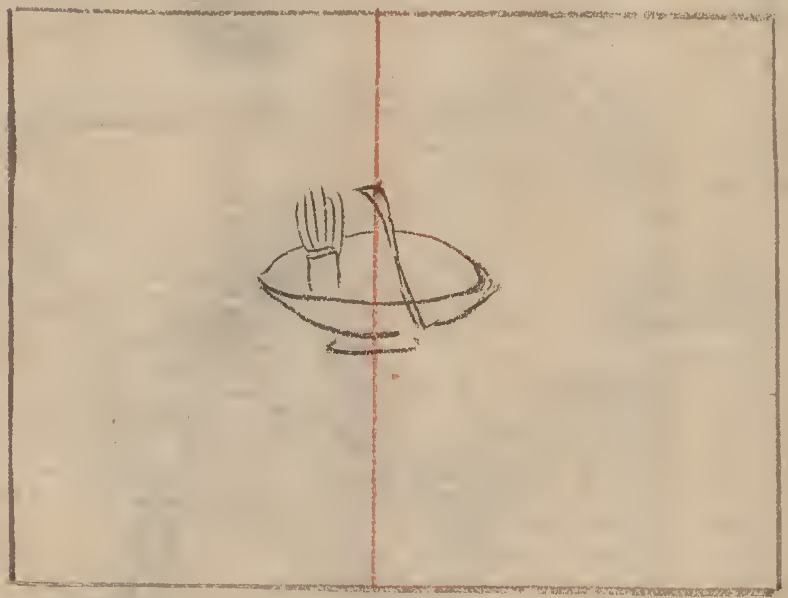


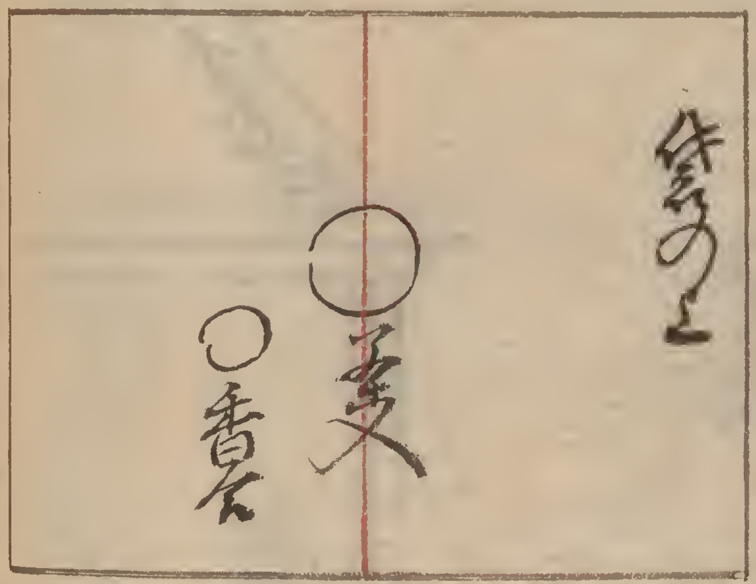

袋棚中ノ段
茶入

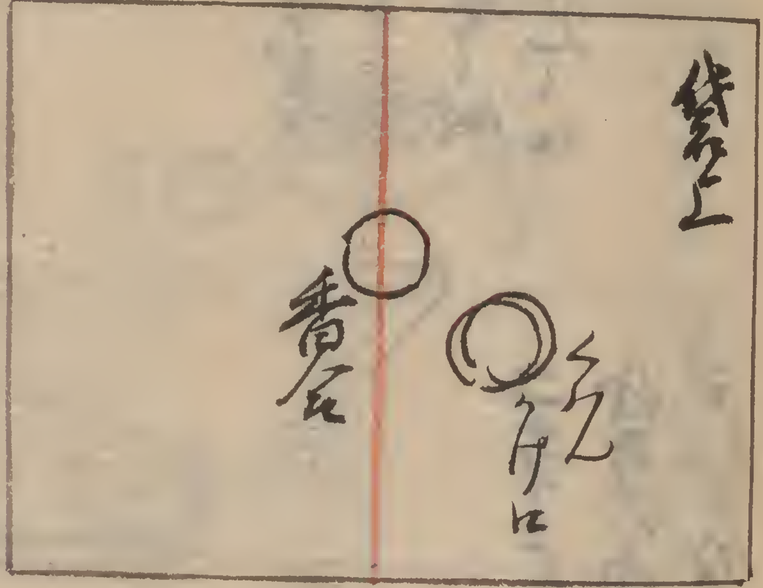

袋の上

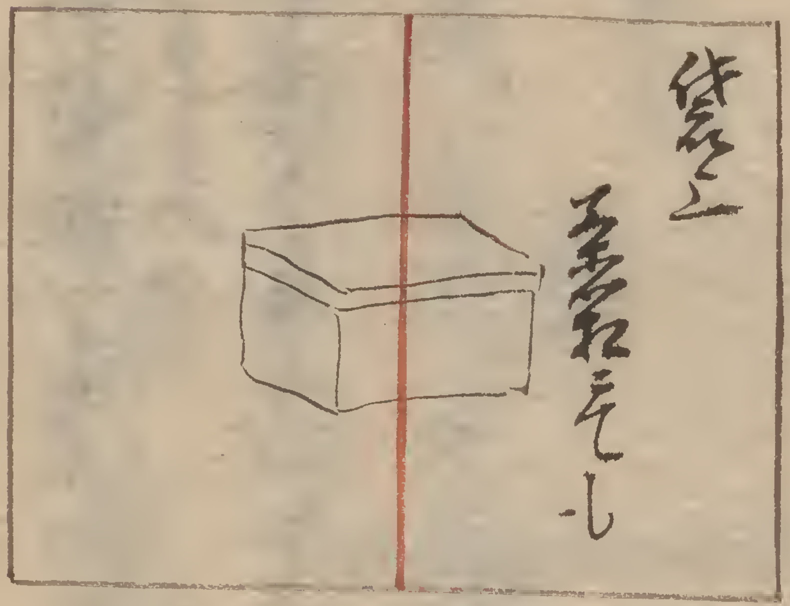

袋上

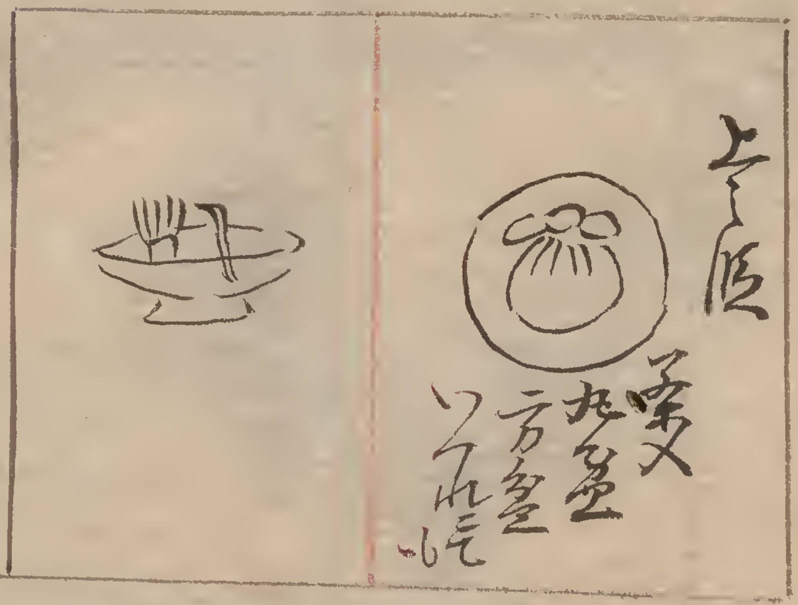

袋上
茶入
茶碗

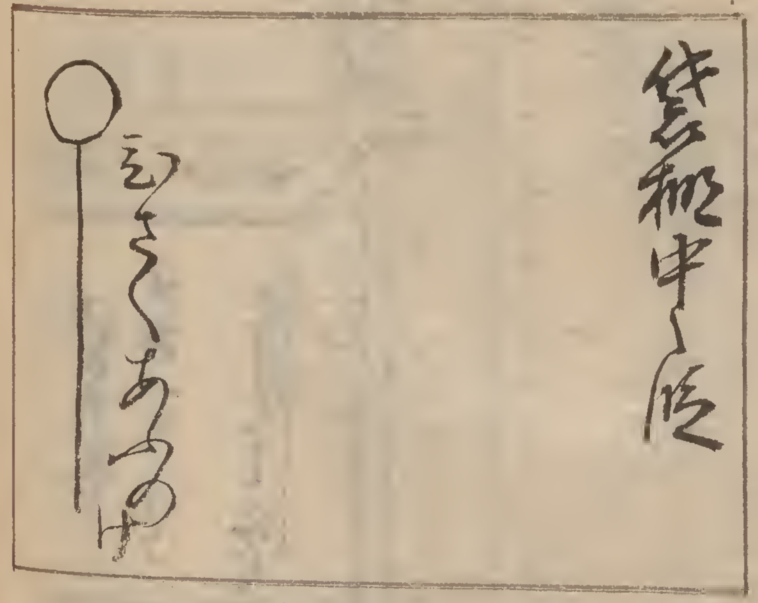


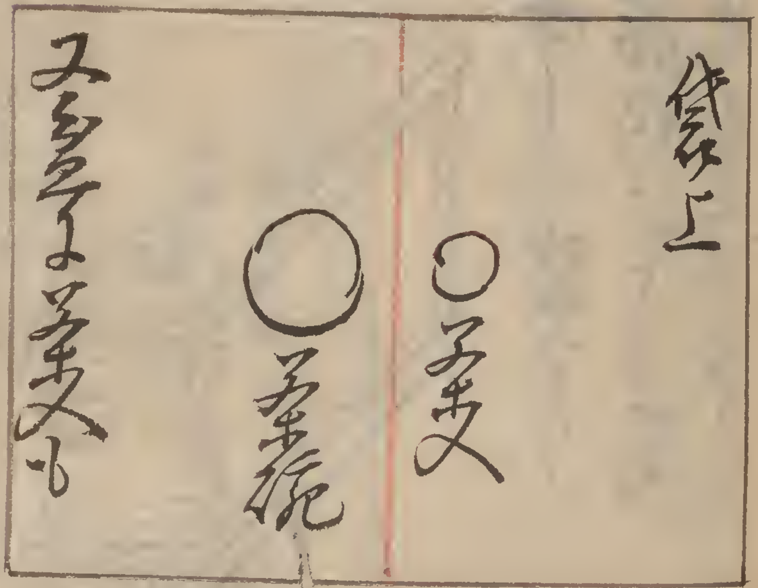

袋の上
茶入
香合

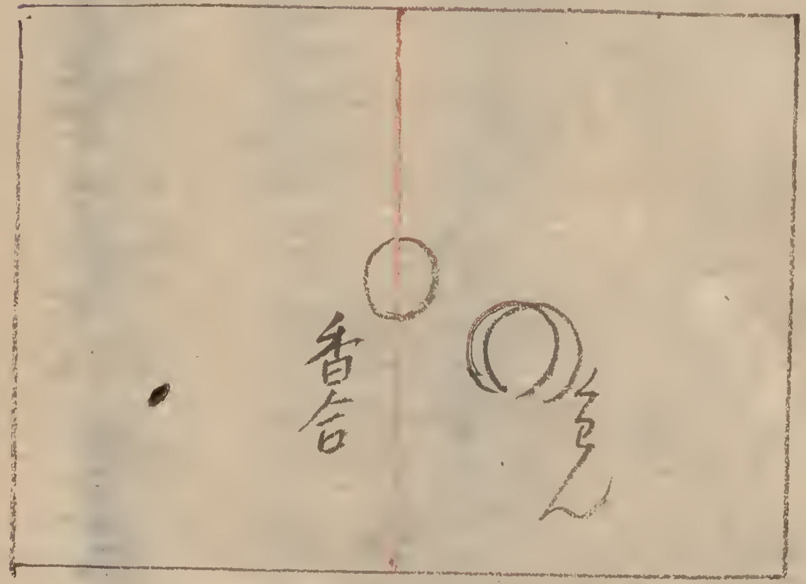

袋上
香合

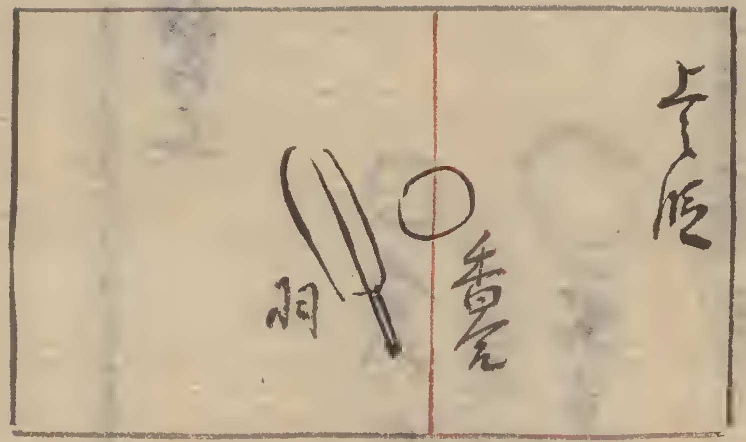

袋上

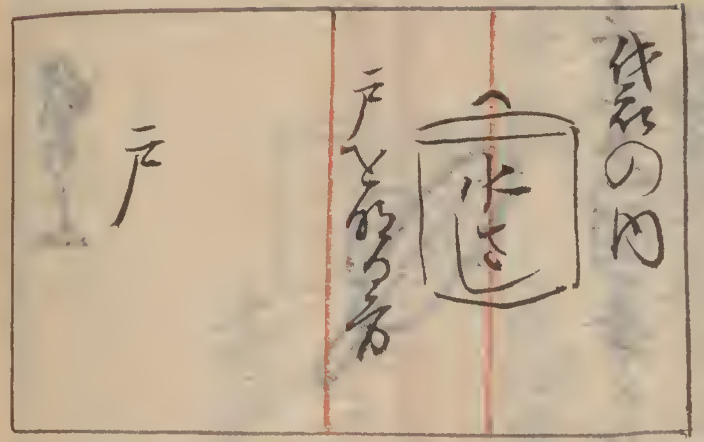

上ノ段
茶入


袋棚中ノ段


袋上
茶入
茶碗

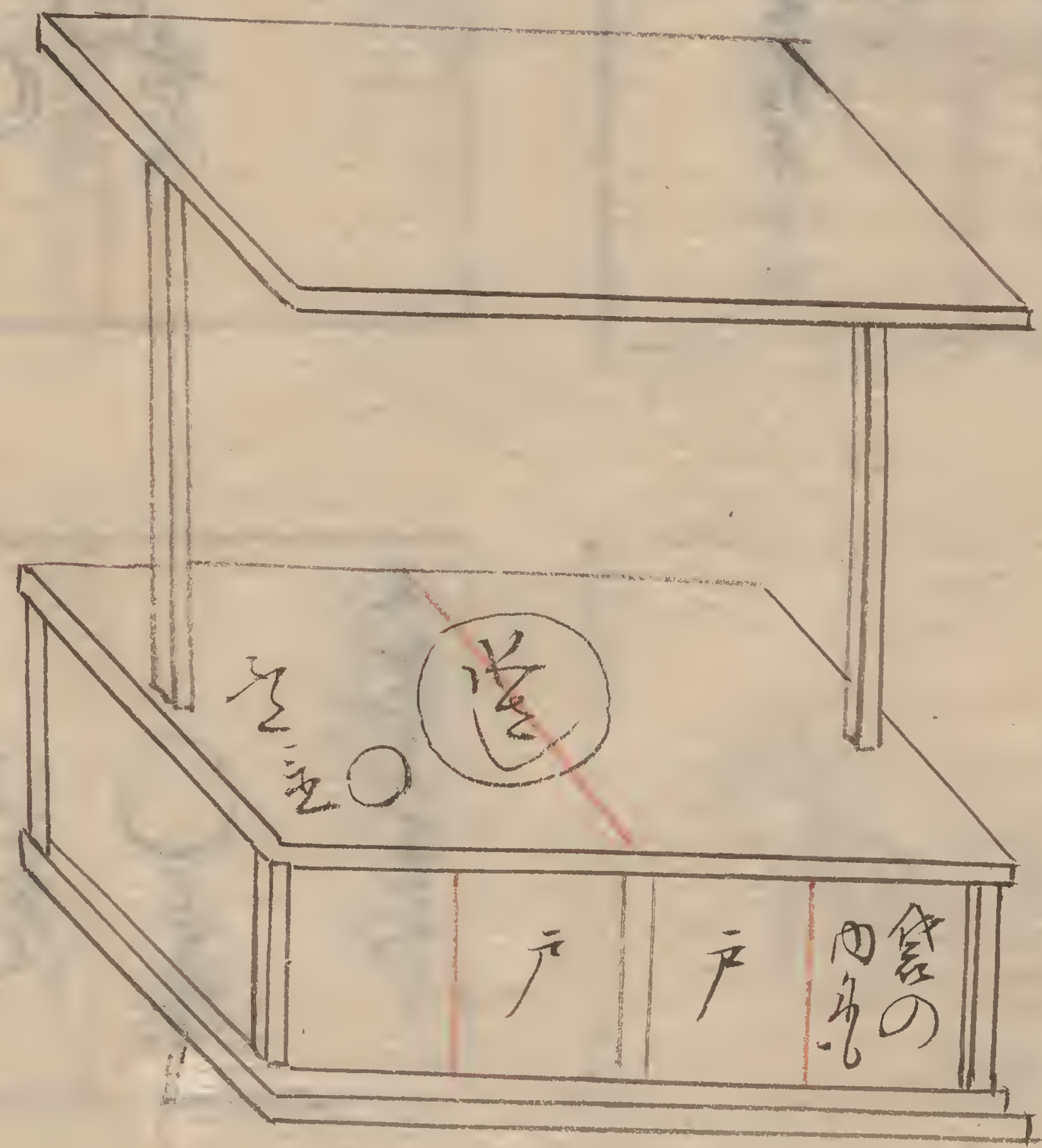

香合



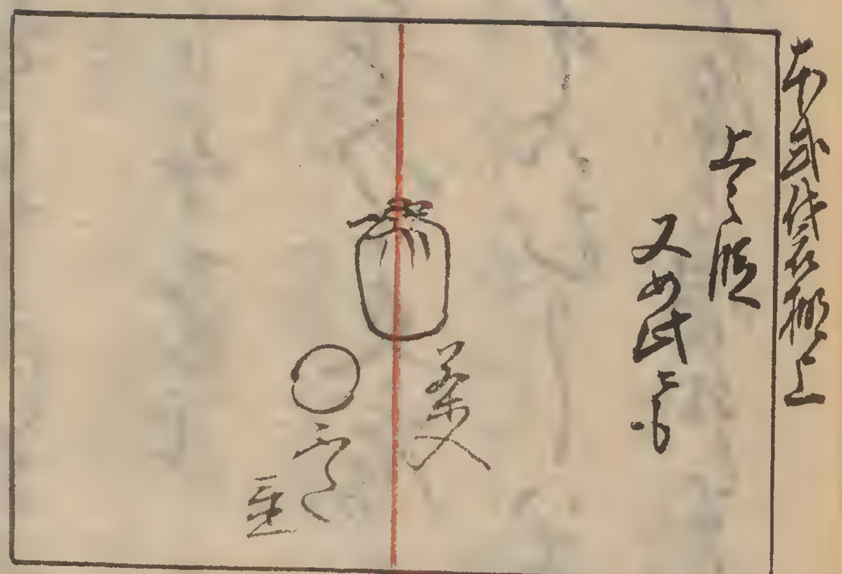


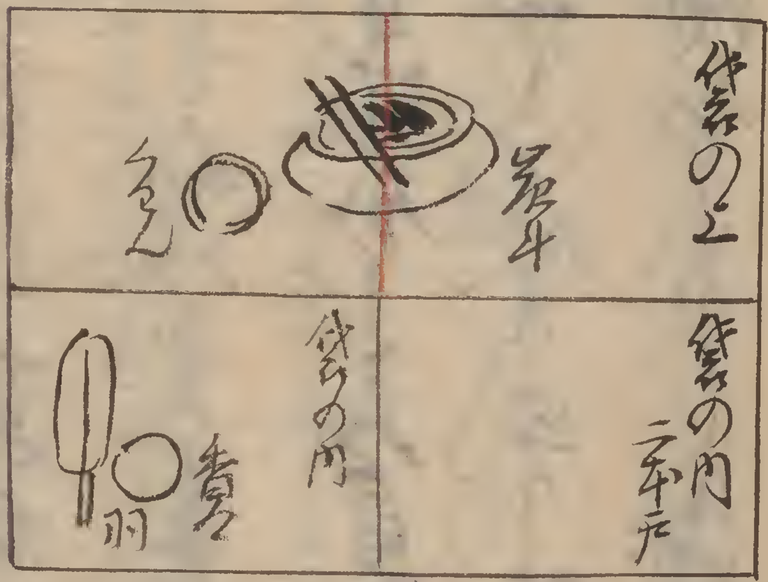
志野の袋棚之台子のごとく多くは茶入茶碗
たてる事をあるべし
棚の台子台子のごとし

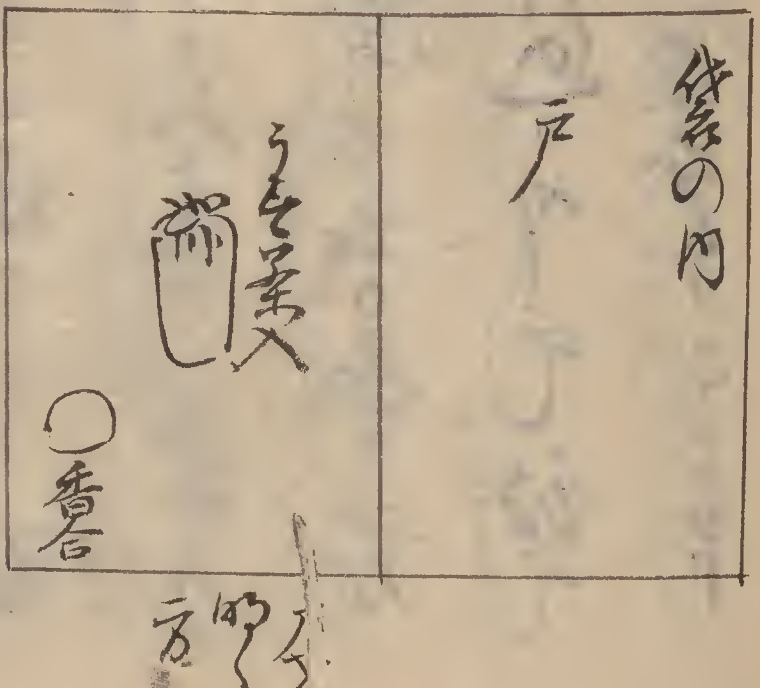
右袋の内にまへがごとく
いづれにても
戸をあけて附
真率にみては
やうに



二枚戸の押通しの袋あり
袋の内へ水指何にても置附
戸を閉ての中まで置くべく







五十九　道安台子の事

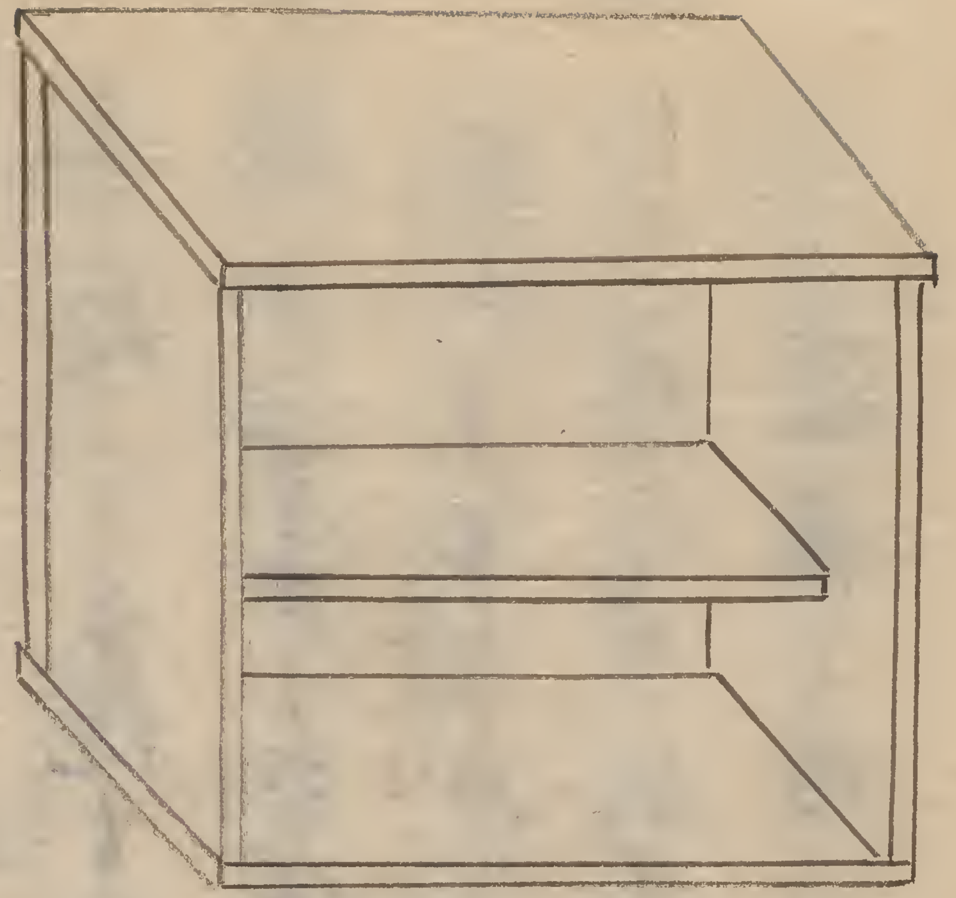
台子ハ常のごとく有り広さ長さハ本障子もなし又障子一本
もなくしてくきらじたとへばまん中より台子を上下
障子ハ勿論広さのまん中より両方へあるべく以本

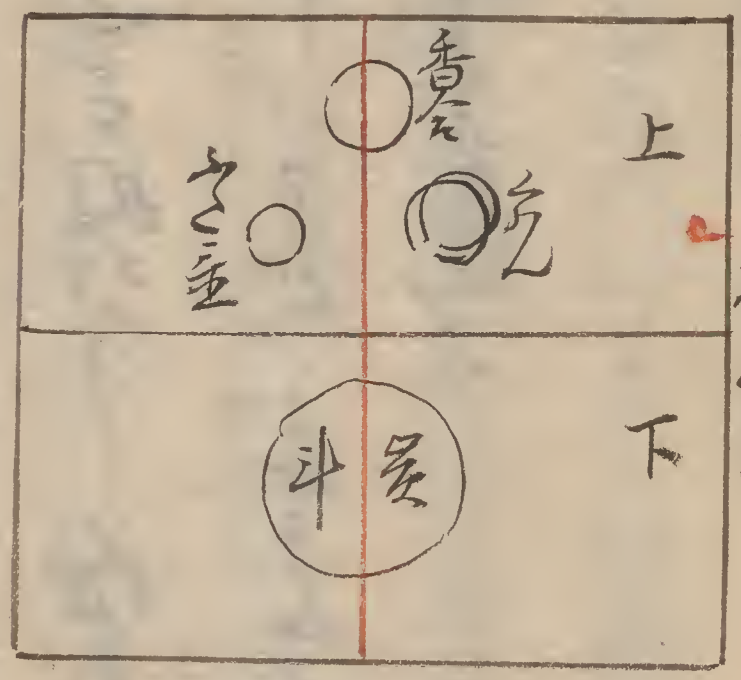
障子ハ竹のさしなと高く明く西南ニ向てかさし
上のたなニ水指又茶碗ニ而も置くし香合羽箒置き
なとも置其の方の違へし置へくあるなて西南よ
上ニ置炭斗入りニ而も下ニ水指置くニ如何も釜
釜ハきりし其下のところも真中の下ニ水さし成
とも上ニ置炭斗ニ而も仏法ニ置申候洞庫
是を以て文庫のごとく是ハ洞庫の座と云ふ寺方
ニ而ハむかしハ茶湯ハいつれも皆押込ニ而置
洞庫と唱ふとも湯を置かしハ風呂(水)を置かしと申

なりけれハ利休大徳寺ニ而置く右の洞庫押入たる造
まさきや左付中柱の又台子飾つけのハ飾をもつてしいさう
この跡ニ用ニ成よりこことも云ふとも中に仕て洞庫の内
袋棚の内ハ客より見へ又ハ明らかなるを台子と云説もある
又一説とも云説もあり数寄者ハ洞庫斗ニ限る次
第ニ至る万事台子ニ而さし成かし置八ツ置ニ茶の
台子と中ニ而申し及申事ぬよく其主のあるへく
ときハ内ニ而中ニ旅人前と云説よろしくなり

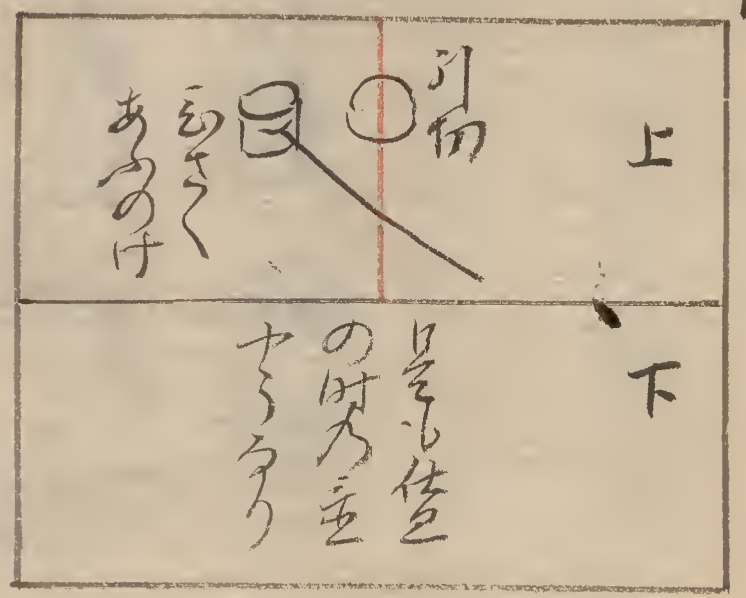
道庫之内

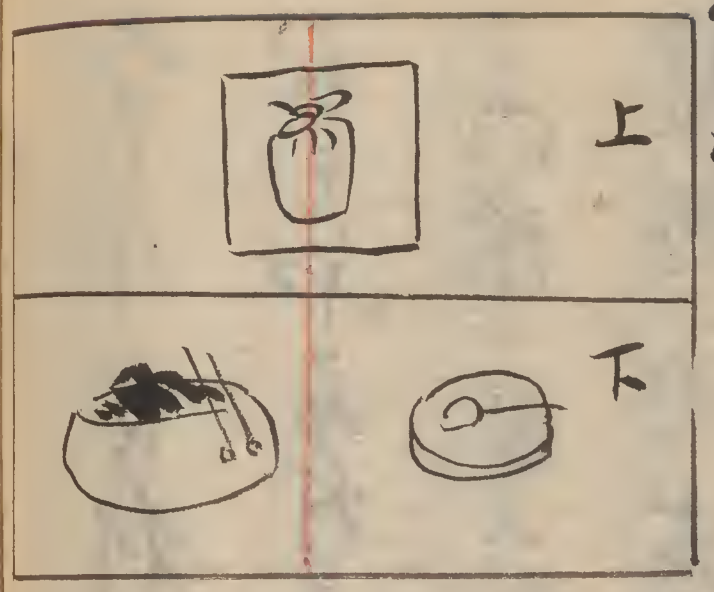
道　庫



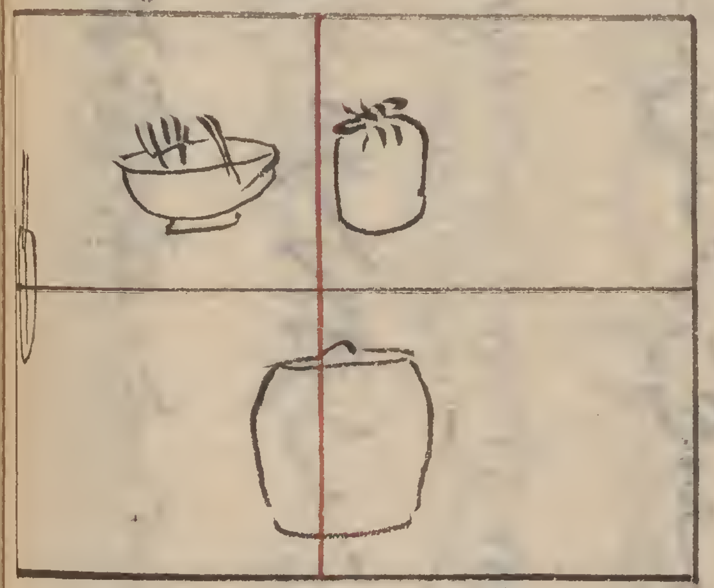


同

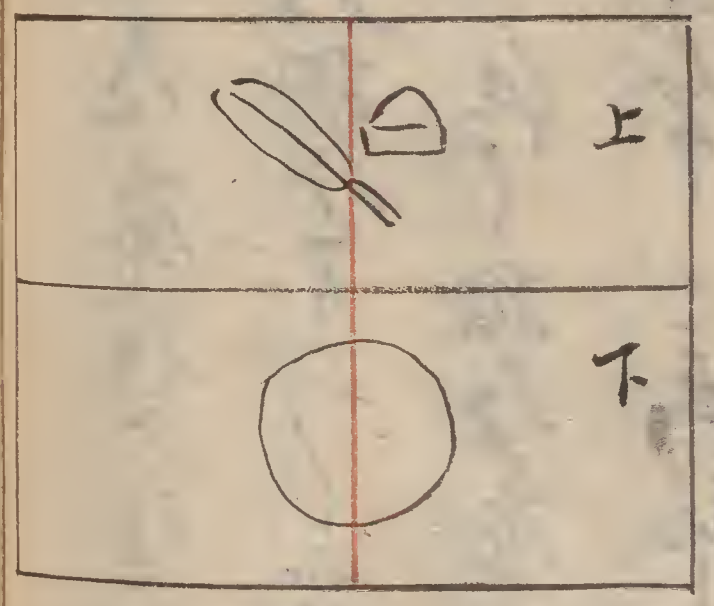


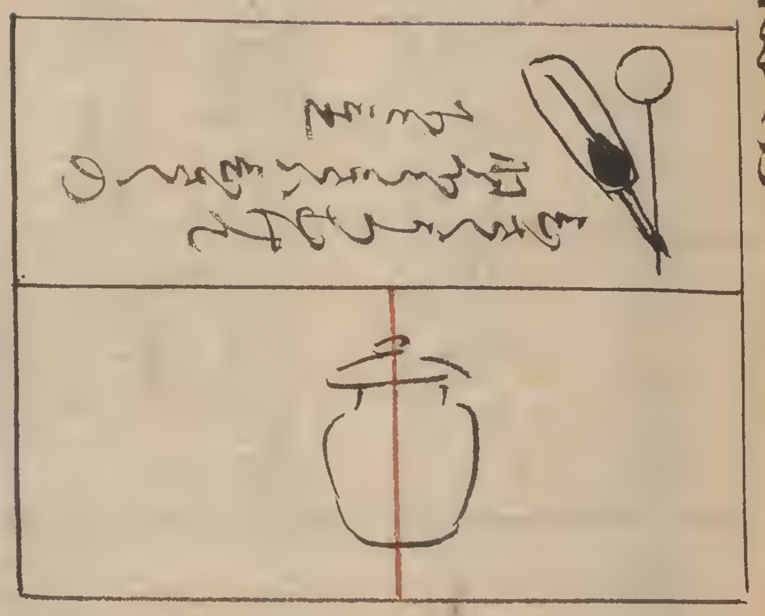


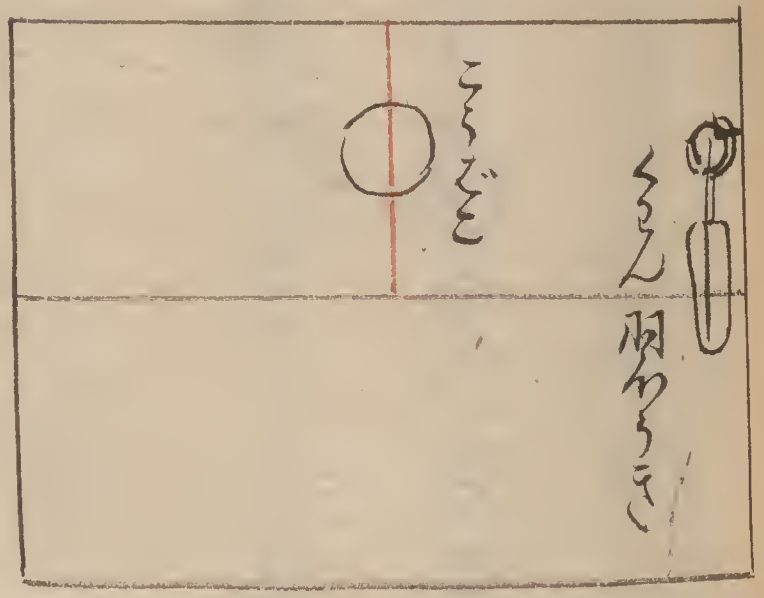
同

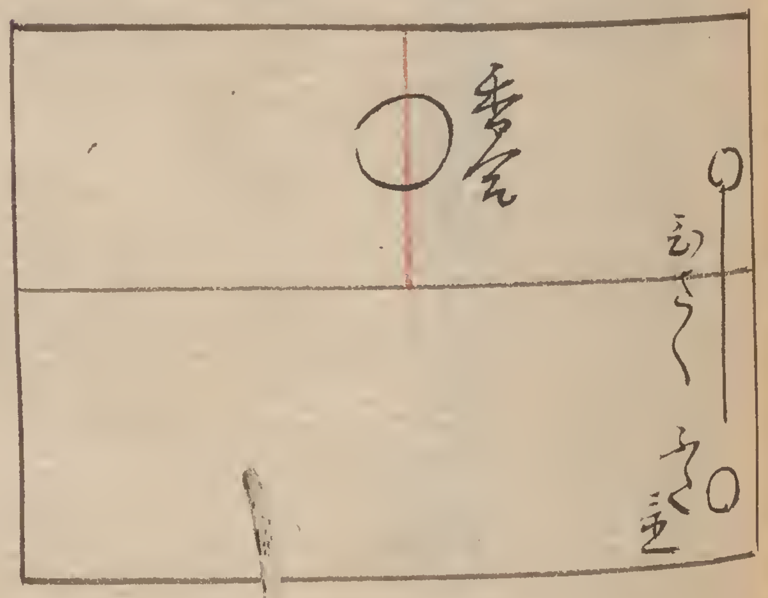


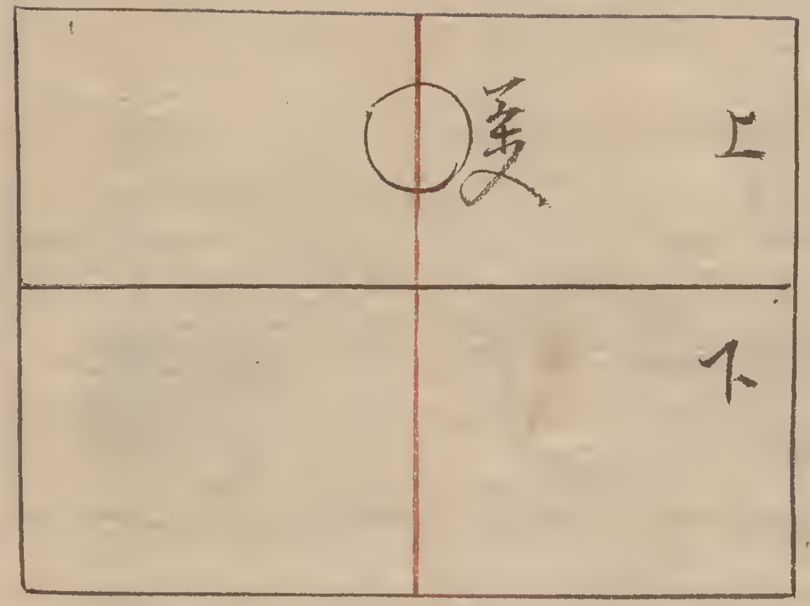
同

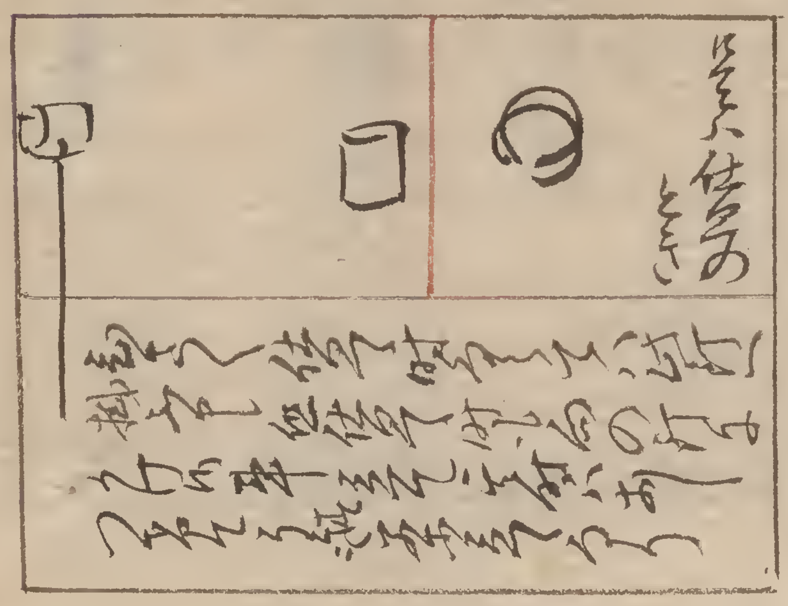


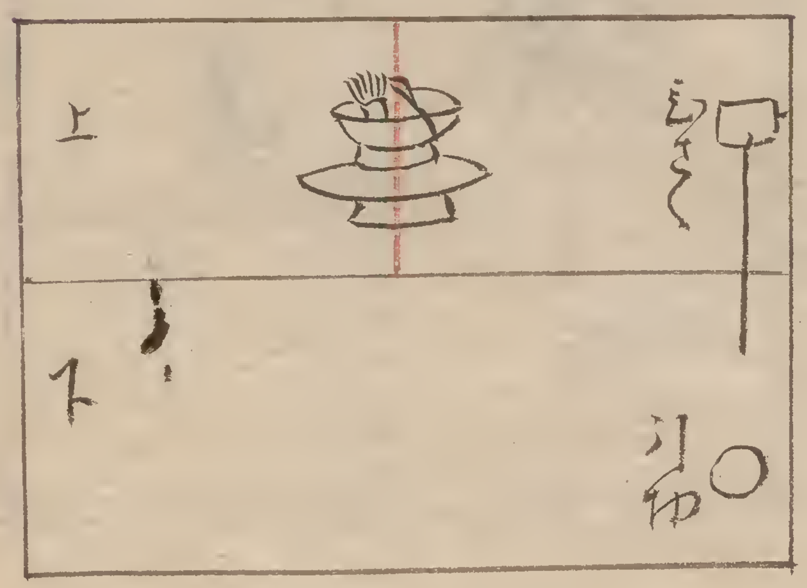


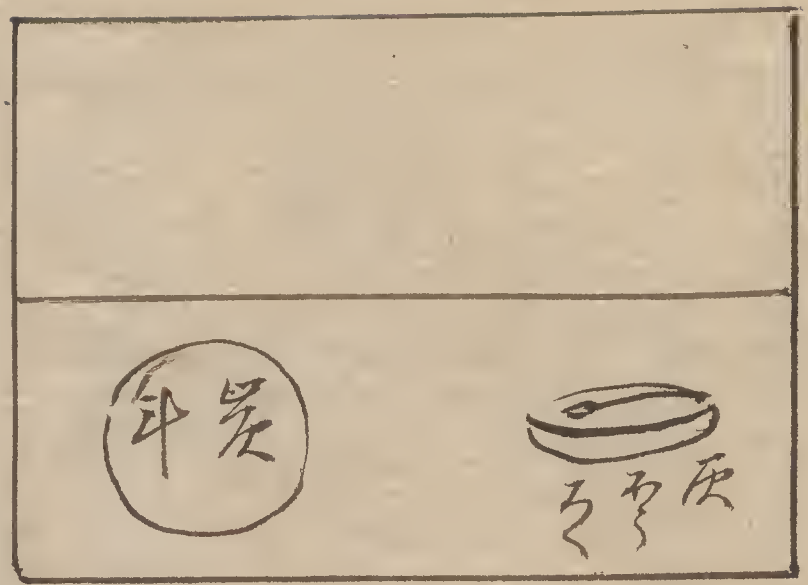


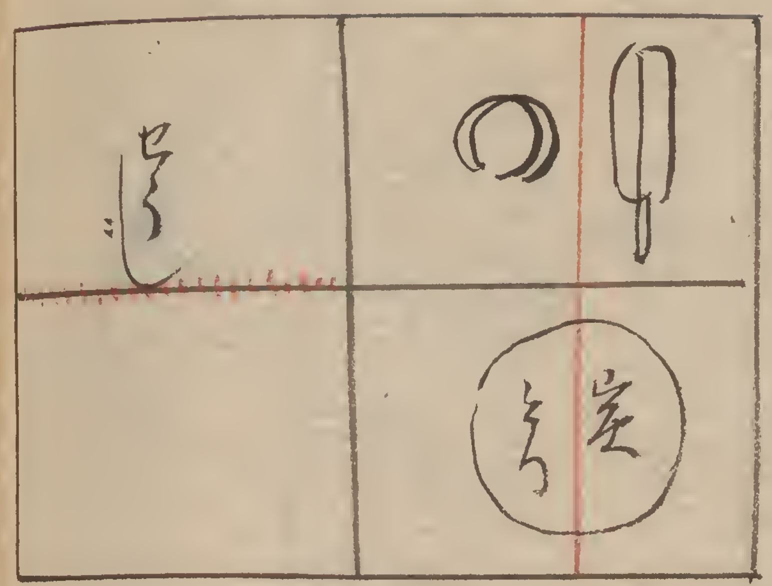


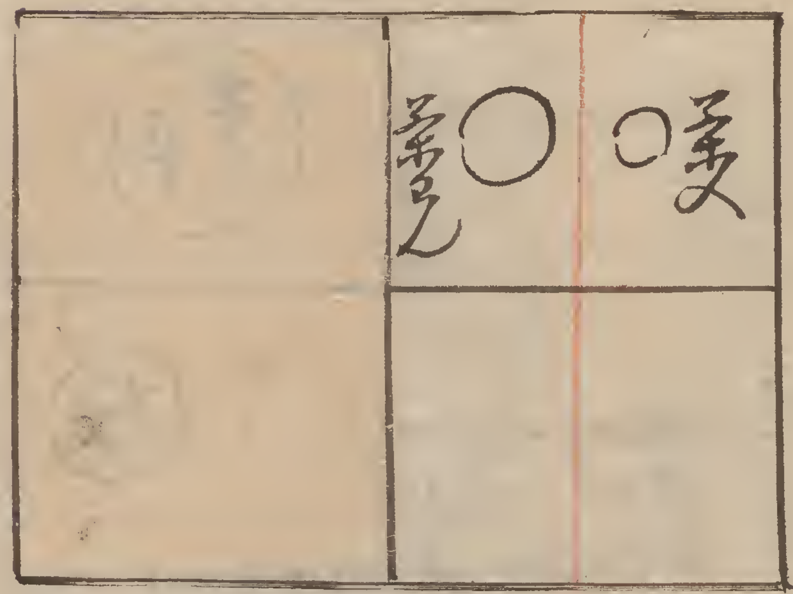


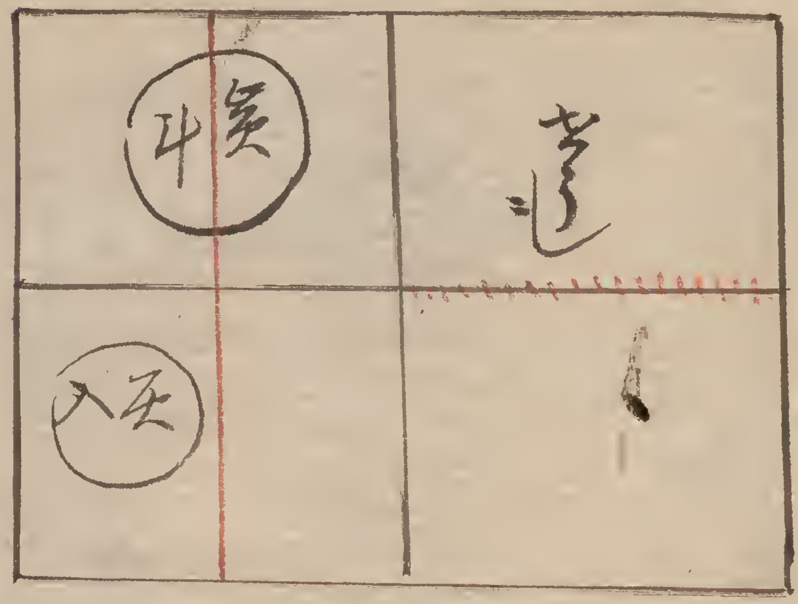










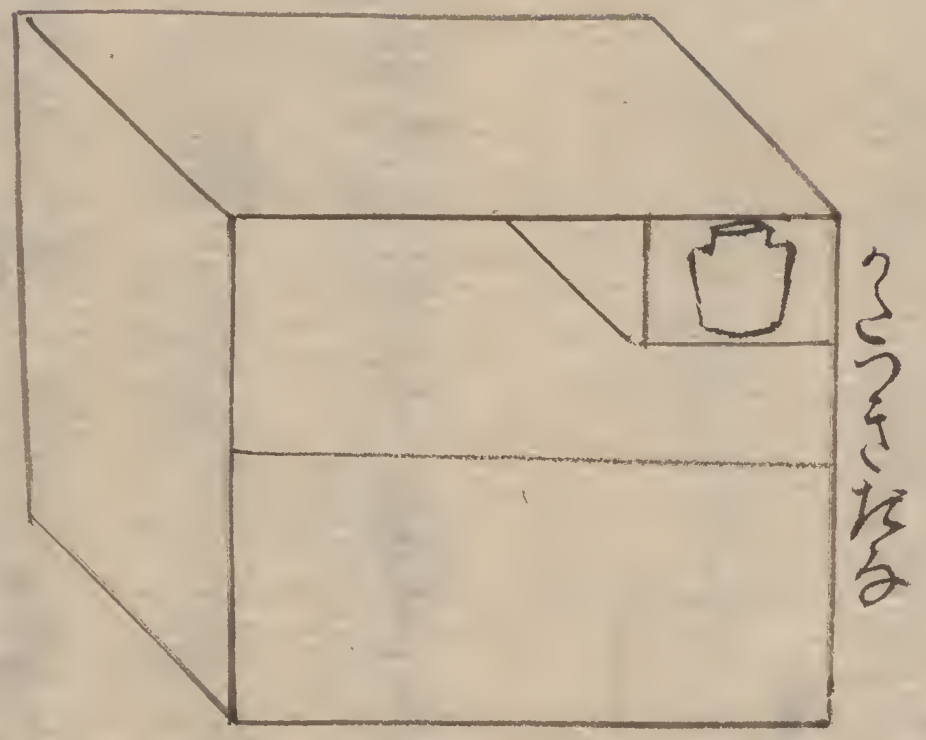


一　六十

道幸ハ眉衝棚と云ものあり

石床の同上のまゝにおきて棚をつる也是ハ名物の眉衝

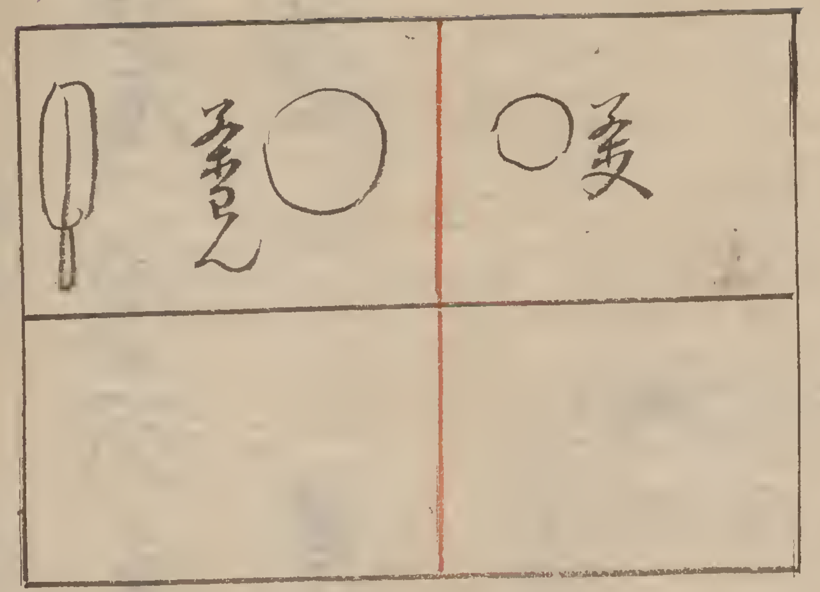
所持の人かさる用し之眉衝無之人ハ不用

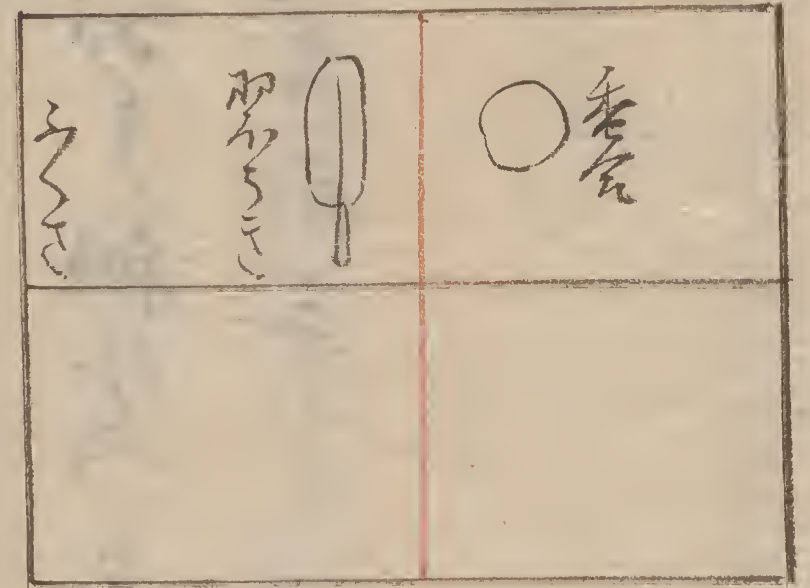


六十一　道幸拵道具ハ云々之事

ひとつの拵ニ道具ハ何も組合を置之炭取ニ香合羽箒
又茶入茶碗羽箒出ても段々出ても何出ても何れも同之

六十二　茶を二種置く事





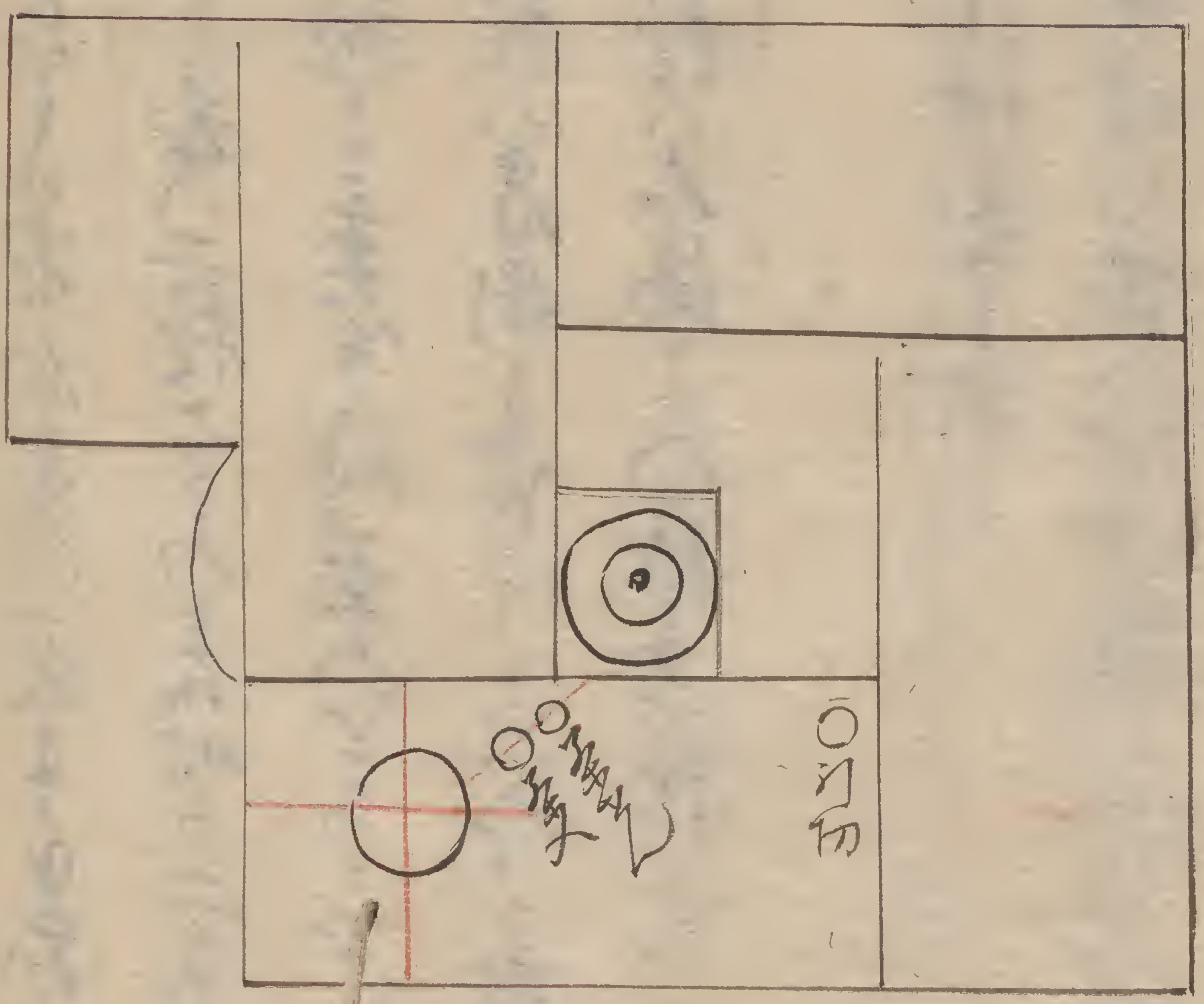
時ハ右も茶二通置くとも茶しは古来の茶ニも茶
の茶壺ハ新茶ニて古茶と壺ハ二種ニて置は時の二茶
換て置時ハ茶碗ニ入拵ニ置合は時茶入をち合は
たとへハ丸壺ニ袋入を一種ハ肩衝ニ袋なしに入置か或
古き茶入ニ袋なくて一種ハ大海ニ入合拵ニ二種をちの
へ中山

六十三　写を出して数寄ニ打切置事

写を出して茶を打切置時ハ茶入を水指と炉との
間の真中ニ置て茶わんハ右手にて取り炉の方より

茶碗の先つまりは
柄引切とおなじき
かくし所ろぞ申し此
ときハ釜のふたを向
ハ居ニ置のひ之右柄ニ
て茶碗ハ大前ハ引切
茶ニ申し奈良国学の
ごとし

四畳半ニて引切茶の図



六十四　四畳半ニて茶事ニ引切茶事

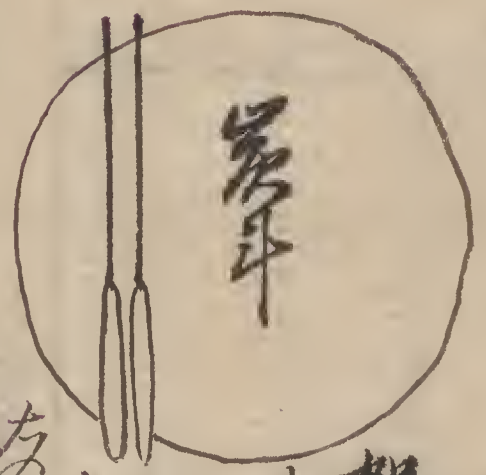
先ハ引切茶ニて時ハ茶碗を
水指と炉ぬらとのきん
中ニ茶巾は茶入ハ未とり
水指の方ニ茶巾は此時
ハ先ハ見ろきニ立ちニ乱
引切も先ハ茶巾は居つる
ともお水指の方へとね
又茶碗ハ向居茶巾は袋柄

引切先ハ茶入ハ茶入の図

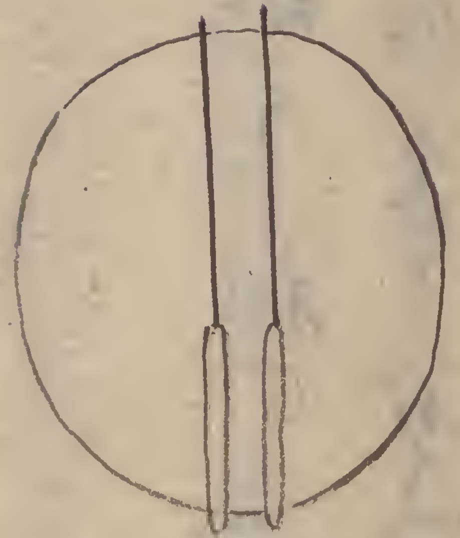
かやうさハ用ニ而も無細器乃時よし

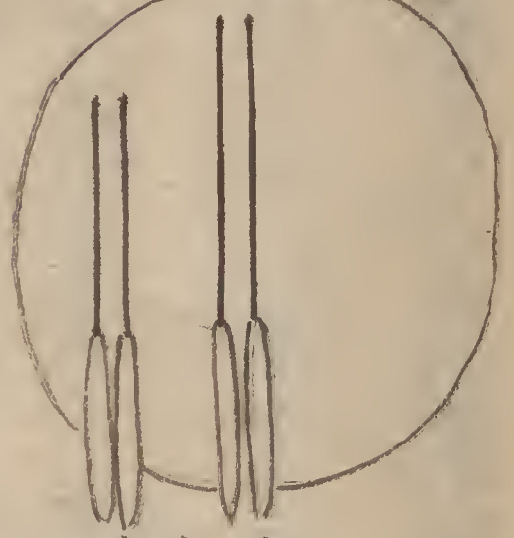
六十五　火ばし炭右ニ置候ひ所ニ置候の事

火箸炭とりにも置候ハヽつまみのさきかくへのさきに置申
風炉も同事　右者ハ風炉ハヽ其丸方ニも置火箸先
をさしへのさきく置　炭もさし候の下ニハ炭のつくへ不申候
ふくろうに置候　炉ニ据候ハ炭斗
の真中に置候　炉の火箸
先を内へ入て置くことにさう
也



如此右のふちに火箸の先をよせ
のせ置申也ハヽ炉之
右の方の火箸
置風炉も同断



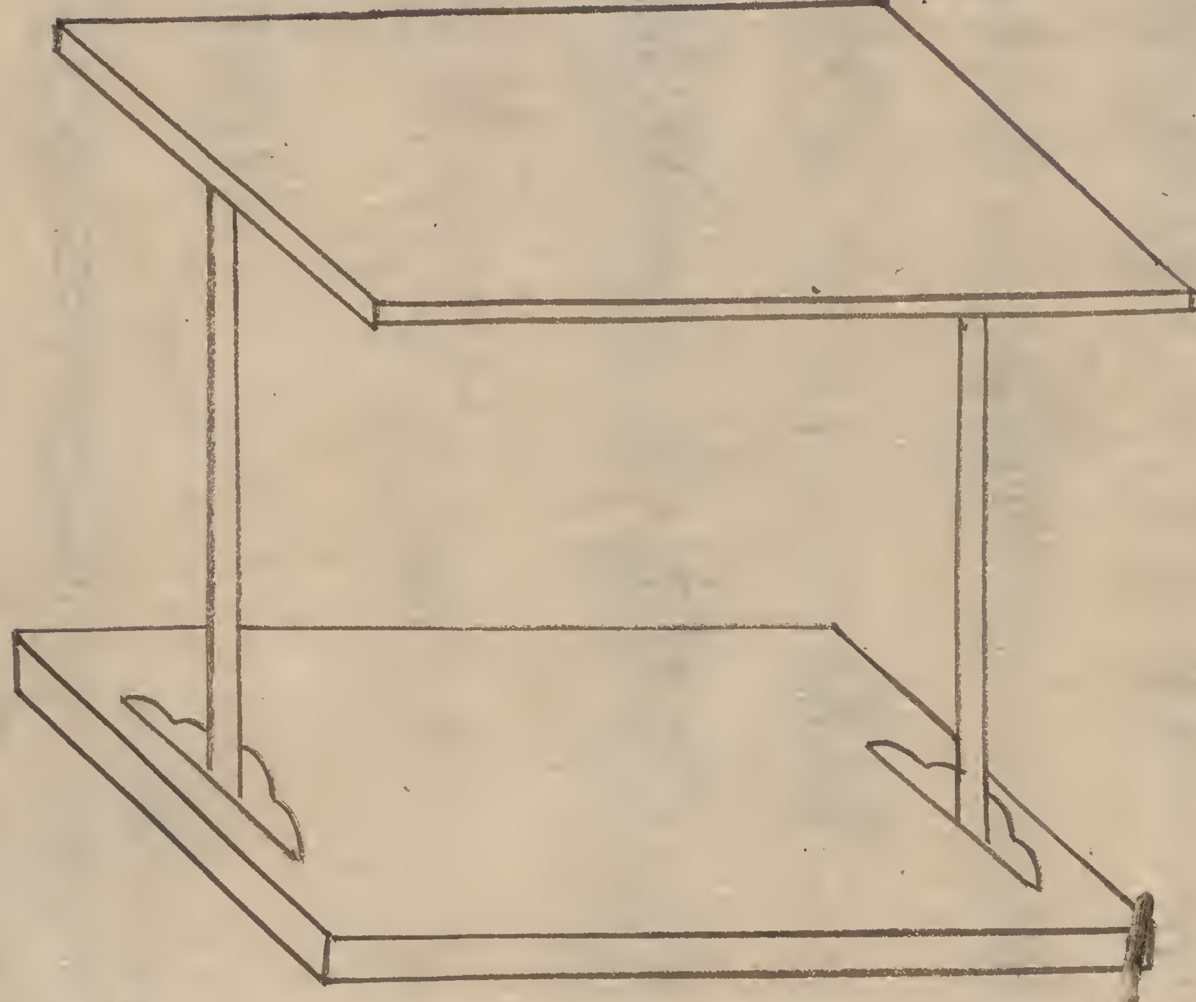


炭斗火箸さし候にて
火ばしのさきを炭斗の内へおし入
置候とさうふ

六十六　二さうぶくれの事　二季据あつる

罫の椎乃長子ハ真なり及第子ハ行之竪柳ハ草なり
及第子ハ唐にて学者及第いたし候人を画紙にいたし候
門之生を及第門と云　此つもりにて及第子と云　置据を
炉より八寸左右ハ客付の畳の目のかさと二めもあけて置

右ハ勝手台子の画図之



六十七　水さし棚の事

水指棚ハ名物之外ハ寸法不定なりさん芦棚竹棚等有

長板の棚とても形ハ名物之何れても棚之類ハ同事ニ候へハ
台の真手ハあしも書院飾ニ候ハ寸法ニ袋棚の如くなり
台各あり左右の太さともに道具の置合ハ
風炉之茶碗ハ上ニ置茶入ニ水指引切之とも茶入ハ上ニ羽箒
香合茶入のときハ上ニ茶入下ニあるとも又ハ水指の前なり
茶入茶碗あり丸香合ハさかしくして一棚そてなり

六十八　水こほしの上ニ茶杓置事

勝手の時ニこほしあいらしく財ハ置くのこうしにて
打しの上ニ水の置きても出し又水ニ茶杓ささし湯を入置

く後ハこうをところしてたき申しつれ申にこれしたまへハ
始りこうをところしたき申候

六十九

さいろうにもてもすみくべにもても炭組様分持あり候
すみくべハ何としてもよく組つるまじきのよし
炭の組合様ハ大き成をくへ其ハ小炭を入大き成をくへて
浜山をつくりてハあまりえんをくすしくてさま元のんくすしき
あしき小炭をつくりハあしく小なきにつくりことさきあしきり
つよ山をよ文をくへて炭様山をつくるにしてハあしく
こまやかに大炭をつくり山組そしてよきさ様ふつくへきのよし

すみくべハ其のつまりはからくはいかよつまりこへハ炭よくしまり
其申てあしくすおきさよすみくへハ様にかくよくくへは
手をと横に用て炭を文申しぞり炭の門出しよき様よ合
はなしに通りかく十文字ハ子と同しにならてもさも始申
外当流にてもこを道成十文字のまんなかく組申候

如此組申候十文字
かやうにくべ候

炭ハ
あしく候

七十

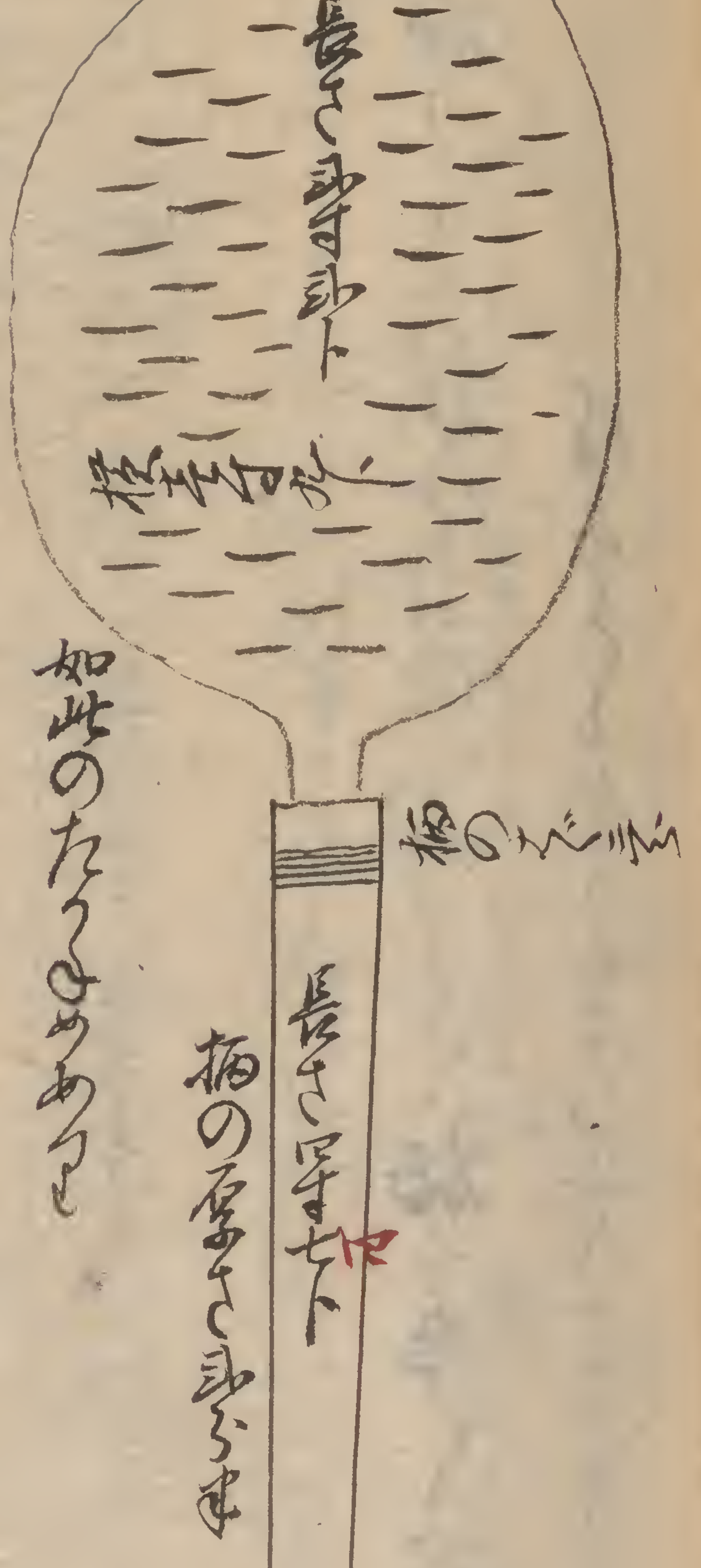
香合に大きさ物をかへ分様の事

炉にハなき物風炉にハこれあり定りたること也三具作りハ
伽羅を香合に入置なきやし終まてもこれありとなき物
二種取ちらくなき事ニ葉の伽羅くべてを後になる
物なり先ニ重香合なとに入て八一重伽羅一重なき物と
組合申し様なるのこともなきことハ先代からの事とハ
彼めか能くも聞し候申し定なりハ自然ニ用ひまたてもよ
一挺に大香合にハなくなく入小香合にハ多く入炭
斗図案の分之二段案なりにてならくなくもなきなりたに入
候ようなしとなり

七十一 灰すくし風炉いろりと二ツあり組風炉にいろり
乃すくしを用てくるしからす
灰すくし二ツの内風炉にいろりのすくし持ひとて
くるしからす炉に風炉の灰すくしハ用ひ申し風炉
ハ常の灰すくし一本ありさ銅のき柄の長さと一本にて
左近殿なとも出し候にハようもありしれ
一 紹鴎時分ハ小去見を灰すくしに用ひ申し候と之
一 宗易ハ鍬形物なりてやうを枇杷の葉の形なりて先を
丸くしてもち候をなしくのべ付ニ木棱物なりても也ハ

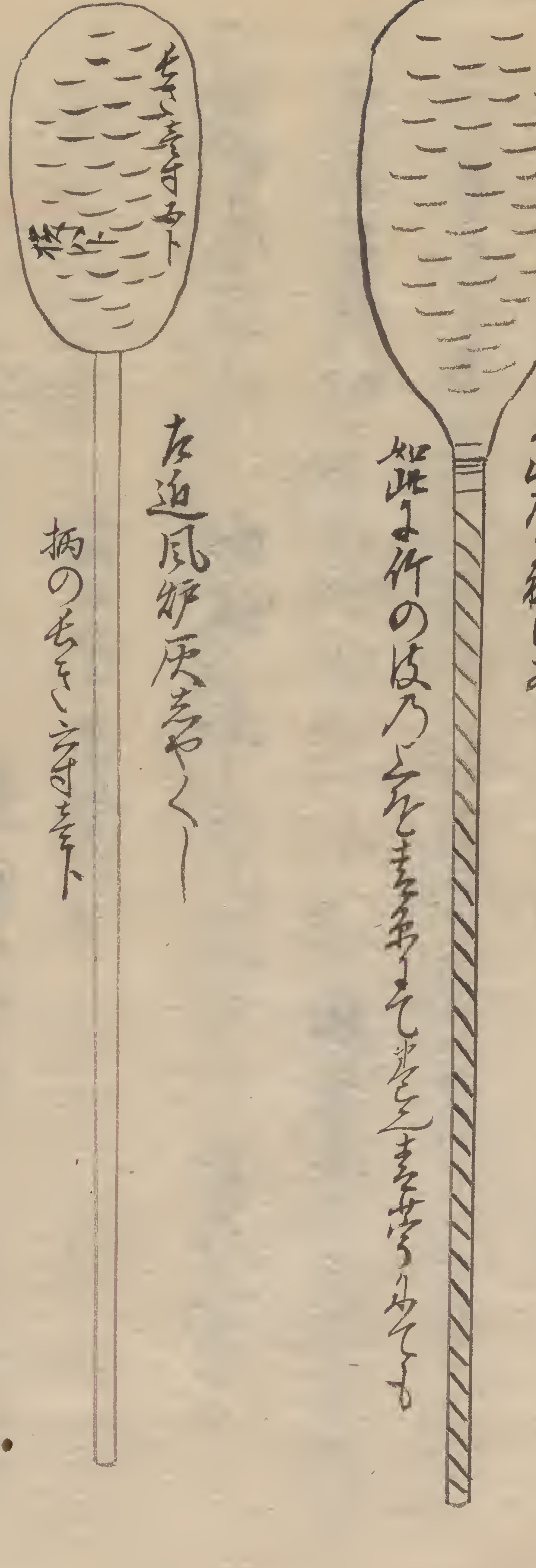
布さ茶匕かきと用る之を後にも布てるよみ柄まて折らへ柄
を竹のやうにゆく 茶用るなり
一 道安さとさへとうる切梅ふしく業の柄を用い灰さくひなん
るを布をあ柄の中へさしこミ本口を付るよみゆく
大きく柄ハ写用ま布つるめんをとるなり
一 鐵郎ハ灰さくひのるよを柄の刀布おのへみしててう
ぬきさ手布へ柄をさし入御さこひうらゆく目釘を打と
あるなり 柄ハ長く手とめふ布つる用るなり
道安系石州灰さやくし

一 風炉灰さやくし 利休ハ布るよの柄まてくおゟへなり



如此のたうをあると

一 道安石州ハかうる保打のへみして柄を竹の皮みて巻
きまき我系ゆく上よりわまてこぶりくしまくなり
一 東山ゟ道風炉灰さやくし ちんさくして柄をあつく
いうしん



此所より竹の皮乃ともを巻にて巻之長サ[illegible]

右道風炉灰さやくし

柄の長さ六寸五分ト

右ハしゝの杯をおのへ如しく 柄も丸く 次第ハ未如く

まるめりハ 柄もゆく 其外の杯を手まゝ用

七十二 いろりゆく釜掛ある事

いろりにて釜をあげる時ハ釜をまへへく表よりを

のだし[illegible]付申さで、ようさぬく[illegible]

を出し時ハ釜を[illegible]あきを炭紙付[illegible]を取申候て

炭付候へハ[illegible]さりにてするく[illegible]いろしたる炭紙

落申候て紙ハ釜をおきの方へ風のる紙よしく

取申て八炭紙の付申候ハ了て申候釜掛[illegible]時ハ表の[illegible]

ちを[illegible]付[illegible]申候炉の右脇と釜との[illegible]

あきさ[illegible]て[illegible]くあの方より丸[illegible]さ成

とも右脇と釜との[illegible]あきさを続と[illegible]釜を

茶巾ハ炉の時ゟ釜土器ト云ニ置候と覚て○あれハ
何もなく釜之茶巾ハ釜蓋紙ハ帛紗ゟよく置候
おりかゝくあそこしても切目也ふしと穴付の方ニ
なる是於目傷のと茶入あつかしらよく候是刻限て
候筆
一 いろりの釜の掛やうのこと古来ゟ也つかしき事なり
いろくハ能く穏当ニ仕候て見あつ躰く候ても熟し候
夫を懸やうの風雅よくも炉の内もよくつゝ合ものさ
つと様子ハ手本のやうにて三重ニ有なハ四畳半茶の大目よりもよう

畳の真中ニよせ手一重之一と本茂之句備へ釜ハ鉾ゟ也て
正在ニ三重ニ天井之所ハ釜を高くて時ハしかるり出候
客へ真中ニ居申ニ三重ハ小あ前三重にて時も
相ゟ掛る扨ハ之ハ鉾の真中ゟ下ハ釜のり
去ニ不中ハ於何ゟ自然四畳を中ぬて真中の時
ふ水指物なとあらし時ハ鉾の方へ引よせても見
切ニもしへ釜付ハ釜蓋をいろりの小三重釜蓋を出て
蓋付ハ引付申し又懸て時も初の如く引寄て懸申候
釜を元の如くにハ畳縁ニ候ともても略義也て候ハ傷

すみさき振舞のことにハ世となりてハ大目の時ハ大かたハ此通
りに勝手の上へ引付申候宗易まてハかくれとも八板の数無之時も
釜の置所何方にても向に見合ある所に引付て置へ
よき方へとるへし二申候振て置さけ不申候は其説
風炉先窓有之候ハ真中風炉二置候振て窓有之候ハ
据へ引付申し水指をおきし時ありのあまりと振手
向てハ窓無之時ハ座敷ハ二畳台の内通を見合てよくは
一 長四畳半ハ角への上ときさハ左勝手にて向かまへていろりの
方に切りし時左の方座敷へあけ置ハ左勝手にて向き

左の方よりいろりを切りし時ハ右の方へ宗付へあけて左勝手に
の座敷もいろりをある如く宗同し所見合てよくは
一 宗仙洞雲居士釜の大さ寸法下にて二寸九分有之
は此格好よくは宗仙ハ左通なり
七十三 炉のかくハ客あまたおりしの事
風炉のかくハ上おりしと云絵を覆を立へておりし候時
勝手の方ハ台子をも置おりし申は床付ハ右の台子をと
道ておりし二申は置付の二右の台子をと台子をまとめ申は
へと読しよきしとの事にて絶て元其ハ古法にかく候

せらぬ古法ハ勝手の方ゟ向さゝせたるへく申候

一風炉釜ハ左勝手ハ和尚客付の方へあましまへ直ニ申候

釣釜引付不申候へ引さけ候ハ客炭一度ノ△申候時掾

中右勝手ハ風炉左之あまし候ハ左の方勝手へあまし申候風

炉左之あまし候ハ左の客付へ上ケ申候

七十四　釜のかん通し様の事

右の方をあらため通し左の方を前より見しらし

釜輪の紙を左出し釜にて手を上ケ通し申候又

左方ハ釜の向ふを左勝手ハ上を打ち申候

七十五　炭之継目の事

炭の実ハ湯のつよさ為なり底の実ハ火の清浄を照し

出る時炭おこりハ見しさ相之さま花くしてもおちつかね

ぬや左の面白く相ゆるとも相之継ぎ左ゑ来くゟ

水に入り実を共に湯の下ハあしくて炭ハ実を

おとして釜の底の真中通りによく香く湯のよく

こと本意也まして釜に紙も客茶や水かくると継ぎちる

あり是実を七八分ほどにて京ハ二三分を用る也扱底ハ不

よりさや左申さる掴之掛のよく底の入りよくあしくらぬも

是くらしくなる也候ハ間古さる風流ならすして心の清
浄なる様にいさきよき是第一也炭[花]とても此心得へと云し
なりひやさぬ様に鏡面をよくする事本意なり

七十六　炭のわりと云事

炭置時炭のなおとしてあとよりつく時ハ白炭に
てわりつくをおきてわりと云

七十七　数寄屋の花入を持出る時ハ茶入を先に持出床の[上]
に置て扨重棚板を持出床に置て茶を点前也
本矢し通之茶入ハ袋の掛物先ヘ持出し後に棚板を持出

七十八　禁中にて利休経冊を拝領の時袋棚乃内なりとて置て
経冊ならば床下の棚に置て硯置て出の事
経冊拝領ならばむかしよりかくれなき故経冊をおろしあるまじ故に上宗
二重棚をおろして二重棚は是数寄屋道具にてなし只此棚
きの為に茶湯をいたしたる故此棚をおろしとして置也

七十九　元日に利休茶湯にて濃茶を二日是打のまえて重
右の方におろし硯を二重棚の中の事
是又数寄道具にてなし此時は元日を祝して
茶湯をいたしたる故濃茶をとりて二重棚に

右二ヶ條ハ茶湯者の秘ス物なれとも無据手ニよつて附
書しるし候何れなくも数寄屋ハ二畳台出来手も少くしれとふ
ことを知らせんためなり

八十　右勝手の一重棚ニ水こほしの置様

右勝手の一重棚ニてこほしハ右のわきニ置て飾るも
こほし何とそ由緒ある名物なれハ左の客付ニ置と
又説ニハ名物なりとも亭主ハ下水こほし亭主ハ千候
右の様ニ置く事もあり客人亭主のこほし見て茶立
内ニ名物なれハこほしハ右の様ニ置と云又ハ大勝手ニ

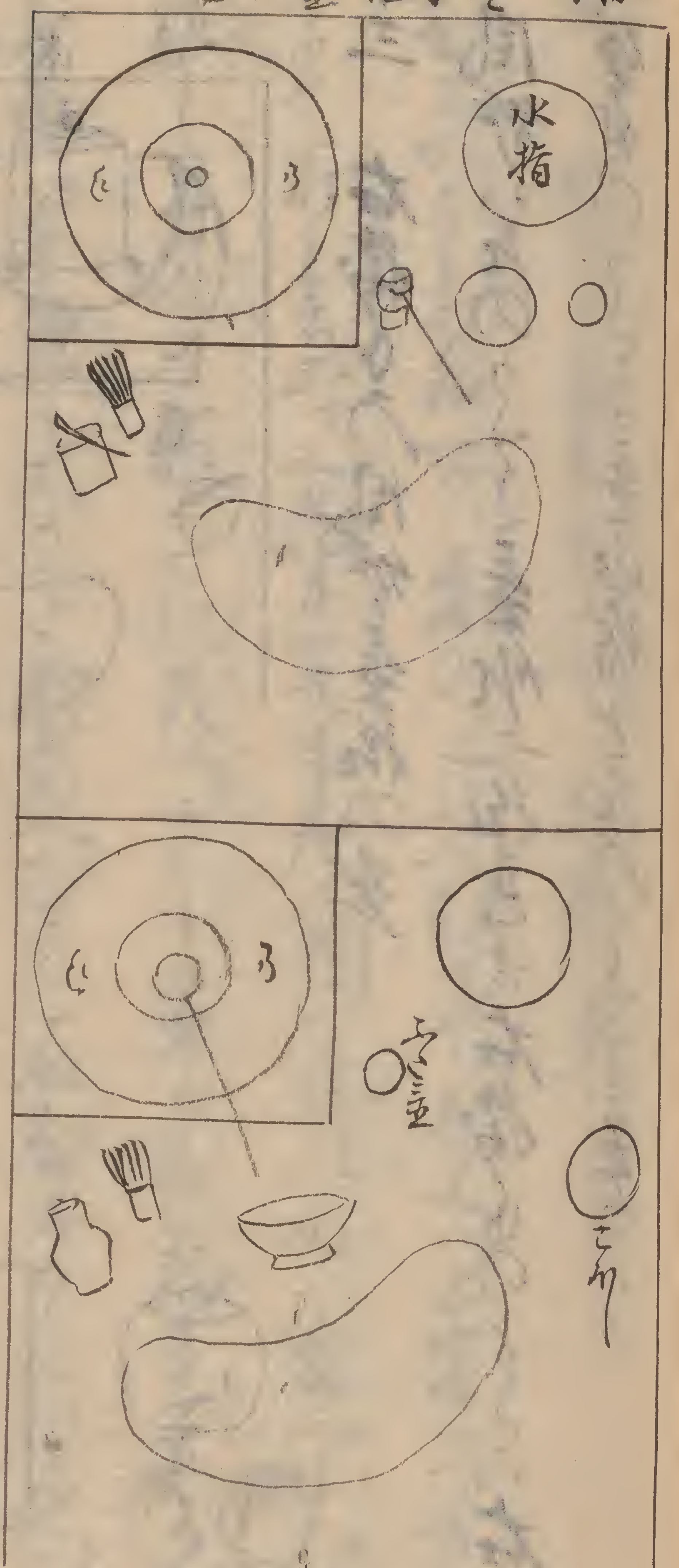
なとさい此之左勝手ハ名物なりとも常の通りなり

八十一　同乱置と云事あり

右勝手の一重棚ハ先勝手なく乱置と云事あり釜ハ蓋
ハ水指の方ハ炉ふちの際ニ置之茶入茶碗を左ハ方ノ
炉ふち前違ニ置之茶碗ハ手のつめ所ニ小茶巾茶碗
大きなる時ハ茶入を此手のつくへ置目をかけ出すの
茶碗よりも釜の蓋も小さくして置様なくと居ま
通りく先茶碗と茶入ハ此茶入を左の炉ふちの前へ
出し茶さくニ置茶筌出し茶巾水指の前ニ置板

置さくべと右にかく左の手へ持右の手にかく引切より
右乃炉ならのときハ水指の方によせて置おきて釜の蓋
をとりて常乃通りに初よ蓋置置さく去して建
茶碗よつのへあしく仕舞時も先茶入茶碗左のかたに
仕舞置釜乃蓋水指の蓋もしめ引切置さく左乃飾
のごとへ仕舞ふる也右茶入茶碗水さしの前に置 仕舞ハ
さるすく也へハ茶入は仕舞へ中は扱乱置乃ときハおかひて茶入又
切右の客乃ときハ水さしにて乱置乃と用てよし 去廿て
茶巾防置乃ときハ常の通りに置なるべし

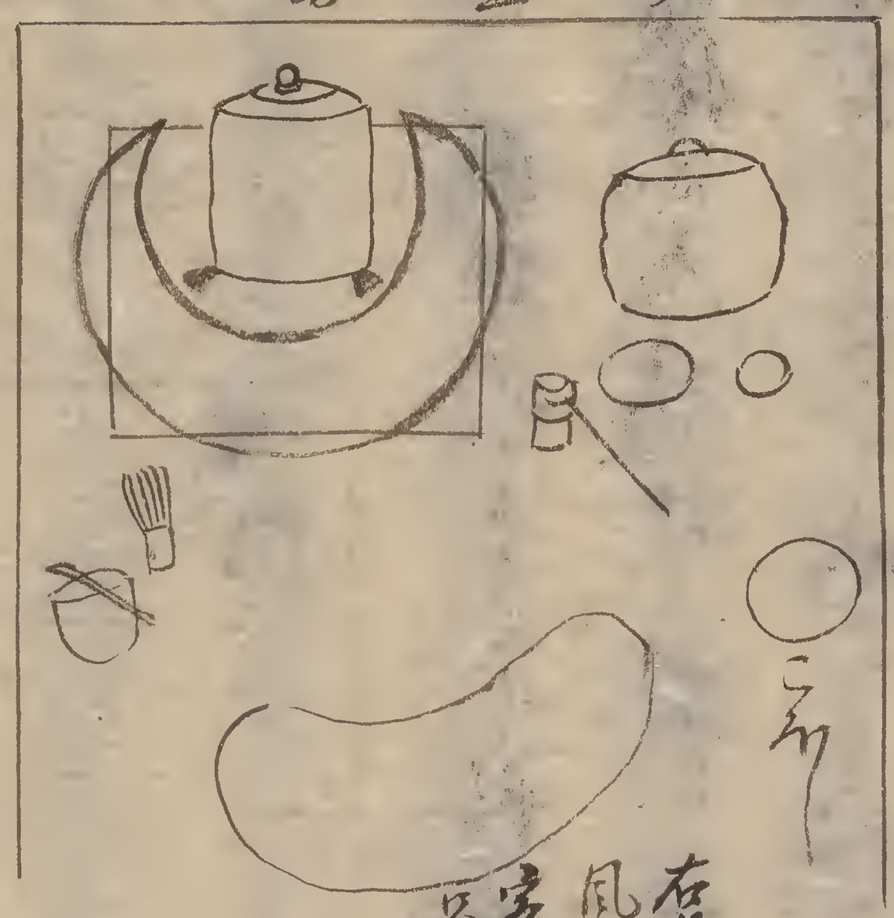
右勝手一畳半乱置の図

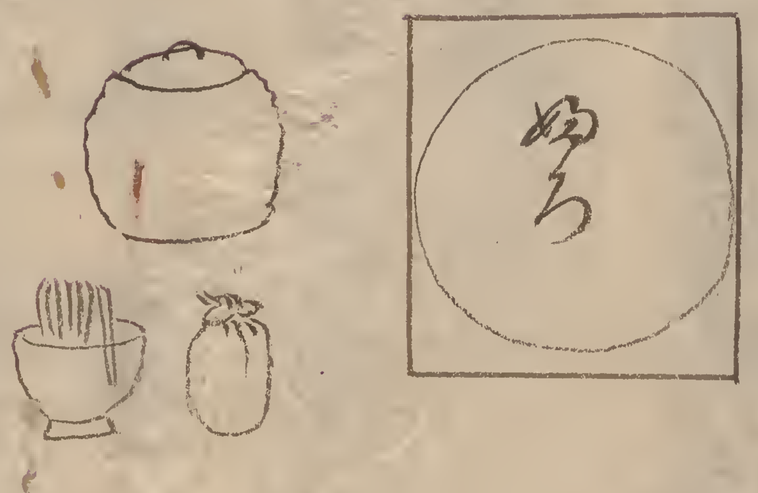


八十二 風炉のときも乱置と云事あるべし
右勝手乃風炉ハ右の壁附に置てさて置之茶風炉左の
客付に置て水さし壁附の方によせて左見つくろひて
此ハ是も風炉の左の方に少し勝遠りて茶入茶碗置て

秘釜ゆかりある之

同炉の釣釜の図





八十三 右勝手乃風炉釜据の事

風炉ハ左のうろに釜据之極また右勝手の時ハ右乃客付のうち釜水指を左乃うろに釜あり

八十四 釣釜自在釣釜据の事 一方あり

釣釜ハ自在釣釜ハ床のうち之へむけて据又ハ上客の方へ向

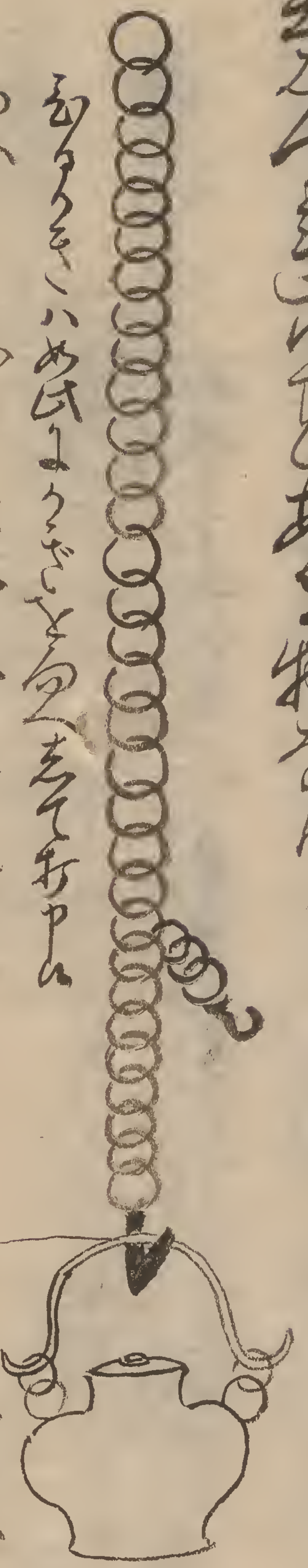
あて据と云う之極また床脇床の方れ付ハ床下むけ

琊し上客も何れに候へとも客の座へ極また成うずし

据候ハ釜懸へ大かご我前へむけし成釣ろ時ハ先へむけ

さ据ての時ハ自在のときハ前へむけてむけ候てあしく候

自在へかまへ候とある物なり

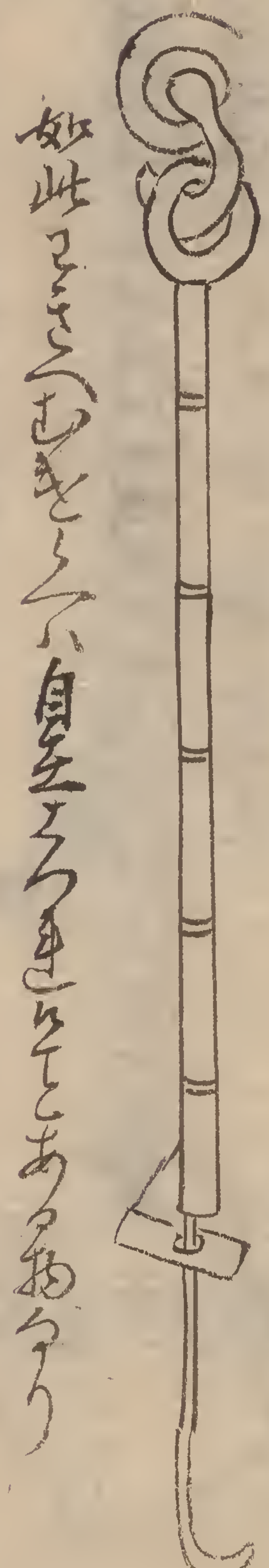


八十五

壹畳半の鎖あいあんとむ亭座中柱のあるときハ

亭主座あさきハ茶立中柱ある時ハ水さし亭主右前にも

あさき中也



あんとむ亭んあれとも中柱の向の釣の炉の右にあり

亭主座に軽茶も立中柱ある時ハ水指を亭主の右にあり

又壹畳半中にハ本とうてん有

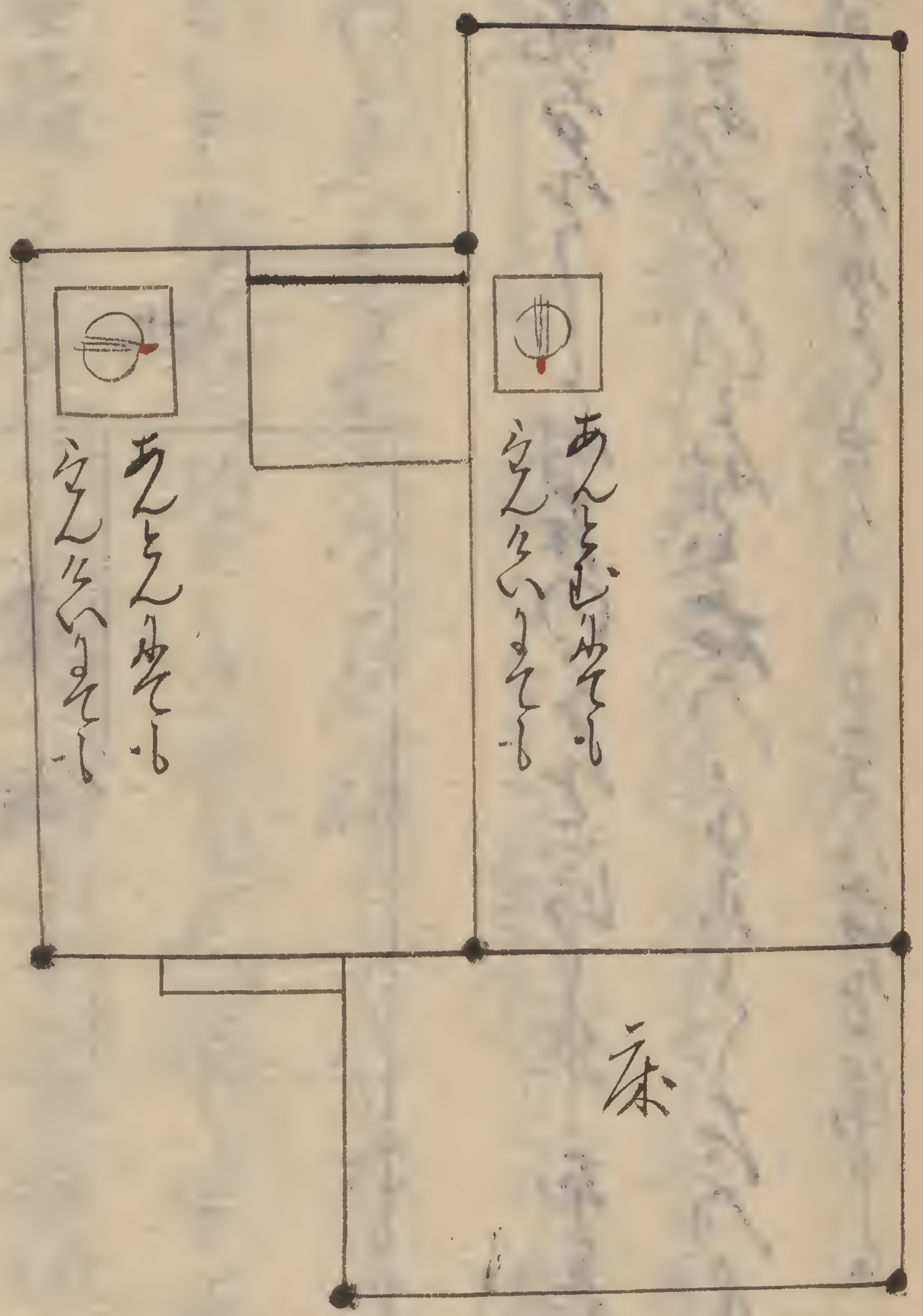
壹畳半あんとむ亭んくハ亭主右の客

八十六

冒畳半中にハ定んくハあんとむ亭主座ハ客座向

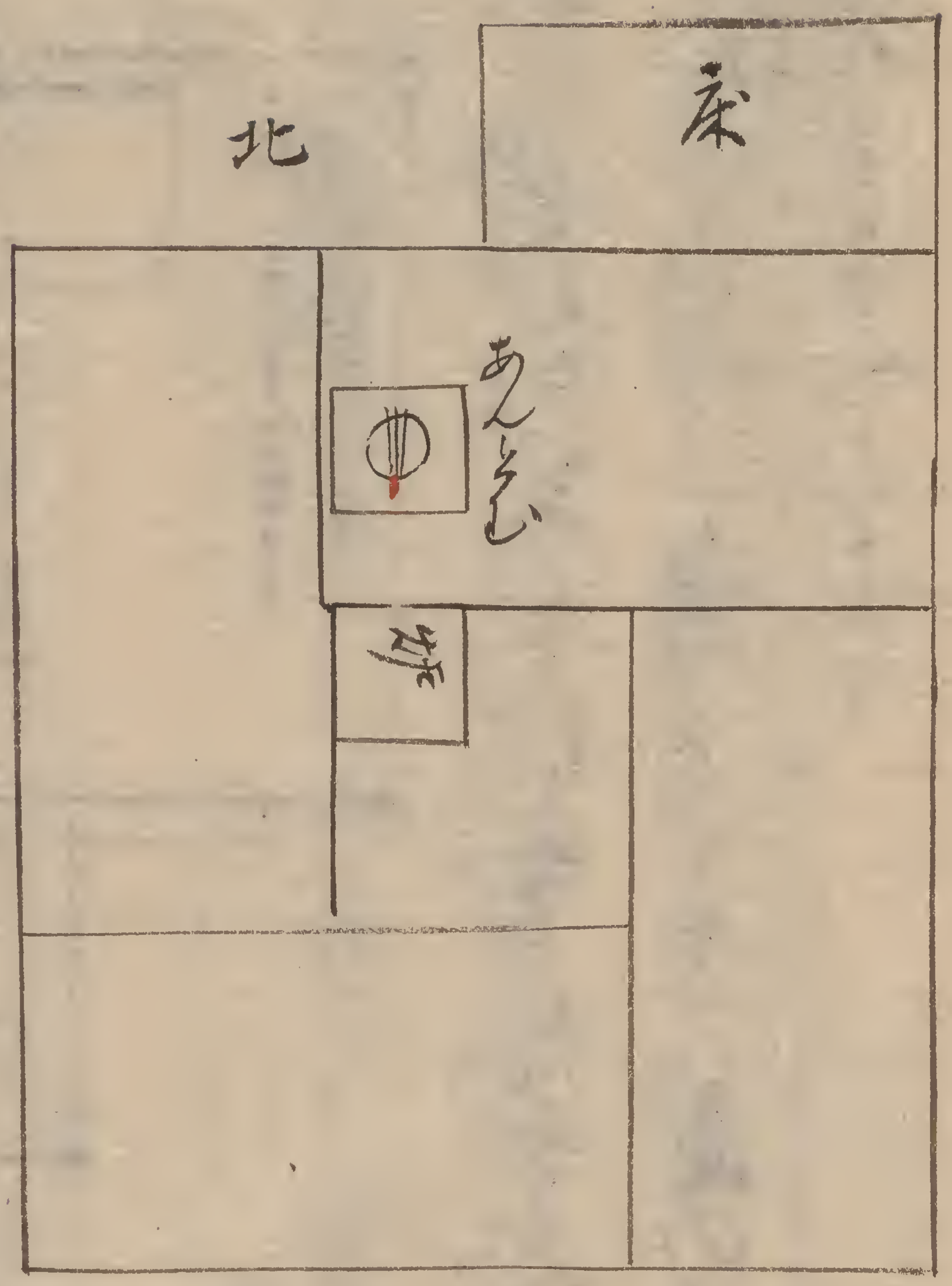
南むきに中くいろりを切かさとみくハ床の前なり

亭主いろりをきりかさへよせ候



八十七　茶碗なをし候時左の手を添る事本義なり

茶碗をあつかひ候時右の手ばかりにて左の手を添候を
本義なり左ばかりにてあつかふときハ右を添申候



八十八　なつめ茶入あいしらいの事

なつめハ小壷にても天下の名物なつめハ袋ニ入不申候
申候袋なくし候時も右の手にて茶入をとらへ左にて袋
をあつかひ又ハ茶入を左へ移しかへて右にてふくさ
にて拭申候茶入持申候ハ中にも人指と中指ハなかく
あまり無名指と小指ハひらきて底へ掛申し也小指ひとつ無名指
をかさね添申候客方へ申候時も疵付ぬやうにかさねて可申也

八十九　大海の事

大海ハかハゆへちいさき左の掌のうへにのせて大指ひとさし指にて肩

へりをとる也大海ハ壺の口ニ用る故也数寄座にて濃茶ハ
もいつしも右の手にてとり左へ入かへ中にも唐物なく
又茶入をかへしそでにてふく也袋ハ台子之台子
のあれしらハ茶の台子の下ニ置用る也
一濃茶ニ付茶碗茶入ニ壺大海ニ茶碗とおさまとの
事ハ壺袋とかへし袋をとり口のふきよ壺ふくさで
ごさ左の手のひらに大海に付ては抜ぬ持ちし右の
手にて入あしを扱ふくさにてふき置し左の掌に置く
へのきくふくさ懐よりおさめ茶入唐物あつかしらの

無きとある之茶入ハ壺屋も不苦と云ハ大海とりに付茶巻
と大海の口へ手を入あしき所をかへしてこすの緒を扱茶
さくふき茶入の上ニ茶さくの節此あるものを茶巾
にて之又ハさくかゝもさし壺之茶ををとくひに付茶杓
ニ茶碗のふたへ壺左の手のひらく大海をとり左の手に乗
せしかく常の無き台子の台子のあれしらハ之
薄茶にてさらく口の小ハ茶を入て置ふくさにて茶さく
茶碗の上ニて壺茶巾常のごとく右の手にて茶さく置
とり左の手にて大海とりあしを扱右の手のひらく茶さく抜

ありて添て左の掌にのせ右へむかへ茶をまくるへし

九十　台天目返しの事

梅天目をかり盞を返し あとのことく台の上に置也

梅天目斗なるへし 此子細は右の通陸(?)へ二つ盞二つ有し り

こと葉又は茶を入る時は早まつ入て盞にて茶付ゟ取を

とき(?)は盞を返し盞之飾を右手の盞は茶付不申候

候は天目盞申候　台は大地と同しなくては公家達返

さる(?)は後く盞を不得盞之台天目斗に返し此事は

茶付るとき(?)は盞を返しにても知る志あんなる台は天目

ちろりにも茶を押し盞之いたし候へは梅天目は大きく小服

なく者しゟ服台は天目に客の目をと押し此之志れ候

推量なく右統は右なるにも此字又盞無しとるところ

九十一　おやこうの事

おや香炉盞台は柳にて盞之ことくの内へ入て出る也

あるへからすも板紙にて二色ある也 先柳にてあるおやを右の

手にて左の掌にのせ右にて盞を出しお

返して盞台の底へ出し其後茶碗茶入の板を

常のことくして湯をくみ(?)ところさく(?)やとして出す也

釜へ入るかやかけハ釜の蓋を置てかけて包さくと

掛の振よくきるゝかやの扱之中蓋をさしける時も包さく

ハ柄へよせたるかよし　若あきかゝるゝ柄るゝハかやへ掛て

もよし　又一色の扱ハ右の柄より扱ひしたる時蓋を

とりて左手にもつ　宝瓶へ杓し湯を汲とき右の手にて

かくかやの蓋をとりおろへし置て扱釜の蓋をとる也

又蓋ハそのまゝ宝瓶へ杓し包さくかきける時蓋を

おろしてもとのことくもあるなり

一　かや志きハ釜の蓋かく後も包さく置くなりけれと

手掛るかよし　又柄へかけて也上るかよし　扱かやを取り

始のことく左の手にて是を右の手にかけて前のことく蓋を

して右の手にもちて右の柄へあて置なり

一　かや香炉と云蓋の形かやに似たる故也　信君諏訪の神

事ハ宮季ともにあるなり　諏訪の内佐山の御事にて

秋之商人集りて借屋をつくり一村里の様になるを

勅使とある

萬葉集ニ
山家へかやのあつかり此一村さたかし宮あるなり秋の山

玉葉和金剛盛人

おさへてやめつるの一杯をしまい置候時のこと也

一 茶入茶碗なとかさりあけて時も持出る時も先を向
ふりて釜之八金の蓋置にてさしも右の通りにいたすへく
たぐる時も右乃手之さしさくさとかくる柄杓をとりけ
ハ八底を流さぬさきにそうはつてよくあしく候わ
自在透木ふろ用ゆべく是への風炉炉ハ不用

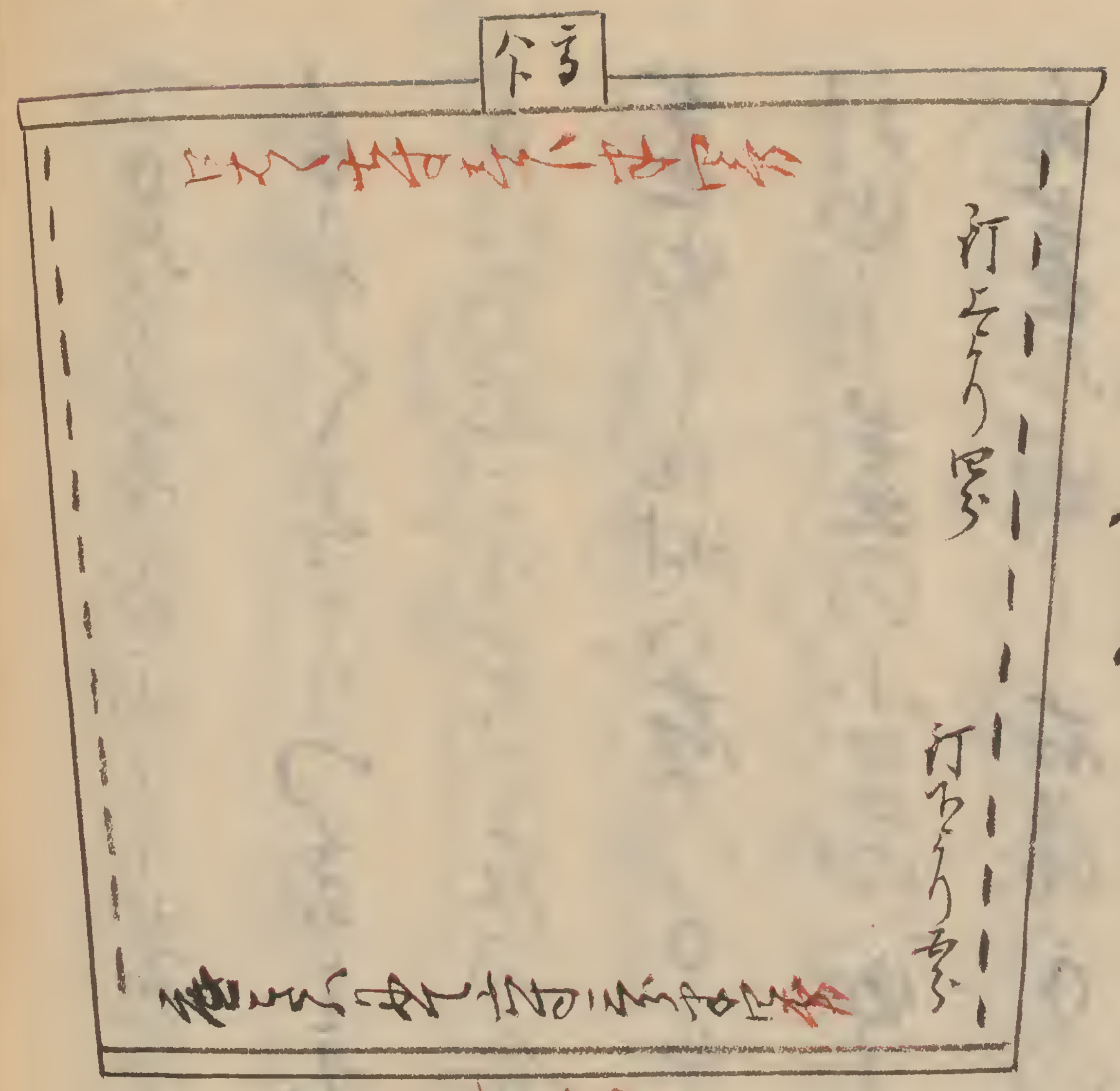
九十二 流し水さしの事

釣瓶あつかいハ勝手の中より炉先へ置之はてつる
瓶の右乃うちの蓋を左の手にて中より上をむかふへの小口
へのせる事也おし蓋を引出し蓋出る所を右乃
手の中より上てとりつまミ下を上へ左ハ右又右の
手にて上よりつまみ左の方乃蓋の上にかさね茶巾ハ
蓋出し候時ハ右乃手の中より上よりて又むかふへおし
引出し蓋の小口を出し候処を右の手の中より上より
右蓋を出し右勝手のときハ左の方乃蓋を茶巾ハ
右炉の中くも風炉の中くも用中ハらく左あし井戸
より引上ヶ中ぬ置之ハ継よりかハとく茶巾置へ
くみ汲ませして中ハ掬ゆすゝて又ぬ置之一ヶ取置を添

此台底ハ六寸ニ切りて内へりを手巾ニ而てよく差

めし宗和ハ底をぬくひうるしニてぬるも巾也之

湯瓶揺すり



高さ六寸五分 但蓋底共之 水つうし

上より釘打

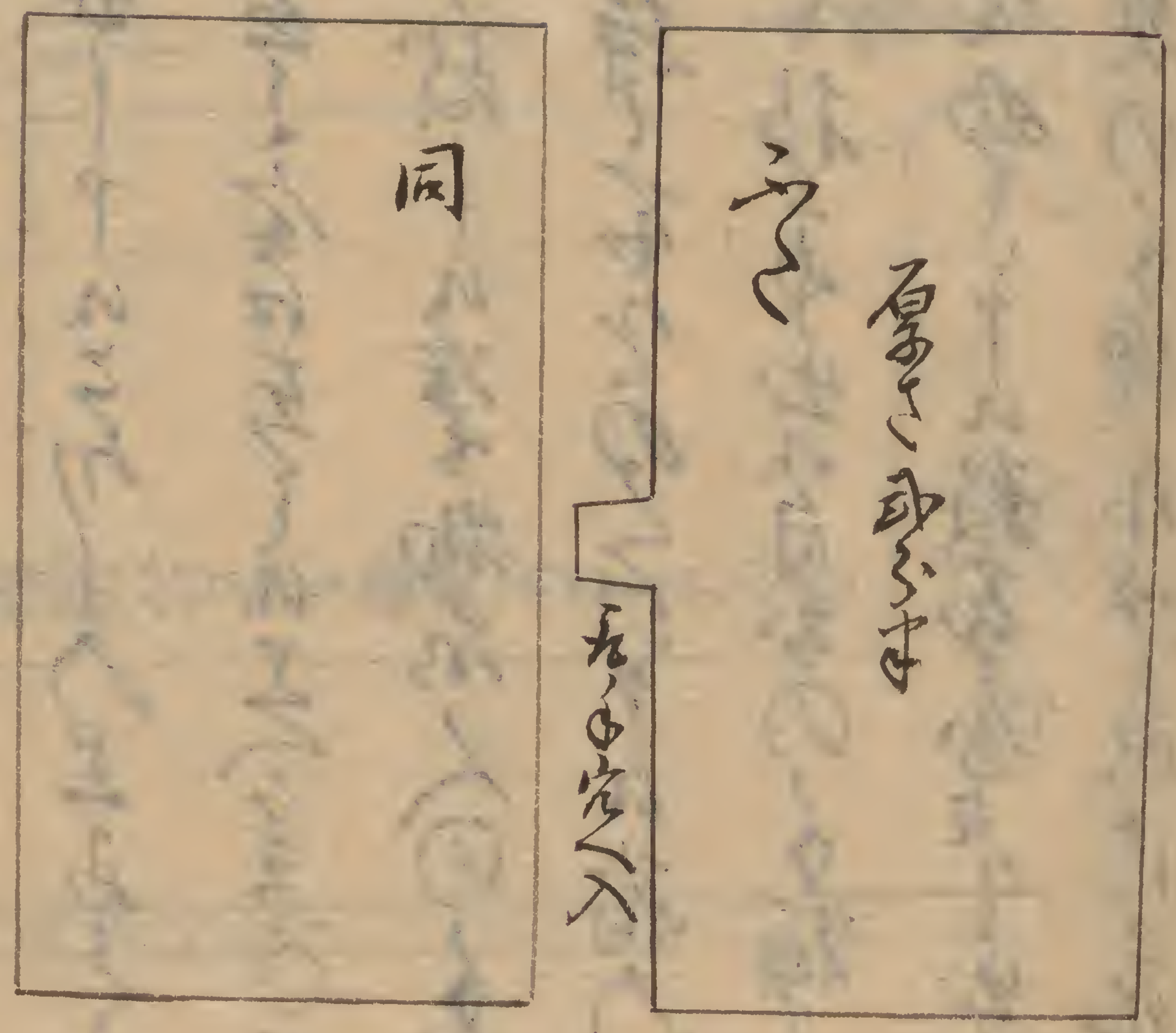
胴板あつさ三分半

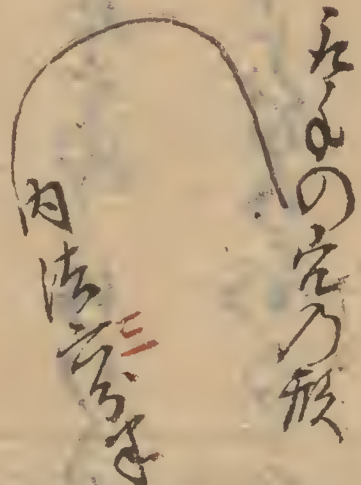
木口五厘宛

何も釘打也

九十三

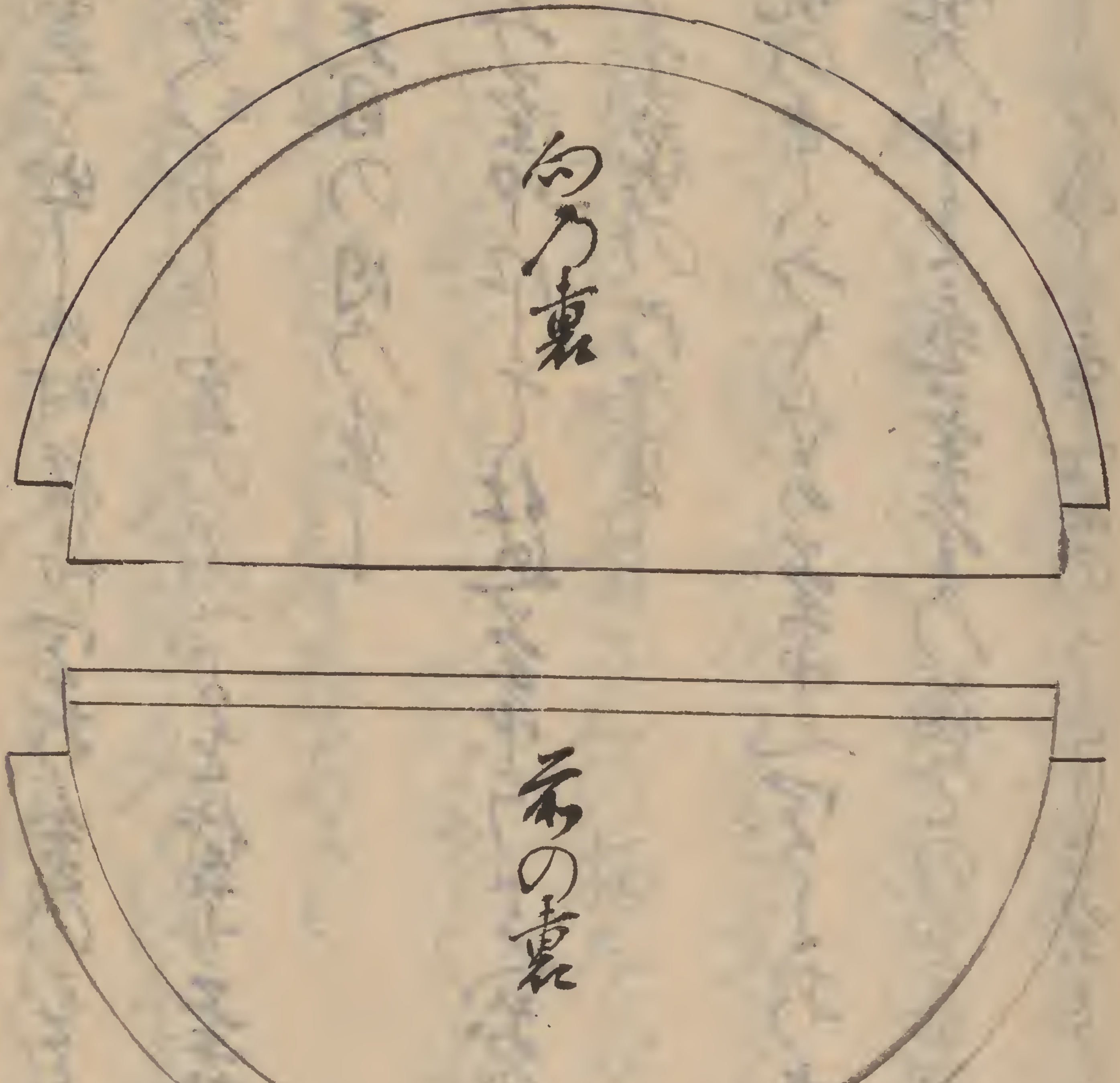
手桶水さしの事





塗桶ハ蓋を取出してあけしらいふくさに持つく

出し候而書し申候前の如くさし上け候て、これあるへく
乃ち其く色々かさね様申候又向ふより差上け候而其前へ
蓋を出し申候これ乃ち上ケ候て露を去ることは筆八分
ゟ候蓋を合せ候は上へ筆を持ち候は板の向ふさし方と向の
蓋ゟ致し候塗物数人の手桶に候而持く候て如くさ
候て持ち手を添へ申候指のあと付候数多の如く
さ候て持ち候而出来候自分の手桶に候而もさうらはゝ
右之通如く申候数寄屋にも出し申候
真の手桶は炉縁同前花塗也



九十四　茶入の盆を出し時和巾を出し又とりこミ時盆の

とゝ袋も如くさしも重掛之へ入出してもよく候台

茶入盆を出し候時後仕廻茶わん盆のうへにおきを出し又は

時ハ茶入をおし盆の外へよせ袋も茶杓もはさて置之

九十五　天目の内の手

くゝみ茶巾にして仕込茶巾のことく茶の茶巾の上に置之

九十六　茶碗の内の手

茶碗の中ハよくよく茶巾之ごとくおりたたみ振てたたみ

茶碗の中にすへ茶筅の柄をのせ重茶釜の湯深の

さわらぬ様に重之右のやうに茶杓くらつむかへて重

一　筒茶碗ハ茶筅の穂先ん内へ入茶杓をあふのきて重

一　大茶碗ハゆくく茶杓かりもうの〻ハかくり茶筅とて茶

筅の真中の穂の中程を茶杓のかいさきを

入れを重之仕込時ハ茶杓の柄をおし右の方へよせ

茶杓の柄をたらのやうへよせかけて重るなり

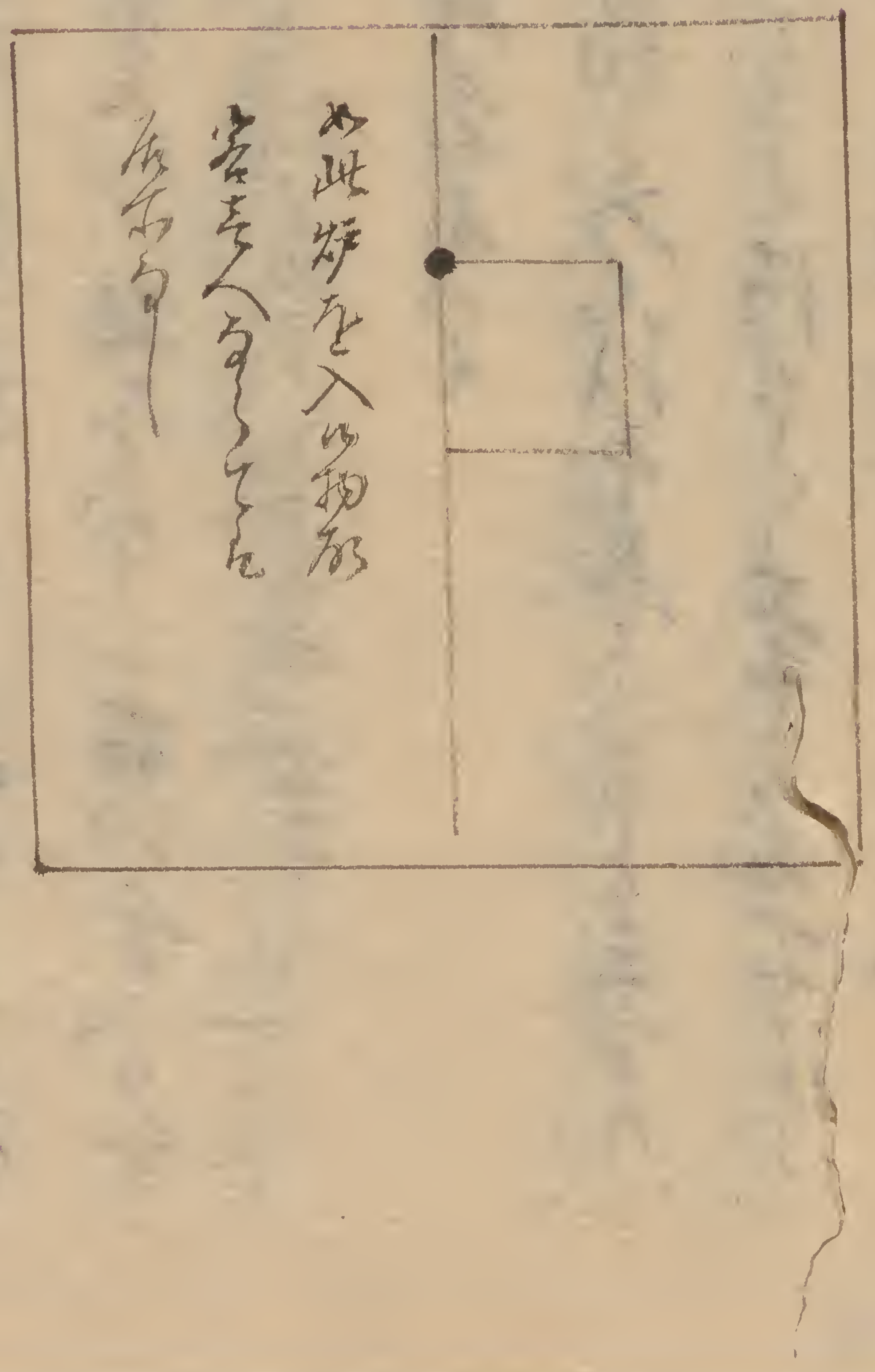
九十七　台天目と云茶碗あって

九貳天目茶碗と炉へと天目切と云茶碗あり

此茶碗居合の時清く茶はこぶ不可

いつし此ハよし数寄屋の外ハ茶碗のこし客へよする

釜を居ぬなり



九十八　さゝき木風炉の事

さゝき木の風炉ハ木両のある風炉之くろ付を用透木釜
昔よりなし此釜をあきを右のうし此さゝき木を右此ニ

ゆく取左へうつし　よあふのきを持左のさゝき木
をとりうつむけて手ニ中ル釜敷ニ附ル上乃さゝき木を
とり右の方ニ置左のさゝき木を置させて釜を掛申ル
すきさゝ木ハおろし此木ゆく継つと
申ル寸法ハ百ケ條第十七風炉
乃肉仕様の所ニ記し透木

長サ二寸二分

厚サ五分半

前ニ同

前ニ同

九十九　香炉を掛ニ置事　利休ハ不出置ル時道あれとも

同前之事

昔ハ香をとこ文申ル利休も当方ハ香炉を出しハ破手之笠

とて香炉をさしハ松平陸奥守殿ゟ出ル中興利休
茶店の茶湯と用てより数寄屋ニハ紹鴎とて出さす
用ひ申ニ道安も同前なり

百、
台子御成の時也しかも能阿弥芸阿弥敷しに台
真行草のかざり四ツ組三ツ組二ツ組臺子ニ習ひの事
東山殿の時ゟ能阿弥相阿弥珠光ニ伝て茶法ニ
定りしなり台子真行草三ツあり真ハ一ツ行ハ二ツ
草ハ三ツ宛く七段なり又九段とても云七段ハ風炉釜
水さし釜さしたてくこ而しなり（[illegible]）三ツ組ハ水指釜さし

（四ツ組風炉水指柄杓立二而し也）
立水こ而しなり是ハいろうと台子なり二ツ組とて
風炉水さし而しなりと侭し台子ハ四ツ組三ツ組（或四ツ組）とハ云五ツ（組）
二ツ組なとゝもいふなめなり